

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅻ

泉南市文化財調査報告書 第二十四集

1993. 3

泉南市教育委員会



## 序 文

大阪府の南部に所在いたします泉南市では、ご存じのように関西国際空港の開港をまぢかに控え、関連開発などが急激に進んでおります。これにともない、埋蔵文化財の発掘調査件数も年々増加・拡大いたしております。

しかし、このような事態においても、文化財を守り後世に残し伝えていくことは、今を生きる私どもに課せられた使命と考えております。

また、この調査の増加は、私たちに新たな郷土の歴史を教えてくれました。中でも今年度は多くの発見があいついだこともあり、泉南市の歴史はゆっくりと、しかし着実にその姿を現してきました。

このように開発がすすめられ、それにともなって調査が増加する。多くの貴重な歴史財産が、その姿を変えられていく反面、彼らは多くの夢を私たちに与えてくれているようです。いつも、このロマンの影に貴重な文化財の破壊が隠されていることを忘れずに、私たちは歴史の楽しさを享受したいものです。

末筆ながら、これまでにご指導、ご協力頂きました皆様に厚く感謝の意を表するとともに、今後もなお一層のご協力をお願いする次第でございます。

平成5年3月

泉南市教育委員会

教育長 赤井 悟

## 例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成4年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当、実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡一彦・松本堅吾を担当者として、平成4年4月1日着手し、平成5年3月31日終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、田上信一、松下徹、愛洲みさ子をはじめ、青木陽子、油野健介、阿波屋昌樹、新井清久、安楽征恵、石川和男、一色和、市川幸司、岩橋良典、上野彰子、上野友紀代、上山剛司、宇沢ちづる、氏田英利、内正昭、梅田佳秀、江尻和歌子、大上文子、大川美佳、大西和歌子、大家優昭、奥亮平、奥野木未央、尾崎昌樹、小野祐子、鹿島紀子、梶本貞之、梶本太昭、川野美貴、久世佐紀子、久保真理、蔵田弘幸、坂本直子、塚田政男、貞持早苗、三宮理代、柴田祐子、真珠久美、高石洋行、高田孝司、田中茂雄、玉置こずえ、玉置由紀、角岡佐緒里、豊島かおり、中津裕之、西清史、野中美佐、長谷典彦、八羽康代、巴山忍、日垣愛、日田光治、平野伸一、藤井美歩、榎谷容子、南野志郎、宮沢薫、宮本佳奈、横井佐絵子、吉井淳、若狭里美諸君らの協力を得た。

また、広瀬和雄、芝野圭之助、森屋直樹、土井孝之、鈴木陽一、三好義三、向井俊生、谷美光諸氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は仮屋・岡田・石橋・岡・松本が行なった。執筆の分担は目次に記した。編集は仮屋・岡田がおこなった。
5. 出土遺物の写真撮影は、立花正治氏の手を煩わせた。記して感謝の意を表する次第である。
6. 図版トレースは主に愛洲みさ子が、遺物実測は久世佐紀子・真珠久美・横井佐絵子が、図版作成は主に岡田が行ったが、一部小野祐子の協力を得た。
7. 本調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。

## 凡 例

1. 各調査区には個別の番号をつけている。番号の基本構成は「遺跡名称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、男里東遺跡－ONE、高田遺跡－KO、幡代遺跡－HT、新家遺跡－SN、下村遺跡－SM、仏性寺跡－BS、岡田東遺跡－OKDE、本田池遺跡－HN、中小路遺跡－NK、狐池遺跡－KIである。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。なお、本報告書では、報告文は遺跡毎に章だてしているため遺跡名称を省略している。
2. 図中の方位は基本的に磁北をあらわしている。ただし、挿図第1・3～13・15～20・22～25図、および図版PL. 1～4では真北を表示している。
3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+値（m）である。
4. 遺構名称はアルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットはSB－建物、SD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。
5. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、須恵器－黒塗り、弥生土器・土師器・陶器－白抜き、瓦器・瓦質土器－トーンのように塗り分けた（弥生土器・土師器・陶器が同じ表示であることには、なんら意味はない）。
6. 遺物実測図版および挿図と写真図版では、遺物番号は統一している。
7. 第5表とPL. 1・2の番号は一致させた。
8. 遺物の出土量などをあらわすのに用いたコンテナは内容積約27.5ℓのもの、バスケットは内容積約9.6ℓのものである。

# 目 次

第1章 調査の経過	(仮屋)	1
第2章 男里遺跡の調査		8
第1節 既往の調査	(石橋)	8
第2節 92-1区の調査	(石橋)	10
第3節 92-2区の調査	(石橋)	16
第4節 92-3区の調査	(石橋)	17
第5節 92-4区の調査	(岡)	18
第6節 92-5区の調査	(岡)	19
第7節 92-6区の調査	(松本)	20
第8節 92-7区の調査	(石橋)	22
第9節 92-8区の調査	(岡田)	23
第10節 92-9区の調査	(岡)	24
第11節 91-14区の調査	(石橋)	25
第12節 91-15区の調査	(岡田)	26
第13節 91-16区の調査	(岡田)	27
第14節 91-17区の調査	(岡田)	29
第3章 男里東遺跡の調査		31
第1節 既往の調査	(石橋)	31
第2節 92-1区の調査	(石橋・岡)	31
第4章 高田遺跡の調査	(松本)	33
第1節 既往の調査		33
第2節 92-1区の調査		34
第5章 幡代遺跡の調査		38
第1節 既往の調査	(岡)	38
第2節 91-4区の調査	(岡田)	39
第6章 新家遺跡の調査	(岡田)	41
第1節 既往の調査		41

第2節 91-1区の調査 .....	43
第7章 下村遺跡の調査 .....	(石橋) 45
第1節 既往の調査 .....	45
第2節 92-1区の調査 .....	46
第8章 仏性寺跡の調査 .....	50
第1節 既往の調査 .....	(松本) 50
第2節 92-1区の調査 .....	(岡田) 51
第9章 岡田東遺跡の調査 .....	(石橋) 54
第1節 既往の調査 .....	54
第2節 91-1区の調査 .....	55
第10章 まとめ .....	(岡田) 63

## 挿 図 目 次

第1図	男里遺跡92-1・92-2・92-3区地形図	10
第2図	男里遺跡92-1区S D03土器出土状況	13
第3図	男里遺跡92-4・91-14区地形図	18
第4図	男里遺跡92-5区地形図	19
第5図	男里遺跡92-6区地形図	21
第6図	男里遺跡92-7区地形図	22
第7図	男里遺跡92-8区地形図	23
第8図	男里遺跡92-9・91-15区地形図	25
第9図	男里遺跡91-16区地形図	28
第10図	男里遺跡91-17区地形図	29
第11図	男里東遺跡92-1区地形図	32
第12図	高田遺跡調査区位置図	34
第13図	高田遺跡92-1区地形図	35
第14図	高田遺跡92-1区出土の土器	36
第15図	幡代遺跡調査区位置図	39
第16図	幡代遺跡92-2・92-3・91-4区地形図	40
第17図	新家遺跡調査区位置図	42
第18図	新家遺跡91-1区地形図	44
第19図	下村遺跡調査区位置図	46
第20図	下村遺跡92-1区地形図	47
第21図	下村遺跡92-1区出土の土器	49
第22図	仏性寺跡および大苗代遺跡調査区位置図	51
第23図	仏性寺跡92-1区地形図	52
第24図	岡田東遺跡調査区位置図	55
第25図	岡田東遺跡91-1区地形図	56
第26図	岡田東遺跡91-1区基本層序	56
第27図	岡田東遺跡91-1区S B01・02平面図	58

第28図	岡田東遺跡91－1区S B01・02断面図	59
第29図	岡田東遺跡91－1区出土の土器	61

## 表 目 次

第1表	発掘および試掘届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	5
第4表	立会調査一覧表	6
第5表	文化財一覧表	66

## 図 版 目 次

PL. 1	泉南地域の文化財
PL. 2	泉南地域の地形分類
PL. 3	男里遺跡および男里東遺跡調査区位置図
PL. 4	本田池遺跡・中小路遺跡・狐池遺跡調査区位置図
PL. 5	男里遺跡92－1区平面図および断面図
PL. 6	男里遺跡調査区①
PL. 7	男里遺跡調査区②
PL. 8	男里東遺跡92－1区平面図および断面図
PL. 9	高田遺跡92－1区平面図および断面図
PL. 10	下村遺跡・幡代遺跡・新家遺跡・仏性寺跡調査区
PL. 11	岡田東遺跡91－1区平面図
PL. 12	男里遺跡92－1区出土の土器
PL. 13	男里遺跡92－1区①
PL. 14	男里遺跡92－1区②
PL. 15	男里遺跡92－1区③
PL. 16	男里遺跡92－2・3区

- PL. 17 男里遺跡92-4・5区
- PL. 18 男里遺跡92-6・7区
- PL. 19 男里遺跡92-8・9区
- PL. 20 男里遺跡91-14・15区
- PL. 21 男里遺跡91-16・17区
- PL. 22 男里東遺跡92-1区
- PL. 23 高田遺跡92-1区①
- PL. 24 高田遺跡92-1区②
- PL. 25 幡代遺跡91-4区・新家遺跡91-1区
- PL. 26 下村遺跡92-1区・仏性寺跡92-1区
- PL. 27 岡田東遺跡91-1区①
- PL. 28 岡田東遺跡91-1区②
- PL. 29 岡田東遺跡91-1区③
- PL. 30 男里遺跡92-1区出土の土器①
- PL. 31 男里遺跡92-1区出土の土器②
- PL. 32 下村遺跡92-1区・岡田東遺跡91-1区出土の土器

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書 X

## 第1章 調査の経過

本市沖合いでは、平成6年の開港に向け急ピッチで関西国際空港の建設事業が、行われている。当然の如くここ数年来関連する開発件数の増加は、目を見張るものがある。また、直接的に空港関連として位置付けられるものの他に道路新設に伴い移転となった個人住宅等の代替地への建設も目に見えて多くなってきている。開港後は、更に民間などを中心に開発の波が遺跡に対し容赦なく押し寄せて来ることは、容易に想像できる。

このような状況のもと、今年度も市域の各所において、個人住宅建設等に伴う調査を実施した。以下、調査対象となった遺跡ごとにその経過を簡単に触れることとする。

先ず男里遺跡であるが、当該遺跡はここ十数年来の行政機関を中心とした調査の実施により、様々な情報が獲得されている。しかし、長径1.5km、短径1.2kmに及ぶ広大な範囲のなかでは、いまだ不分明なところが多い。

さて本年度も遺跡内において、10カ所の発掘調査をおこなった。このうち氾濫原部での調査が7カ所（第1～5・7・10区）、沖積段丘面縁辺での調査が3カ所（第6・8・9区）となっている。

男里東遺跡は、今年度の調査が契機となり新規に発見された遺跡である。1カ所のみ調査で、僅かに平安時代の黒色土器片が出土した他、時期性格など不明な遺構の検出であった為、十分なデータの獲得とは言えなかったが、今後の当該遺跡のもつ内容を究明する手がかりには、なっている。

高田遺跡は、ごく近年の分布調査により遺跡としてとらえられたもので、地域の西を限る男里川右岸に位置し、地形分類上からは、男里川によって形成された自然堤防、氾濫原、或は男里川の旧河道にまたがっている。今回は、旧河道付近での調査を実施した。

幡代遺跡は既存の調査データから、寺院を中心とした平安時代後期から中近

世に至る遺跡であることが認識されていた。本年度は推定寺域の東部分で個人住宅建設に伴い2カ所の調査を実施した。小面積の調査ではあったが、遺跡の内容の一端を知る上で貴重な資料は得られた。

下村遺跡は、高田遺跡同様に分布調査により発見された。発掘調査としては、今回の個人住宅建設に伴う調査が最初となったが、中世包含層の存在や近世「カマド」跡の検出等みるべき成果は多かった。

仏性寺跡の発掘調査も決して多きを数えないが、過去の調査において、多くの中世屋瓦と寺院関連の整地層の存在が確認されている。今年度は、ただ1カ所ではあるが、遺跡のほぼ中心部にあたる位置で調査を実施した。

以上の各遺跡における調査区、位置、申請者、規模、用途、調査年月は第2表に示したとおりである。

第1表 平成4年度発掘及び試掘調査届出一覧表

平成5年2月26日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )	件 数	面 積(m <sup>2</sup> )
4年・3	4	350.91	0	0	4	350.91
4	1	510.40	0	0	1	510.40
5	5	1,278.36	4	4,081.55	9	5,359.91
6	7	12,680.47	7	7,578.36	14	20,258.83
7	5	1,343.70	4	5,863.56	9	7,207.26
8	3	22,296.23	6	19,506.20	9	41,802.43
9	7	6,529.98	2	2,181.00	9	8,710.98
10	2	2,594.094	6	5,435.73	8	8,029.824
11	6	3,734.06	6	17,008.08	12	20,742.14
12	6	3,444.47	3	1,845.44	9	5,289.91
5年・1	5	1,470.21	1	1,350.00	6	2,820.21
2	5	11,471.76	3	12,343.17	8	23,814.93
合 計	56	67,704.644	42	77,193.09	98	144,897.734

## 第2表 発掘調査一覧表

平成5年2月26日現在

No	遺跡名	地区名	位置	申請者	面積(m <sup>2</sup> )	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	92-1区	男里		760.00	個人用倉庫 新築に伴う 掘壁工事	4年7月	本書掲載
2	男里遺跡	92-2区	男里		760.00	個人用倉庫	4年9月	同上
3	男里遺跡	92-3区	男里		613.00	住宅新築	4年7月	同上
4	男里遺跡	92-4区	男里		191.00	農業用倉庫	5年1月	同上
5	男里遺跡	92-5区	男里		547.90	住宅新築	4年4月	同上
6	男里遺跡	92-6区	樽井		259.22	住宅新築	4年10月	同上
7	男里遺跡	92-7区	樽井		627.00	自家用倉庫 付店舗	4年9月	同上
8	男里遺跡	92-8区	馬場		305.91	住宅新築	4年4月	同上
9	男里遺跡	92-9区	幡代		132.23	住宅新築	4年8月	同上
10	男里遺跡	92-10区	男里		301.50	住宅新築	5年2月	現在整理中
11	男里遺跡	91-14区	男里		129.17	住宅新築	4年2月	本書掲載
12	男里遺跡	91-15区	幡代		356.80	住宅付 倉庫新築	4年2月	同上
13	男里遺跡	91-16区	男里		213.41	住宅新築	4年3月	同上
14	男里遺跡	91-17区	馬場		286.41	農業用倉庫	4年3月	同上
15	男里東遺跡	92-1区	樽井		915.35	倉新築	4年7月	同上
16	高田遺跡	92-1区	男里		3,060.00	分譲住宅	4年7月	同上
17	幡代遺跡	92-1区	幡代		630.00	道路拡幅	4年10月 ～12月	別書掲載
18	幡代遺跡	92-2区	幡代		173.37	住宅新築	5年2月	現在整理中
19	幡代遺跡	92-3区	幡代		501.46	住宅新築	5年2月	同上
20	幡代遺跡	91-4区	幡代		678.58	倉庫新築	4年2月	本書掲載
21	木田池遺跡	92-1区	樽井		987.10	事務所付倉庫	4年4月	トレンチ2カ所設定したが遺構・遺物は検出されなかった。(PL.4)
22	上代石塚遺跡	92-1区	信達牧野		21,719.00	大規模店舗	1次4年9月 2次4年12月	現在継続中
23	新家遺跡	91-1区	新家		696.45	住宅新築	4年2月	本書掲載
24	下村遺跡	92-1区	新家		102.45	住宅新築	4年11月	同上
25	中小路遺跡	92-1区	中小路		2,799.00	事務所及び 工場	4年8月	トレンチ2カ所設定したが遺構・遺物は検出されなかった。(PL.4)
27	中小路西遺跡	92-1区	中小路		1,0617.00	宅地造成	5年2月	現在継続中
28	仏性寺跡	92-1区	信達市場		481.66	事務所及び 店舗	4年11月	本書掲載
29	大苗代遺跡	91-4区	信達大苗代		715.00	共同住宅	4年2月	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は検出されなかった。(第22図)
30	岡田東遺跡	91-1区	北野		764.21	店舗新築	4年2～ 3月	本書掲載

No	遺跡名	地区名	位置	申請者	面積 (㎡)	用途	調査年月	備 考
31	岡田西遺跡	92-1区	岡田		11,228.00	道路改修	4年11～ 5年3月	別書掲載
32	狐池遺跡	92-1区	大苗代		201.44	事務所併用 住宅	4年10月	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は検出されなかった。(PL.4)

### 第3表 試掘調査一覧表

平成5年2月26日現在

No	遺跡名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月日	備 考
1	範囲外	信達市場		980.08	事務所付貸倉庫	4年3月25日	トレンチ3カ所設定。地山は黄灰色礫混粘土質。遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	新家		750.84	共同住宅	4年5月12日	トレンチ1カ所設定。遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	樽井		1,471.76	パチンコ店	4年5月26日	トレンチ3カ所設定。盛土が著しくほとんど掘削できなかった。遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	樽井		324.73	貸店舗	4年5月28日	トレンチ1カ所設定。盛土下は海岸の砂である。遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	樽井		990.06	共同住宅	4年6月11日	トレンチ1カ所設定。若干の旧耕土層を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	信達牧野		796.30	共同住宅	4年6月25日	トレンチ1カ所設定。床土下はすぐ礫層の地山を検出。遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	樽井		915.35	寮新築	4年7月3日	トレンチ1カ所設定。遺構・遺物を確認し、本調査を行う。新規発見遺跡(男里東遺跡)
8	範囲外	樽井		982.94	ガソリンスタンド	4年7月13日	トレンチ2カ所設定。攪乱が著しく遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	新家		687.18	共同住宅	4年8月26日	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	信達市場		625.17	店舗新築	4年9月1日	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	信達牧野		369.90	住宅付医院	4年9月16日	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	樽井		443.29	共同住宅	4年9月28日	トレンチ1カ所設定。盛土下は海岸のヘドロと砂であった。遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	信達市場		981.00	共同住宅	4年10月14日	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	信達牧野		1,145.44	共同住宅	4年10月23日	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	樽井		476.61	銀行新築	4年11月17日	トレンチ2カ所設定。わずかな旧耕土が認められたが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	信達牧野		1,314.53	共同住宅	4年11月25日	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	馬場		922.02	宅地造成	4年11月26日	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	樽井		10,000.00	(仮)総合福祉文化センター	4年12月2日～6日	トレンチ5カ所設定したが明確な遺構は確認できなかった。遺物は出土していない。
19	範囲外	信達市場		994.05	共同住宅	4年12月10日	トレンチ2カ所設定。若干の旧耕土がみられたが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	信達牧野		830.93	共同住宅	4年12月15日	トレンチ1カ所設定。若干の旧耕土がみられたが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	信達市場		998.25	共同住宅	4年12月22日	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
22	範囲外	樽井		2,970.00	宅地造成	5年1月22日	トレンチ4カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
23	範囲外	男里		1,350.00	道路新設	5年1月25日	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。
24	範囲外	樽井		770.80	共同住宅	5年2月16日	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。

## 第4表立会調査一覧表

平成5年2月26日現在

No	遺跡名	位置	申請者	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	男里遺跡	男里		60.00	道路・水路補修	4年3月9日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	天神ノ森遺	男里		210.12	個人住宅	4年3月11日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	新家古墳群	兎田		187.22	個人住宅	4年3月31日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	男里遺跡	男里		11.00	ガス管理設	4年4月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	新伝寺遺跡	北野		37.38	ガス管理設	4年6月2日	遺物包含層を確認し、土師器片、瓦器片などを採集した。
6	高田山古墳群	幡代		216.38	個人住宅	4年6月18日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	新伝寺遺跡	北野		377.80	ガス管理設	4年6月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	北野遺跡	北野		16.80	ガス管理設	4年6月24日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	新家古墳群	兎田		7,505.00	ボーリング調査	4年6月29日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	幡代遺跡	幡代		90.00	水路改修	4年7月1日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	岡中西遺跡	信達岡中		1,453.34	ガス管理設	4年8月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	男里遺跡	男里		445.00	下水道工事	4年9月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	根来街道	信達牧野		500.00	歩道新設	4年10月12日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	仏性寺跡	大苗代		357.50	ガス管理設	4年11月4日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	中小路西遺跡	中小路		4,230.97	駐車場新設	4年12月10日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	前田池遺跡	幡代		93.60	水路工	4年12月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
17	フキアゲ山東遺跡	兎田		181.29	個人住宅	4年12月24日	遺構・遺物は確認されなかった。
18	海宮宮池遺跡	信達市場		2,166.584	社会福祉施設	5年1月6日	遺構・遺物は確認されなかった。
19	芦谷池	信達市場		600.00	堤体改修	5年1月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
20	増田池	信達岡中		350.00	堤体改修	5年1月27日	遺構・遺物は確認されなかった。
21	奥池	新家		91.00	堤体改修	4年1月29日	遺構・遺物は確認されなかった。
22	男里遺跡	男里		344.30	水路工・舗装工	5年2月2日	遺構・遺物は確認されなかった。

No	遺跡名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月日	備 考
23	根来街道	信達金熊寺		1,301.40	ガス管理設	5年2月12日	遺構・遺物は確認されなかった。
24	岡中遺跡	信達岡中		178.67	水路工・舗 装工	5年2月18日	遺構・遺物は確認されなかった。

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P L. 1・2・3）

男里遺跡は長辺約1.5km、短辺約1.2kmにもおよび、泉南市域では最大の遺跡である。地形的には男里川右岸に位置している。沖積段丘、氾濫原、自然堤防、旧河道などによって構成されており、まさに男里川によって育まれた遺跡であるといつて良いであろう。

時代を追つて述べてゆきたい。縄文時代では、遺跡北部で晩期の滋賀里Ⅲ～Ⅳ期に相当する遺物が出土し、遺構が確認されている<sup>①</sup>。縄文時代の遺構・遺物は、市域全体を見ても一時期の遺物の出土をみるだけで、男里遺跡においてもかなり限定的に遺跡が展開していたと考えられる。この時期以降の遺構・遺物の確認は、再び途絶えることとなり、弥生時代へそのままつながつていった可能性は低いのである。

弥生時代においては遺跡の状況は一変する。遺跡内での最古の弥生土器は現在のところ前期の中段階から新段階に比定されている。同じ泉州の各地域においてもほぼ中段階をもって弥生時代が始まっており、泉南市域でもほぼ同時に水稲耕作が開始されたと考えて良いであろう。中期になると遺構・遺物の確認例は飛躍的に増加する。特に双子池を中心とした遺跡中心部から南東部で竪穴住居、木棺墓など数多くの集落に関係した遺構がみられる<sup>②</sup>。この付近は氾濫原ないしは旧河道上にあつており、水利がよく肥沃な部分に水田を営む一方、洪水を避け、安定した微高地を選んで集落を形成していたものと考えられる。また遺構・遺物の増加は、拠点集落が生産力の発展に伴いムラが拡大していった証拠となるものであろう。さらに、昨年度は現状で考えられていた地域よりさらに南側のほぼ幡代遺跡と接する付近の沖積段丘面上でも弥生時代中期から古墳時代後期にまで至る埋積谷も確認されておる<sup>③</sup>、弥生時代における遺跡の展開は今後さらに膨らむ可能性もある。中期末から後期になると一時的に現段階では遺構・遺物はほとんど確認されていない。一方、時を同じくして男里川の支流である金熊寺川の流域には滑瀬遺跡などの高地性集落の範疇に含まれる遺

跡がみられるようになる<sup>④</sup>。滑瀬遺跡は短期間の集落ながら竪穴住居が20棟以上確認されている。同水系であり有機的な結合が想定され、今後周辺の遺跡の動向も含めて検討されなければならない。

古墳時代でも遺構・遺物の分布は弥生時代と大きく変わることがないとみられてきた。古墳時代後期になると遺跡北部など弥生時代にはあまり分布しなかった地域まで遺構・遺物がみられるようになる。遺跡北部の府道堺阪南線沿いの北側では、小石室や土器が比較的まとまって出土していた<sup>⑤</sup>。しかし、散発的でデータ不足の感があったが、今年度報告分では多くの古墳時代後期の遺物と遺構が確認されることとなり、古墳時代後期では男里遺跡のかなり広い範囲で集落が展開していたことが言えるようになった。

古代においてもそれほど大きな変化は見られないとあって良いであろう。そんな中で最も代表的なものは双子池の西側で奈良時代の倉庫と考えられる掘立柱建物が検出されていることである<sup>⑥</sup>。

男里遺跡で最も遺構・遺物の分布が広がるのは中世以降である。ほぼ男里遺跡の全域で遺構・遺物が確認できるようになる。特に、現在の男里集落と遺跡西辺部に当たる現在の馬場集落を中心としている。確認された遺構は、掘立柱建物はもちろんのこと、土坑墓や地鎮遺構<sup>⑦</sup>など多種多様に及んでいる。遺物としてはそのほかの時代とも共通するが、特に中世において強くみられるのは紀伊の影響を受けた土器が多く出土することである。また、中世のある一時期をもって集落地が一カ所に集中するようになる、いわゆる「集村」現象がみられる。これが近世以降に成立する男里村、馬場村へつながってゆくのであろう。そのため、他の地域は近世以降、現代に至るまで水田へと姿を変えている。

男里遺跡は、現在までさまざまな調査が行われデータが蓄積されてきた。しかし、各時代とも依然として不明確な部分ばかりであると言って良い。それはいずれも調査が小規模なものであったためである。しかし、その反面、遺跡が大規模に損なわれることを防いできたとも言えるのである。今後とも小規模な調査が行われ、それら成果をつき合わせることによって各時代のさらなるデータの増加が遺跡全体の解明へつながって行くものと期待される。

## 第2節 92-1区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第1図)

調査区は男里遺跡の中心部北寄り、双子池の北方約100mの水田内に位置する。92-2区は同じ敷地内、92-3区は北東に近接する調査区である。

これまで付近の水田では数件の調査が行われてきたものの、大半は旧耕土の下層に河川性堆積の砂礫層が検出されていた。そのため今回も当該調査区は男里川の旧河道もしくは氾濫原の存在が推定された。しかし調査の結果、3カ所設定したトレンチのうち第1トレンチで初めて旧耕土下において安定したシルト層の面を確認し、遺構を検出することになった。



第1図 男里遺跡92-1・92-2・92-3区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 5・13・14)

第1トレンチは、遺構が検出されたため拡張を行ない、L字型になった。

現代の耕土(約20cm)、床土(約5cm)を除去すると部分的には存在しない層もあるが、厚さ約20~30cmで数層の旧耕土がみられる。またトレンチ北方に

存在する18層などは、拳大の礫を含んだ粘性土で整地層ととらえられる層も確認されている。これら旧耕土を掘削すると、7層の黒褐色シルト層が検出された。また部分的にこの層の上層に17層が約20cmほど認められるが、ほとんど7層と同じである。これらの層の上面で第1面である上層遺構群を検出している。この黒褐色シルト層を掘削する途中、部分的に拳大の円礫が多くみられ、多くの遺物の出土をみた。これらの層の下層には、8層の暗黄褐色のシルト層が検出される。7層の土よりきめが細かく粘性を持つ土質で、礫を全く含んでいない。この層が下層遺構のベースとなる。

さらにこの8層を掘り進むと約80cmほどで微砂質に変化し、約1mほどで灰色系の河川性堆積の砂礫層が部分的に入るようになる。

遺物は、旧耕土層からは中世から古墳時代後期の須恵器、土師器片が少量出土している。17・7層の黒褐色シルト層からは、古墳時代後期（6世紀末）までの須恵器、土師器、製塩土器など最も多くの遺物が出土している。下層遺構のS D03出土の遺物よりはやや新しいもののさほどの時期差は認められず、S D03が埋まった時期と17・7層が形成された時期はほとんど変わらないといえる。

下層遺構のベースである8層の暗黄褐色シルトからは古墳時代後期の遺物は出土していない。遺構面の最上層数cmのところから古墳時代前期の甕と小型丸底壺（15・13）が出土しており、下層の微砂層や砂礫層からは庄内期の甕、弥生時代中期の壺などが出土している。

第2トレンチは、現代耕土（約15cm）、床土（約10cm）、黄灰色シルトの旧耕土層（約30cm）下層には第1トレンチの上層遺構面に相当すると思われる暗褐色シルト層が約20cm確認されている。しかしこの層が存在するのは、トレンチの南半分だけで、残りの部分は砂礫層が検出され、著しい湧水にみまわれた。また暗褐色シルト層の下層は、全面砂礫層となった。いずれの層においても遺構は検出されなかった。遺物は旧耕土中より中世の須恵器片が少量出土している。

第3トレンチは、現代耕土（約20cm）と床土（約10cm）の下層には黄灰色シルト（約20cm）、黄橙色シルト（約10cm）、灰黄色シルト（約10cm）などの数層

の旧耕土が存在する。それらの下層には砂礫層が検出され著しい湧水にみまわれた。遺構・遺物は確認されなかった。

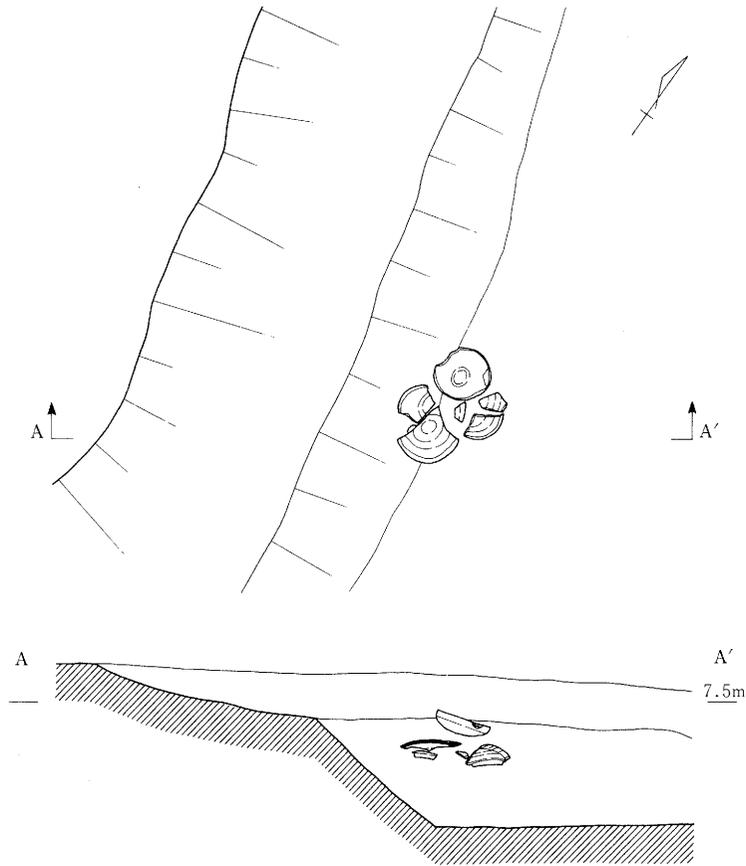
### 3. 遺構（P.L. 5・15、第2図）

遺構は、第1トレンチだけで検出された。上層面のS D01は、ほぼ南北の方向へ直線に走る溝で幅約15cm、断面は凹面形を呈するが、深さ約5cmとかなり浅いものである。埋土は暗灰色砂質シルトで、耕作に伴う鋤溝の可能性が高い。S X01・02も埋土は同様に暗灰色砂質シルトであるが、遺構の性格は不明である。

S D02はS D01とはやや方向を異にし、北北西から南南東の方向へ走っている。幅約1.4mを測るが、遺構の輪郭は大きく乱れている。断面形は、両側から中央に向かって緩やかに落込み、中央部の幅約50cmだけ、逆台形状に急激に落ち込んでいる。最深部は、約40cmを測る。埋土は、急激に落ち込む下層部分だけ、かなりゆっくりした水流によると思われる灰色粘性土が堆積している。一方、上層はシルト層と粗砂層が互層になっていることから上層は再掘削された後の埋土のようである。遺物は古墳時代の遺物もみられるが、中世の土師器や須恵器も出土していることから、この時期以降の遺構であるといえる。なお上層面はトレンチを拡張しているために2回に分けて検出と実測を行なっている。

下層遺構のS D03は、ほぼ南北に向かって検出された。幅約2.1m、深さ約50cmを測る。断面形は、東側の肩はほぼ凹形に落ち込むが、西側は初め緩やかに落ち込みテラス状を呈した後、約2/3の部分で大きく落ち込んでいる。埋土は、最下層には粗砂が堆積し、上層では有機物を含んだ細かいシルトや粘土が堆積している。また、遺構の中央、西側の落ち込みの変化する付近で須恵器の杯・杯蓋などが数点まとまって出土している（第2図）。遺構の底面からはやや浮き上がっており、西側から投棄されたもののようと思われる。

S D02、S D03のいずれも水路であることが想定できる。また方向的にはほぼ南北であり、現在の地形とはあまり合致しないようである。また、S D03からは土師器の甕などの日常雑器がまとまって出土している。しかもそれらは、ほとんど摩滅していないため、この時期の比較的短期間の集落がこのシルト面の広がっているかなり近接した場所に展開していたと考えてよいであろう。



第2図 男里遺跡92-1区SD03土器出土状況

#### 4. 遺物 (P L. 12・30・31)

遺物は、古墳時代後期を中心に弥生時代から古墳時代前期のものも出土している。

1～12はSD03の遺物である。

1～8は須恵器の杯・杯蓋である。1～4は土器群の遺物である。杯が3点で、杯蓋が1点である。いずれもほぼ完形の状態で出土している。杯の口径は12～13cm前後を測り、杯蓋の口径は14.2cmを測る。焼成はいずれも良好である。5は、最下層から出土している。土器群の杯と比べてほとんど差は認められない。焼成は良好で、復元口径は13.8cmを測る。同様に、破片であるが6～8の杯も出土している。いずれも時期的には、ほぼTK43<sup>®</sup>に相当するとみてよいで

あろう。

9・10は土師器の甕の口縁部である。9は最下層から出土している。大きく外側へ開く口縁部である。摩滅のため調整は不明であるが、胎土は白色粒を多く含み橙色を呈する。復元口径は18.2cmを測る。10はさらに大きく外彎しながら外側へ開く。外面は強いヨコナデが残る。また口縁部と頸部の境目には、製作時に折り曲げた痕跡が明瞭に認められる。内面はヨコナデの後ハケ目を施している。復元口径は22.0cmを測る。

11は提瓶または平瓶の口縁部である。ちょうど体部と頸部の境目で割れている。焼成は良好で内面にやや灰をかぶっている。頸部から口縁部までは6.5cmで復元口径は7.8cmを測る。

12は小型器台である。この遺物だけは古墳時代前期に属するものである。受部は欠損している。器台はやや丸みを帯びて広がり、ほぼ中心に穿孔が行なわれている。残存している孔数は2つであるが、もとは3つであったと考えられる。内外面とも摩滅のため調整は不明である。胎土は白色粒を多く含み、にぶい橙色を呈する。

13～17は第2遺構面のベース土となる8層から出土している。13と15は上層から、16と17はやや下層から、14は下層の灰色砂礫層から出土している。

13は布留式に属すると思われる小型丸底壺である。口縁部はまっすぐ外側へ伸び、胴部は球形に近い。内外面とも摩滅のため調整は不明である。胎土はクサリレキ等の砂粒を多く含んでおり、色調は橙色を呈する。

15は同様に、甕である。13と重なり合って出土している。口縁部はやや緩い「く」の字形に折れ、やや内彎して立ち上がる。口縁端部は平坦である。胴部外面は摩滅が著しいがわずかにハケ目が認められ、内面は右上りのヘラケズリを施している。胎土は白色粒やクサリレキを多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。

16と17は庄内期に属すると思われる甕である。16はやや外反して開き、口縁端部は外側へつまみ出されている。胴部は球形に近く、外面は右上りの荒いタタキ、内面はかなり細かいハケ目を施す。胎土は白色粒やクサリレキを多く含み、色調はにぶい橙色を呈する。17は平底で緩やかに立ち上がる底部である。

黒斑を有し、外面はタタキを行なった後すり消している。内面は細かいハケ目を施す。色調は褐灰色を呈する。

14は、弥生中期の壺の口縁部である。上面は平坦で、端部に向かって垂直に拡張されているが端部は欠損している。垂直に拡張された部分に凹線文が2条施され、その上に円形浮文が貼付される。一方、上面平坦部分には列点文を施している。また、径3mmの穿孔が上から下にむけて行なわれている。クサリレキなど砂粒を多く含み、色調は淡黄橙色を呈している。

18～24は17層、25～31は7層から出土している。いずれも第1遺構面のベース土である。

18～20は須恵器である。18は甕の口縁部である。復元口径は19.0cmを測る。19・20は杯および杯蓋である。いずれも灰色を呈した焼成の良好なものである。S D03出土の須恵器とほとんど同形式のものであろう。

21～24は土師器の甕である。

21は口縁部が、やや内彎して「く」の字に立ち上がり、端部はやや内傾する。胴部はやや長胴形になると思われ、内外面とも粗いハケ目を施している。胎土は砂粒を少量含み、色調はにぶい橙色を呈する。22は10と同じく外彎しながら外側へ大きく開く口縁部である。外面は強いヨコナデが残る。内面はヨコナデの後ハケ目を施している。胴部は長胴形で外面は口縁部と同じハケ目、内面はハケ目の後下方から上方へ向ってヘラケズリを施している。胎土は砂粒を多く含み橙色を呈する。復元口径は22.0cmを測る。

23と24は同じような口縁部である。23は口縁部と胴部の境目をほとんど持たず、緩やかに外反し、口縁端部をわずかに折返し整形している。端部外面にハケ目がわずかに残る。胴部は長胴形で外面は全面にハケ目を施している。また、二次焼成の黒斑を有する。内面は縦方向の下方から上方へ向ってヘラケズリを行なっている。胎土は砂粒を多く含み、色調はにぶい褐色を呈する。復元口径は16.8cmを測る。24の方はやや胴部から口縁部への開き方が大きくなるものである。外面は23とほぼ同じであるが内面はハケ目の後にヘラケズリを施している。胎土は白色粒などを多く含み、色調はにぶい褐色を呈する。復元口径は18.0cmを測る。

25～27は杯・杯蓋である。いずれも灰色を呈した焼成の良好なものである。S D03の土器群に比べると、杯は口径がやや小さくなり、立ち上がりが低いものである。杯蓋は稜がほとんどなくなるタイプでわずかに新しいもののようにある。

28は甗である。球形の胴部で頸部は細い。下方には回転ヘラケズリを施し、底部にはヘラ記号を有する。胎土は礫をわずかに含み焼成はやや不良である。

29だけが、弥生時代中期の甕である。口縁部は短く外反し、端部はつまみ上げられている。両面ともヨコナデが施される。胴部外面にはわずかにハケ目が認められる。砂粒をわずかに含み橙色を呈する。復元口径は15.0cmを測る。

30と31は製塩土器である。30は脚部のみで胴部に向って大きく開き、脚部側面には指頭圧痕を施している。胎土は粗く砂粒を多く含み浅黄橙色を呈する。脚台Ⅳ式<sup>⑧</sup>に属するものであろう。31はやや新しいもので口縁部である。丸底Ⅰ式に属するものと考えられる。復元口径は7.2cmを測る。この他に図化は出来なかったがS D03からも、脚台Ⅱ式に相当する製塩土器が1点出土している。

### 第3節 92-2区の調査

#### 1. 位置 (P L. 3、第1図)

92-1区と同一敷地内に位置する。92-1区の第1トレンチからは南西へ約15mの地点である。この地点での旧耕土の下層に、1区と同様の安定したシルト層が存在するかが注目された。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 6・16)

調査の時点では滋味土と床土は失われており、約50cmの盛土を掘削すると旧耕土である灰黄褐色のシルト層が検出された。以下、3層の黄橙色シルト(約20cm)、4層の黒褐色シルト(約10cm)、5層の暗黄褐色シルトと続くが、暗黄褐色シルトが存在するのはトレンチの北半分のみである。南側半分は砂礫層が検出され、大量の湧水にみまわれたため、検出作業は困難を極めたが遺構は検出されなかった。

これを92-1区の第1トレンチの層序と対応させると、4層は7層で上層遺構面、5層は8層で下層遺構面に相当するとみてよいであろう。

遺物は旧耕土層から中世の土師器がわずかに出土しているものの図化できるものはなかった。

#### 第4節 92-3区の調査

##### 1. 位置 (P.L. 3、第1図)

調査区は、92-1区・2区の北東部に接している。設定したトレンチは、92-1区の第1トレンチから北へ約20mに位置する。

##### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 6・16)

層位は、トレンチの全面でほぼ水平の堆積である。現耕土及び灰黄色シルトの旧耕土を約40cm掘削すると灰黄褐色粘性土が約10cm存在する。拳大の礫を多く含んでおり整地土と考えられる。92-1区の第1トレンチでは18層に相当するものと考えられる。

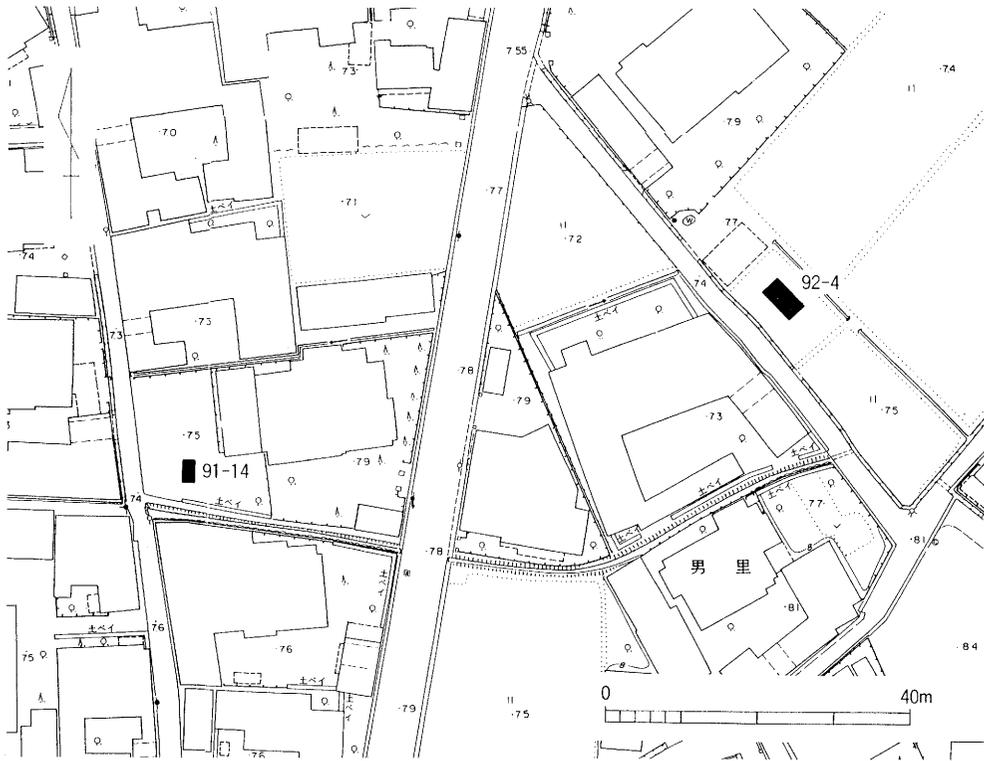
この下層には、黄褐色のシルトが約10cm存在し、5層の暗褐色シルト層に至る。これは、92-1区の第1トレンチにおける上層遺構面に相当すると考えられる。この層の上面で検出を行なったが、遺構は検出されなかった。5層を約40cm掘削すると6層である暗黄色シルト層が表われる。これも同様に、92-1区の下層遺構面に相当するものと思われる。さらに、この層を掘削してゆくと微砂質に変化し、河川性堆積の砂礫層が現われることから層位的には、92-1区の第1トレンチと同じであるといえる。遺構が当該調査区まで展開していた可能性は高いが、このトレンチでは遺構は検出されなかった。

遺物は、旧耕土及び整地層より中世の所産と考えられる須恵器などが極わずかに出土している。6層からは弥生土器や土師器片などが出土しているが、いずれも細片で図化できるものはなかった。

## 第5節 92-4区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第3図)

調査区は男里遺跡の北西部、現在の男里集落を縦断する市道から東へ約50mの地点に位置している。地形分類上は氾濫原上に立地していることになる。最近の調査によって、当地の周辺に水脈の存在が想定されている。<sup>⑩</sup>



第3図 男里遺跡92-4・91-14区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 6・17)

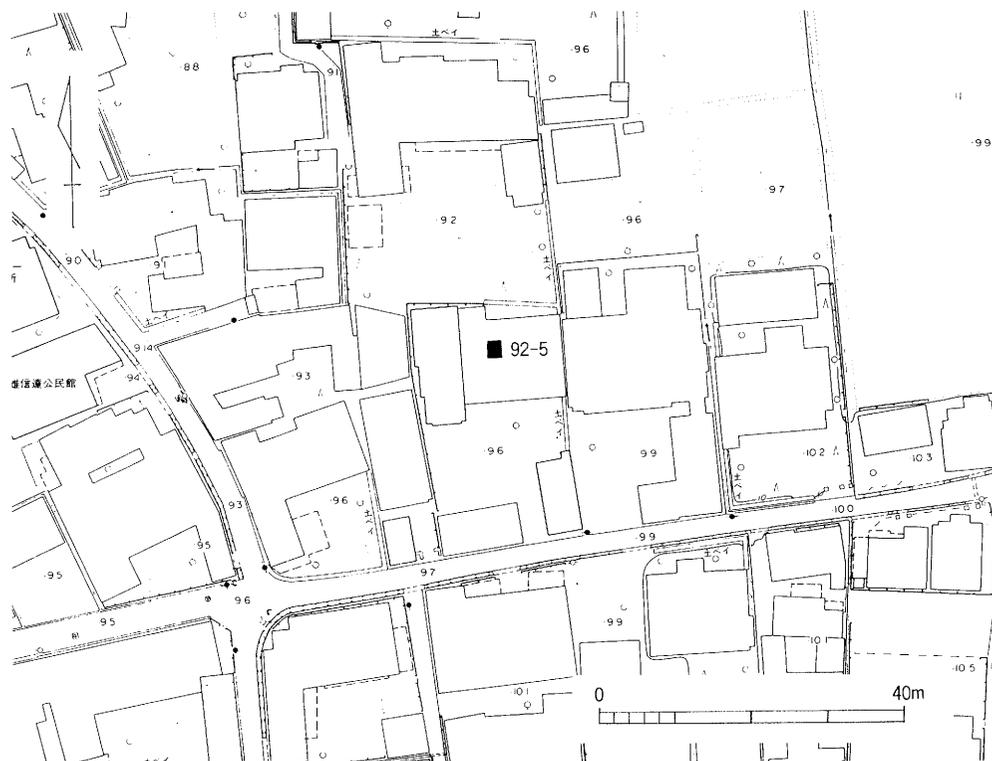
調査区の層位は9層が確認できた。第1層、第2層は現在の耕作土および床土とともに約20cm、第3層は褐色土で約5cm、第4層が黄褐色土で約5cm、第5層が褐色土、第6層が灰色土、第7層が黄褐色土でそれぞれ約10cm堆積する。以下は第8層にあたり、約30cmの層厚を測る灰色粘土混じり礫層が認められ、標高6.5m付近で第9層の灰色砂となる。当層からは激しい湧水をとめない、

これまでの調査例と同様に当地にも水脈の存在が確認される結果となった。  
遺構、遺物はともに認められなかった。

## 第6節 92-5区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第4図)

調査区は現在の男里集落の南東部に位置している。地形分類上では氾濫原<sup>①</sup>に位置していると思われる。最近の調査では当調査区西方約30mの地点において中世以降の遺物を含む整地層が確認されている。



第4図 男里遺跡92-5区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 6・17)

基本的な層序は、層厚約20cmの盛土を取り除くと近世の所産となる整地層が露呈する。整地層は、10層近くの淡黄色土と灰色土の互層を呈しており、丸瓦、

平瓦、磁器片などが出土している。層厚は約40cmを測り、各層はそれぞれ堅くしまっていることから、各淡黄色土の上面が比較的長時間露出していたことが想像される。この下層に淡灰色土の旧耕土が約10cm、明褐色混じり淡灰色土の旧床土が約5cm介在し、以下プライマリーな状態の堆積層へと続く。堆積層は順に層厚約10cmの淡灰褐色砂質土と、厚さ20～50cmの暗茶褐色土の2層に分層が可能で、共に土師器の細片が出土している。以下、暗黄灰色土の地山に至る。地山は全体に南西方向に約30cmの比高差を持って傾斜しており、自然地形の一部と考えられるが、巨大な遺構の一部の可能性も残されている。

### 3. 遺構 (P L. 6・17)

地山面で溝 (S D01)、土坑 (S K01) を検出した。S D01とS K01はトレンチの東側で切り合っているが、その前後関係は確認できなかった。S D01は東から西方向に主軸をもつもので、幅約30cm、深さ約10cmを測る。S K01は大部分がトレンチ外に拡がると考えられるため全形は知り得ない。最深部の深さは約10cmを測る。埋土はS D01、S K01共に淡灰色混じり暗茶褐色土で、S D01から土師器の細片が1点出土している。

## 第7節 92-6区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第5図)

調査区は、男里遺跡の北端に位置し、地形分類上は沖積段丘上に立地するが当調査区の東側すぐ近くまで、金熊寺川旧河道の氾濫原がきているものと思われる。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 6・18)

基本的な層位は、現代耕土および盛土層の下に、第II層・褐灰色シルト層、第III層・灰褐色シルト層、第IV層・極暗褐色シルト層、以上の第II層～第IV層までが旧耕土層である。第V層・黒褐色シルト層は、男里遺跡ではよくみられる層で、この第V層上面で遺構検出を行なったが、遺構は確認されなかった。



第5図 男里遺跡92-6区地形図

第VI層・暗黄色シルト層、これが地山としてとらえられる層で、この上面で遺構が確認された。また、この第VI層上面より約60cm下で礫層の存在も確認された。

遺物は、旧耕土層より土師器片、瓦器片、蛸壺片、近世以降の染付片、第V層より土師器片がそれぞれ僅かに出土しているが、どれも細片で図化できるものはなかった。

### 3. 遺構 (P.L. 6・18)

SX01は、トレンチ北壁と西壁にかかっている為に全形は不明であるが、最深部では約50cmを測る。埋土は2層確認され、上層の黒褐色粘性シルトは粘性が強く、第V層の黒褐色シルトより密度が高い。下層の暗黄褐色シルトも粘性は強いが密度は低く、層厚は30cmを測る。

ピット1は、直径10cm、深さ8cmでトレンチ中央部で検出され、埋土は灰褐

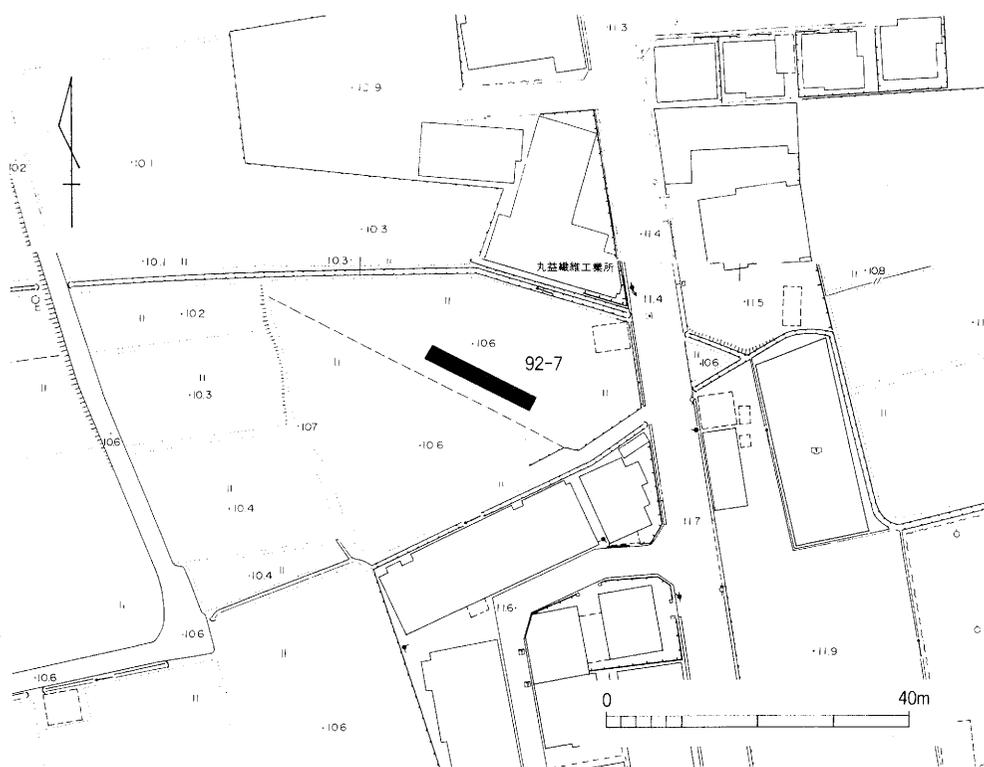
色シルトである。

両者ともに遺構内より遺物は出土しなかった。

## 第8節 92-7区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第6図)

調査区は、男里遺跡の東端部、府道堺阪南線「樽井馬場」交差点より南へ約80mの地点に位置する。地形的には男里川右岸の氾濫原ないしは自然堤防上に立地するものと思われる。



第6図 男里遺跡92-7区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 6・18)

現代の盛土を約1.5m掘削すると、黒褐色のシルト層が厚さ約40cmにわたって見られた。これはこの近辺で存在する黒褐色土層のようにも思われたが全体

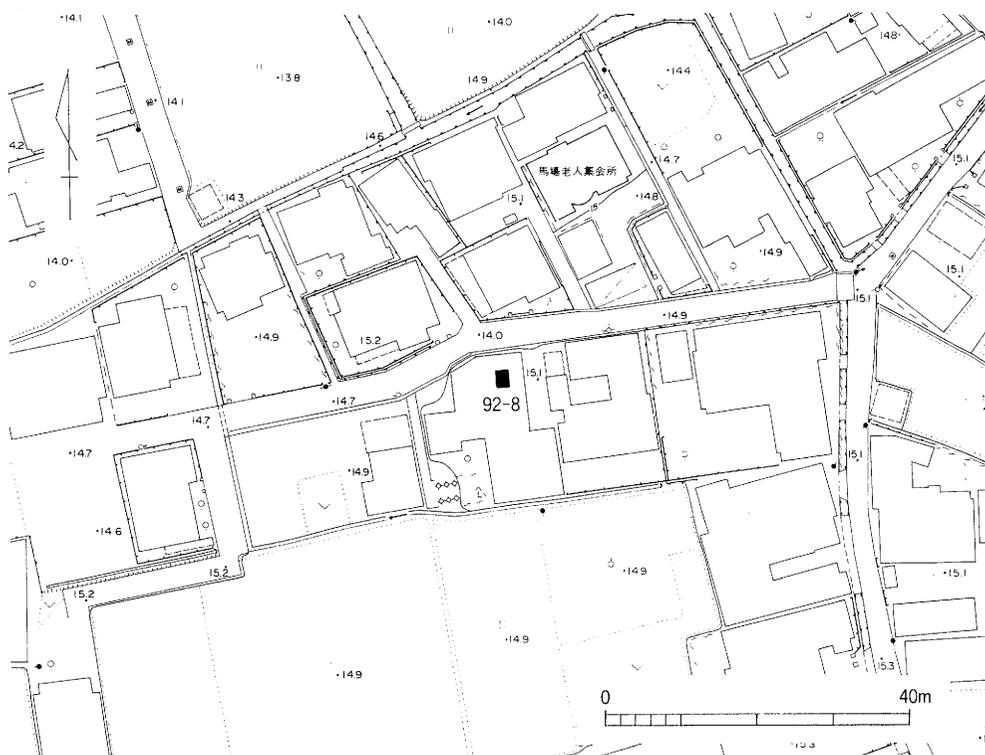
に濁っており、礫も多く含まれることから、近年、上層より攪乱を受けた土層のようである。この下層には地山である黄褐色シルト層が存在する。遺構・遺物は検出されなかった。

## 第9節 92-8区の調査

### 1. 位置 (PL. 3、第7図)

調査区は、遺跡の東縁中央付近に位置している。現在の行政区画でいうと、馬場集落のほぼ中央にあたる。

当調査区南隣接地では中世に属する遺構群が確認されており、馬場集落の初源あるいは、集落展開を知る上で非常に重要なデータを内包している地域、と言っても過言ではないだろう。



第7図 男里遺跡92-8区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 7・19)

基本的な層序はごく新しい盛土を除いて、上から順に第Ⅰ層・黄色土混じり暗灰色土、第Ⅱ層・暗灰色混じり黄色砂質土、第Ⅲ層・暗黄灰色砂礫土とつく。この下層に地山である暗灰色礫層が認められる。

このうち、第Ⅰ・Ⅱ層は非常に濁っており、近世の所産と位置付けられる瓦片が多量に含まれる事から、近世のある時期に施された盛土の可能性が強い。丁度この上には、調査直前まで古い家屋が建てられていたため、恐らくその建物あるいは、これ以前の建物構築に伴う整地・盛土と捉えられよう。

地山である暗灰色礫層は、親指大以上の砂岩質円礫と、これらを包むような薄い灰色粘土から構成されている。恐らく、礫層の中を水が流れていたであろう。ただし、調査の時点では、湧水等の確証は得られなかった。

想像力をたくましくすれば、近世の段階で地面から昇る「湿気」に悩まされていたために、盛土を施し建築を行った、とも考えることができるだろう。

なお、遺構は確認できなかった。

## 第10節 92-9区の調査

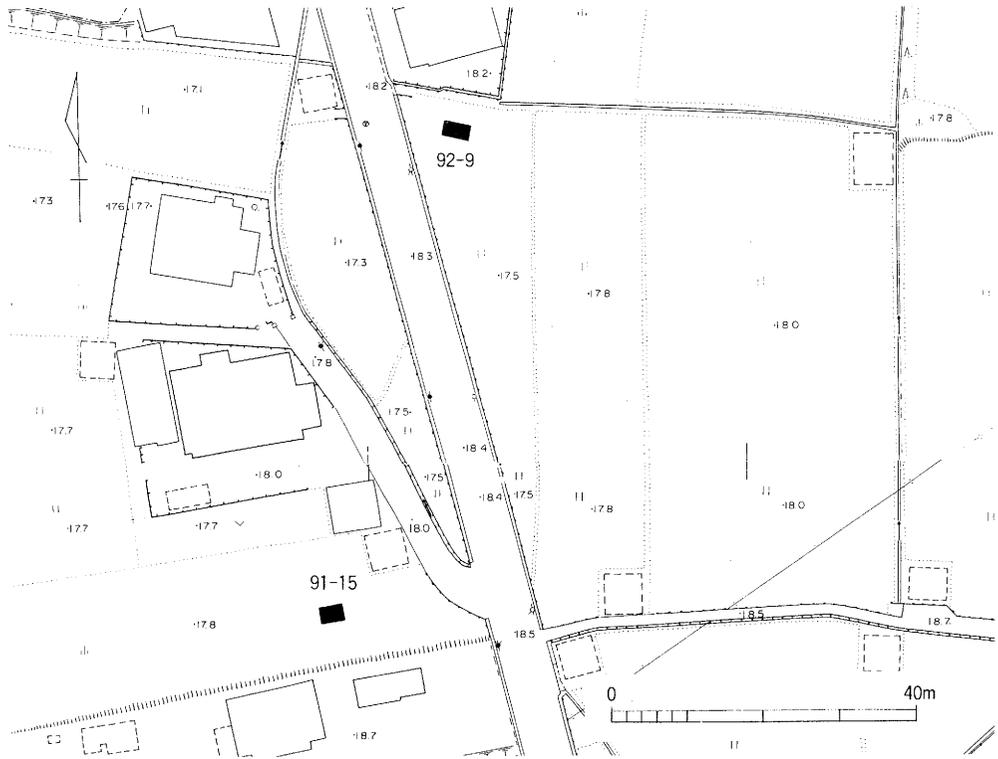
### 1. 位置 (P L. 3、第8図)

調査区は、男里遺跡の南端部、国道26号線の「幡代」交差点から北西へ約100mの地点に位置する。地形的には沖積段丘面に立地している。昨年度の調査では、調査区の南西約100mの地点で、弥生時代から古墳時代の遺物を伴う埋積谷が検出されている<sup>⑩</sup>。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 7・19)

調査区は、近接する道路との高低差をなくすため、約70cmの盛土がなされていた。これを除去すると旧耕作土である褐灰色土層、床土にあたる灰褐色混じり明褐色土層が確認される。以下、灰褐色混じり褐色土層、灰黄褐色混じり黄褐色土層、灰褐色混じり褐色土層、灰黄褐色土層へと続き、炭混じり黄褐色粘質土層へ至る。当層上面において遺構検出をおこなったが遺構は確認できなかった。また盛土内から激しい湧水にみまわれ、地山まで掘削することはできなかった。

た。いずれの層からも遺物は出土しなかった。



第8図 男里遺跡92-9・91-15区地形図

## 第11節 91-14区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第3図)

調査区は、現在の男里集落のほぼ中心に位置し、男里川右岸の自然堤防上に立地するものと思われる。この北方約25mでは、平成3年度の調査で安定したシルト層の面が確認され、溝状の遺構<sup>⑬</sup>が検出されている。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 7・20)

現代の盛土を約40cm除去すると、かなり水分を多く含んだ粘性土が数層、約40cmにわたってみられる。いずれもブロック土を含んでおりかなり新しいもののように思われる。これらを除去すると、緑灰色の粘性土と灰色の礫層が現われ、湧水が始まった。どちらもヘドロ状を呈し、沼のようなものが想定される。

いずれの層からも遺物は出土しなかった。

## 第12節 91-15区の調査

### 1. 位置 (P L. 3、第8図)

調査区は遺跡の南端付近、現在の国道26号線・幡代交差点のすぐ北側に位置している。遺跡の最南端付近にあたる。地形分類的には、沖積段丘面の縁辺に位置している。

当地周辺では、過去に数件の調査がおこなわれている。約10m西側の地点や南隣接地約20mの地点等があげられるが、なかでも後者では、弥生時代から古墳時代にかけて埋積したと思われる谷状の自然地形が確認されている。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 7・20)

ごく最近施された盛土を除去すると、その下層から第I層・暗灰色土(耕土)があらわれる。この耕土は、ごく最近まで地表にあらわれていたものである。

この下層へ目を向けると、第II層・淡灰褐色土からなる弥生時代遺物包含層が介在し、暗黄褐色土の地山へと至る。第III層から、わずかであるが弥生土器片が出土している。土器はみな細片ばかりで図化にたえ得るものは無いが、壺・口縁部片が含まれており、これから漠然とではあるが、弥生時代中期後半の時期を考えることができるものである。

また、地山上面では落ち込みが検出されており、ここから粘土塊が数点出土している。地山上面は、標高約17.2mを測るもので、近接地の調査例と比べると、南の調査例よりもやや低く、西側の調査例とは約1.2mの差があらわれている。

南に隣接する調査区内でも地山面の「西への傾斜」が確認されていたように今回の調査区のすぐ西側で大きく地形が下がっていることが容易に推定できる。弥生時代に存在した微地形の表出ととらえてよいだろう。

### 3. 遺構 (P L. 7・20)

地山上面で、V字形プランを持つ落ちこみが検出された。トレンチ外へと広

がるものであるため、その全貌は知ることができない。遺構の「カタ」はかなり急に落ち込むもので、イメージ的な表現が許されるならば「堅い地山面にしっかりと掘りこまれたもの」との印象が強い。底部は若干の起伏はあるものの、ほぼフラットな面を持つ。埋土はマンガン混じり淡灰褐色土の単一層である。

残念ながら遺構の性格については不明と言わざるを得ない。規模は、最長部で約60cm、幅13cm～18cm、最大幅約50cm、深さ約15cmをそれぞれ測る。

ここから粘土塊が出土している。ちょうど遺構の最上部、遺構検出面付近のトレンチ南壁にくい込むような位置に集中していた。遺構が埋まる過程で流入したものかもしれない。

#### 4. 遺物

落ち込み内から、粘土塊が数点出土した。おおむねこぶし大の大きさであり、巨大な土製品の一部とも考えられるが、少なくとも「器壁」あるいは「表面」と捉えられる部分はない。胎土は精良で砂粒などはあまり含まれない。火熱を受けたせいか、淡橙灰色を呈している。ただし、この「火熱」が一次的なものか、二次的なものかは不明と言わざるを得ない。

### 第13節 91-16区の調査

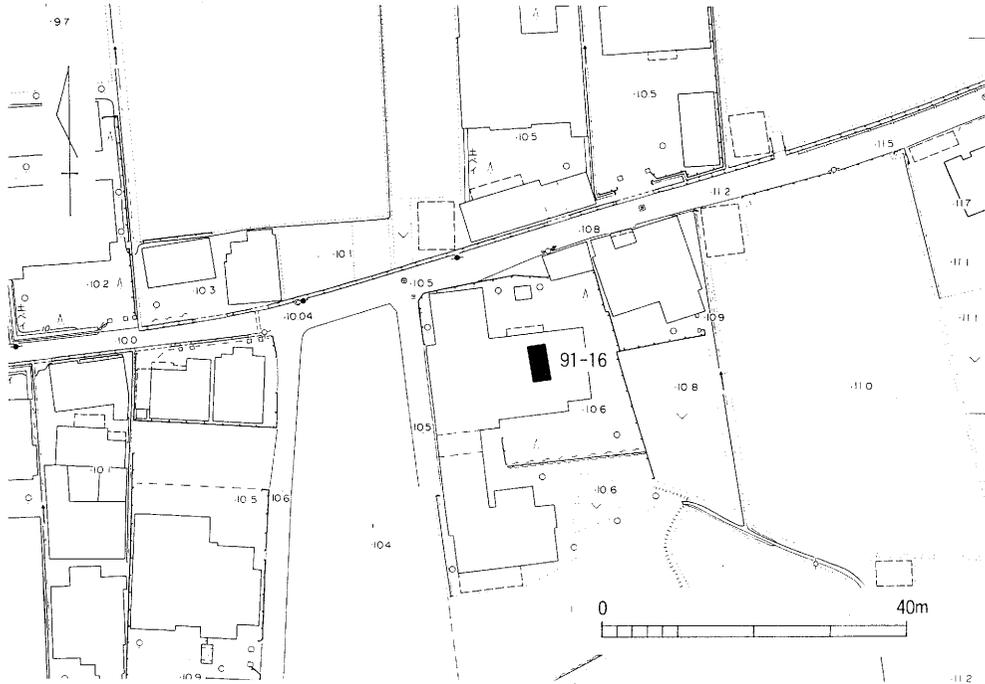
#### 1. 位置 (P.L. 3、第9図)

男里遺跡の中央には双子池がある。その名の通り南北に「下池」と「上池」、二つの池が連なっているわけだが、調査区はこの間をわずかに西に入った市道に面したところに位置している。当地周辺では過去に、古墳・平安時代の掘立柱建物群が検出されており、その調査区とは約50mと、指呼の間にあるとあってよい。

地形分類上は、氾濫原ないし谷底低地と分類されている部分にあたる。

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 7・21)

調査区内には直前まで家屋が存在したせいか、家屋解体後の整地土が薄く敷



第9図 男里遺跡91-16区地形図

地全体に広がっていた。これを取り除くと、耕土が露出する。以下、上層から順に第Ⅰ層・暗灰色土（耕土）、第Ⅱ層・淡橙灰色土（水田の床土）、そして第Ⅲ層と捉えた非常に薄い堆積層である淡灰色土を介在して、第Ⅳ層以下のマンガ混じり黄色粘土や黄灰色粘土から構成される地山に達する。当調査区内では、地山上面のレベルは約10.5mを測る。遺物は盛土や耕土・床土層から出土しているが、細片ばかりで図化にたえ得るものはなかった。

### 3. 遺構（P.L. 7・21）

ピットが一つ確認できた。第Ⅳ層上面で検出されたもので、埋土は黒味があった暗灰褐色土の単一層からなる。平面形は楕円形に近い不整形で、底にむかうほど北側に傾斜していく。全体に傾いて掘りこまれた、あるいは柱が抜き取られたとするとこの時に歪められたものか。このほかに、柱穴や共存する遺構等は検出できなかった。規模は、直径20cm、深さ約20cmをそれぞれ測る。遺物は出土しなかった。

## 第14節 91-17区の調査

### 1. 位置 (P.L. 3、第10図)

調査区は男里遺跡の中央付近に位置している。ちょうど遺跡を南北に縦断する、市道樽井馬場鬼木線に面している。過去の周辺調査例では、市域独特の「黒褐色土」の分布が確認されている。

地形分類上、男里川によって形成された氾濫原の縁辺に占地している。

調査は、トレンチ2カ所を設定しておこなった。



第10図 男里遺跡91-17区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況序 (P.L. 7・21)

第1・2トレンチともに基本的な層位は同一として大過ないものである。

盛土を除いて上層から順に観ていくと、第I層・暗灰色土、第II層・淡橙灰色土、第III層・淡黄灰色土、第IV層・マンガン混じり灰色砂質土、第V層・暗

茶灰色土、第Ⅵ層・黒褐色土と続き、この下層に暗黄灰色土の地山が存在する。

各層は第Ⅰ層が現代の耕作土、第Ⅱ・Ⅲ層がそれぞれ、旧耕土・旧床土と考えられる。第Ⅳ層は市域の他地域でも普遍的に認められるものだが、比較的マンガン斑が大きくより砂質が強い。第Ⅴ・Ⅵ層から地山に至る部分は、各層の境がぼやけたようにやや不分明だが、これは他調査区例にも同様の傾向が認められる。

各層は基本的に水平堆積したもの、と言ってもよいだろう。

なお、これらのうち、遺物が出土したのは旧床土層である第Ⅲ層のみで、ここからは中世の所産となるものと思われる土師器細片が出土した。これらは細片で図化にたえるものはなかった。

なお、近隣の調査例でも「黒褐色土」は確認されているが、丁度市道をはさんで東側の調査区でも過去に同様な黒褐色土層が検出されている。これの上面レベルと今回のものを比べると、約1 m以上の比高差がみとめられる。本調査区内では、ほぼ水平な堆積状況が看取できるため、我岸と彼岸の間に何等かの「段差」の存在を推定しておきたい。

註 ① 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）

② 泉南市史編纂委員会『泉南市史 史料編』（1982）

泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1986）

③ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』（1992）

④ 富加見泰彦『滑瀬遺跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会（1986）

⑤ 註②と同じ。

⑥ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）

⑦ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』（1988）

⑧ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ（1966）

⑨ 広瀬和雄『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会（1978）

⑩ 註③と同じ

⑪ 註③と同じ

⑫ 註③と同じ

⑬ 註③と同じ

## 第3章 男里東遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P L. 1・2・3）

男里東遺跡は、市域最大の男里遺跡の東方約100mに位置し、長山丘陵から派生して樽井地区までつづく丘陵と、男里川の右岸に広がる沖積段丘境界線上に位置する。後世の開発により、現在ではかなり目立たなくなりつつあるが、本来丘陵との比高差はかなりあったものと考えられる。

これまで、付近では度々開発による試掘調査が行なわれてきたが遺構・遺物は確認されていなかった。しかし今年度初めて当該調査区の試掘調査により遺構・遺物の確認がされ遺跡として周知されることとなった。

層位的には男里遺跡の北東側部分でみられる黒褐色土層が存在するなど酷似している。男里遺跡との有機的な結合は明白であり、今後遺跡の広がりが注目される。

### 第2節 92-1区の調査

#### 1. 位置（P L. 3、第11図）

調査区は府道堺阪南線より南に約250mの地点で、調査区より東側は比高差約5mの丘陵へ一気に登っている。地形的には沖積段丘面上に立地するものと思われる。

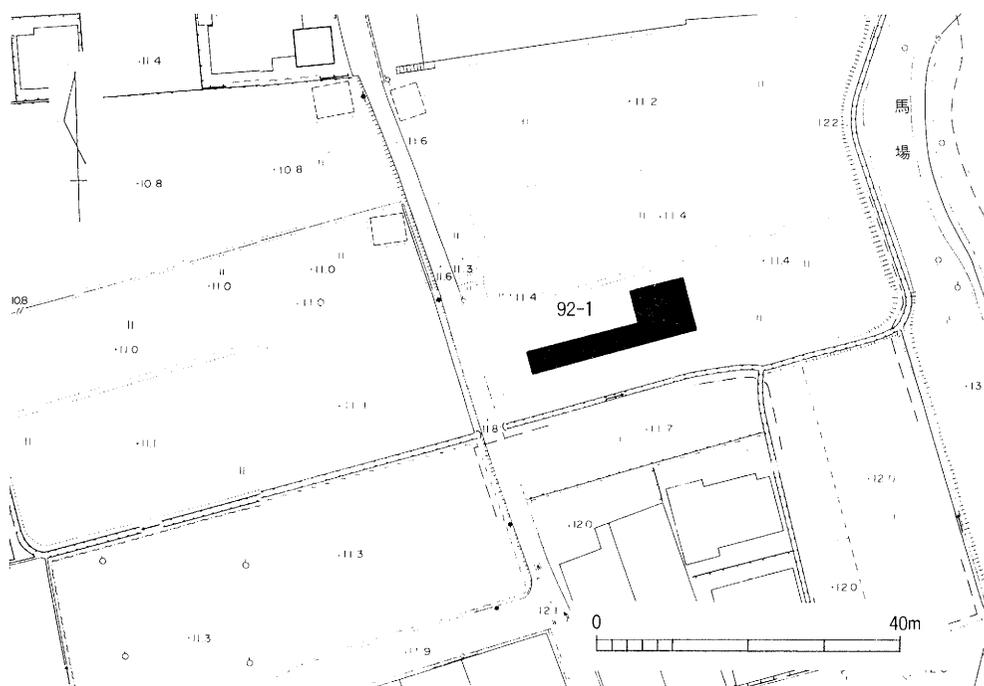
#### 2. 層位と遺物の出土状況（P L. 8・22）

約1.5mの現代の盛土を除去すると、黒褐色の粘質土がみられる。約20cmを測る。この上層には、厚さ約10cmほどの灰黄褐色の旧耕土層が部分的に見られるが、現耕土や床土は完全に失われていた。この黒褐色粘質土は男里遺跡の東側を中心としてみられる土層と酷似している。

この層を掘削すると、地山である黄褐シルト層に至る。この面で遺構を確認することになった。また、灰黄褐色シルト層・黒褐色粘質土層も上層からかな

り攪乱を受けている部分が多かった。

遺物は黒褐色粘質土層より極わずかの瓦器片や土師器片が出土しているが、いずれも図化できるものはなかった。



第11図 男里東遺跡92-1区地形図

### 3. 遺構 (P.L. 8・22)

トレンチ北東部において土坑1基を検出した。土坑の南東部は調査区外に及ぶため全形は不明である。検出できた範囲内では長軸約3m、短軸約1mの不整形のプランを呈する。埋土は順に褐色シルト、黒褐色シルト、黒褐色粘質土を示す。遺構の北側部分においては底部がフラットな部分が認められ、深さ約20cmを測る。また、遺構の中央部付近では深く落ち込み、最深部では約20cmを測る。遺構内からは遺物がまったく出土しないため、時期、性格等は不明であるが、形状、土層の堆積状況などから、風倒木痕の可能性も考えられよう。

## 第4章 高田遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第12図）

泉南市域の北西端部、男里川右岸に位置する高田遺跡は、平成3年に今年度調査地北側に隣接する敷地においての試掘調査によって、遺構は確認されなかったものの弥生・古墳・奈良時代の遺物が出土する包含層が初めて確認された遺跡である。

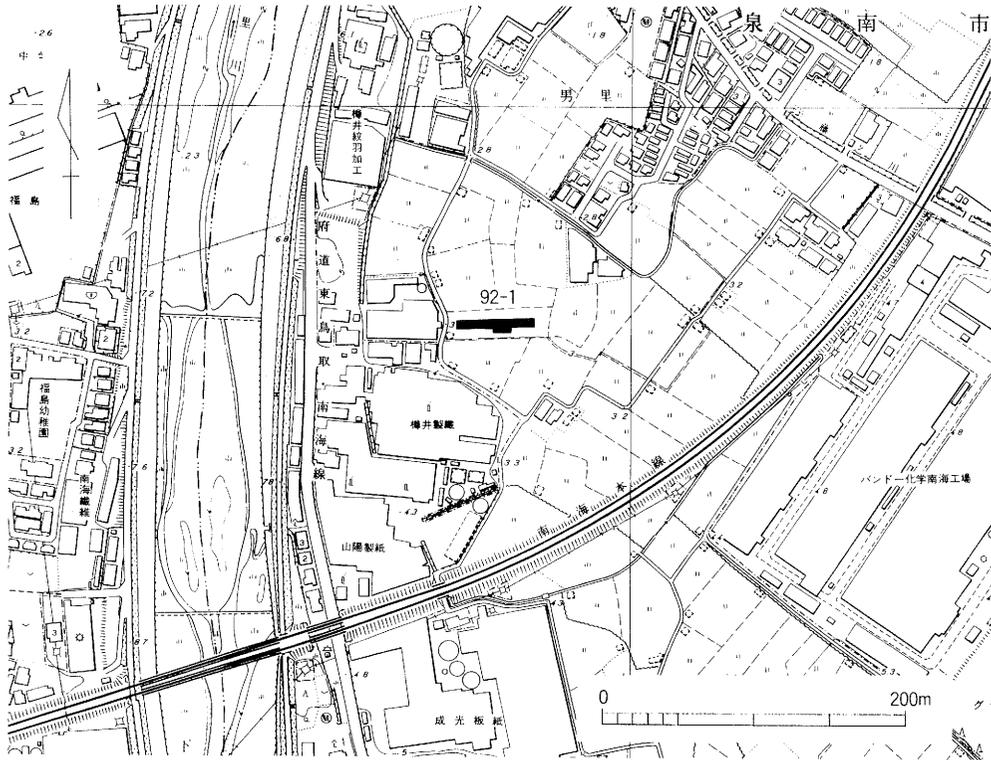
また、地形分類上は男里川の氾濫原、あるいは男里川旧河道、および一部自然堤防上に位置し、大部分がT.P.+2m～T.P.+3.5mの高さを測る低湿な平地である。

現在、遺跡の範囲内はほとんどが水田あるいは休耕田であるが、周辺では一部が住宅地となっており、西側では男里川に沿うような形で工場が連なっている。その為に何時開発の波が押し寄せて来るかわからない。

当該遺跡の北側には、市域遺跡群の中でもっとも海に近い遺跡に挙げられるキレト、天神ノ森の両遺跡があり、南側は分布調査によって最近発見された男里北遺跡が接するような形で立地する。また、男里北遺跡には泉南の主要な遺跡である男里遺跡が南接している。

これらの遺跡は、どれも男里川流域の右岸で展開した遺跡であり、高田遺跡もそのひとつに数えられる。

高田遺跡は発見されて以来、まだ月日が経っていないこともあるが極めて調査例が少なく今年度の調査は1件のみで、通算で2例目の調査となり、遺跡の性格等を究明するについては今後の調査・研究による情報の蓄積が必要であろうと思われる。



第12図 高田遺跡調査区位置図

## 第2節 92-1区の調査

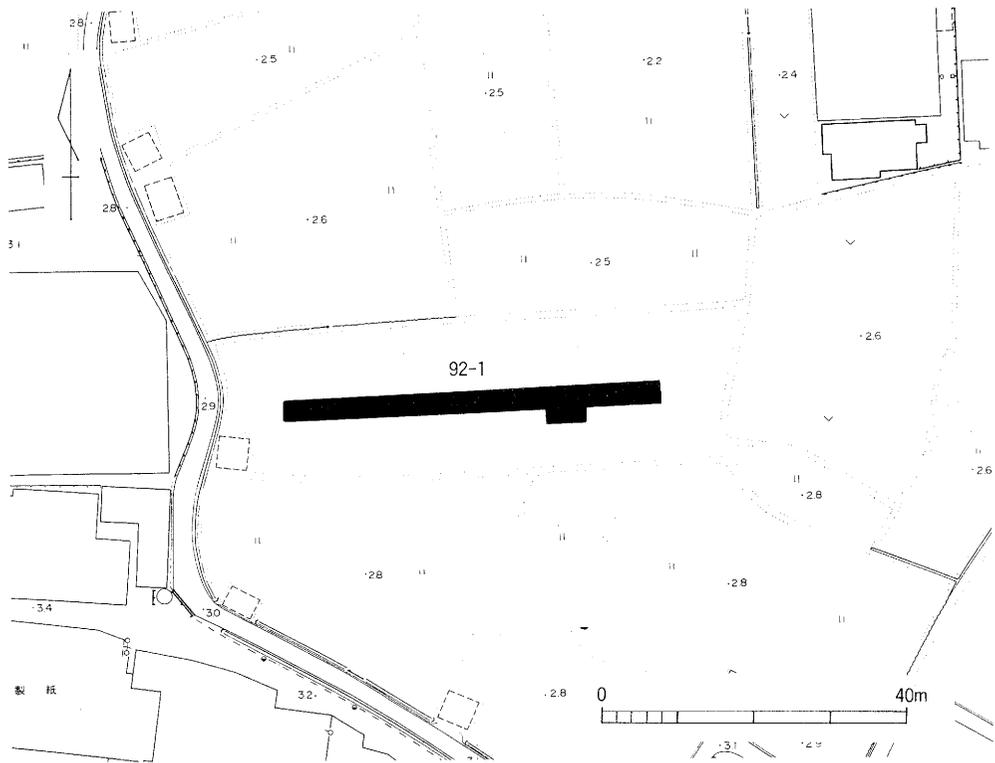
### 1. 位置 (第12・13図)

調査区は高田遺跡の西端に位置し、西側には男里川が南北に流れる。地形分類上では男里川旧河道と氾濫原のほぼ境目に位置するものと思われる。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 9・23・24)

基本的な層位は、現代耕土である暗褐色土の下に、第II層・床土である褐色土、第III層・にぶい褐色土、第IV層・マンガン混じりの褐色土、第V層・マンガン混じり灰黄褐色粘質土、第VI層・灰褐色粘質土、今回の遺構検出は、この第VI層の上面で行った。

また、トレンチ西側・中央部・東側の3ヵ所をそれぞれ掘り下げた結果、遺



第13図 高田遺跡92-1区地形図

構検出を行った層の下に西側では、にぶい褐色砂礫層・褐色砂礫層・褐色砂層の3層が確認され、中央部では、この3層の下で更に、暗灰黄色砂礫層・鋸歯状に黒色の礫が入った褐色砂礫互層の2層が確認された。東側に関しては、湧水がひどく、地盤が緩いため途中で掘削を断念、地表面より175cm下で黄褐色砂層を確認したにとどまる。

尚、遺構検出面より上層では土師器・瓦器等の主に中世の遺物が出土しているが遺構検出を行った層の直下にある、にぶい褐色砂礫層より僅かではあるが弥生土器・古代の須恵器などが出土している。

### 3. 遺構 (P L. 9・23・24)

遺構は、鋤溝、ピットなどがトレンチのほぼ全域にわたって検出された。特にトレンチ西端より18mまでの地点とトレンチ東端より12mまでの地点では鋤

溝が密集している。

トレンチ西端より18mまでの地点では、最小規模で幅16cm、長さ20cm、深さ3cmのものから最大規模が幅60cm、長さ5.2m、深さ2cmのものまで鋤溝が53ヵ所検出された。埋土は、マンガン混じり淡黄灰褐色粘質土である。

また、トレンチ東端より12mまでの地点では、最小で幅8cm、長さ44cm、深さ2cmのものから最大が幅32cm、長さ4.9m、深さ1cmのものまで15ヵ所検出された。埋土は、マンガン混じり灰黄褐色土である。

ピットは、どれも柱痕を伴わず、大まかに群として拡張部一帯のものと同側鋤溝群の中にあるものに分けることができる。

拡張部一帯のピットは直径12cm、深さ7cmのものから直径36cm、深さ4cmのものまで16ヵ所それぞれ検出された。埋土は、マンガン混じり灰黄褐色土である。

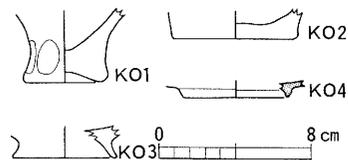
東側鋤溝群の中では直径6cm、深さ4cmのものから直径20cm、深さ6cmのものまで10ヵ所、ピットが検出されている。埋土は、淡灰黄色砂質土である。

検出された鋤溝の大きさは不定であるが、大半がほぼ東西に方向性を保っている。ピットに関しては建物が建つ様子は見られない。

#### 4. 遺物 (第14図)

遺物は弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・青磁・瓦・土錘などが出土しているが、ほとんどが細片であるために図化できるものは、その中でもほんの僅かであった。

1、2は共に弥生土器である。1は甕形土器の底部であると思われ、平底で内面は褐灰色を呈し、斜め上方へナデを施す。外面は橙色を呈し、調整は不明である。胎土はやや粗く、1～3mmの砂粒を多量に含む。2も甕形土器の底部であると思われ、突き出しやや上げ底の短い脚台が付く。脚台は脚裾部に向かってやや開き、端部は丸みを持つ。内面の調整は不明であるが外面の底部外面に指頭圧痕を



第14図 高田遺跡92-1区出土の土器

土は密で1～2mmの白粒砂が多量に含まれている。

3は黒色土器の底部で、高台部分は1cmを測り、外側に開くしっかりしたものである。内面は黒色を呈する。外面は橙色を呈し、ナデが施されている。胎土は密で0.5mm程の白色粒を多量に含む。

4は瓦器碗の底部であるが摩滅によって、内面の調整は不明である。色調は内外面ともに灰色を呈し、胎土は密で0.1mm程の黒色粒を少量含んでいる。

## 第5章 幡代遺跡の調査

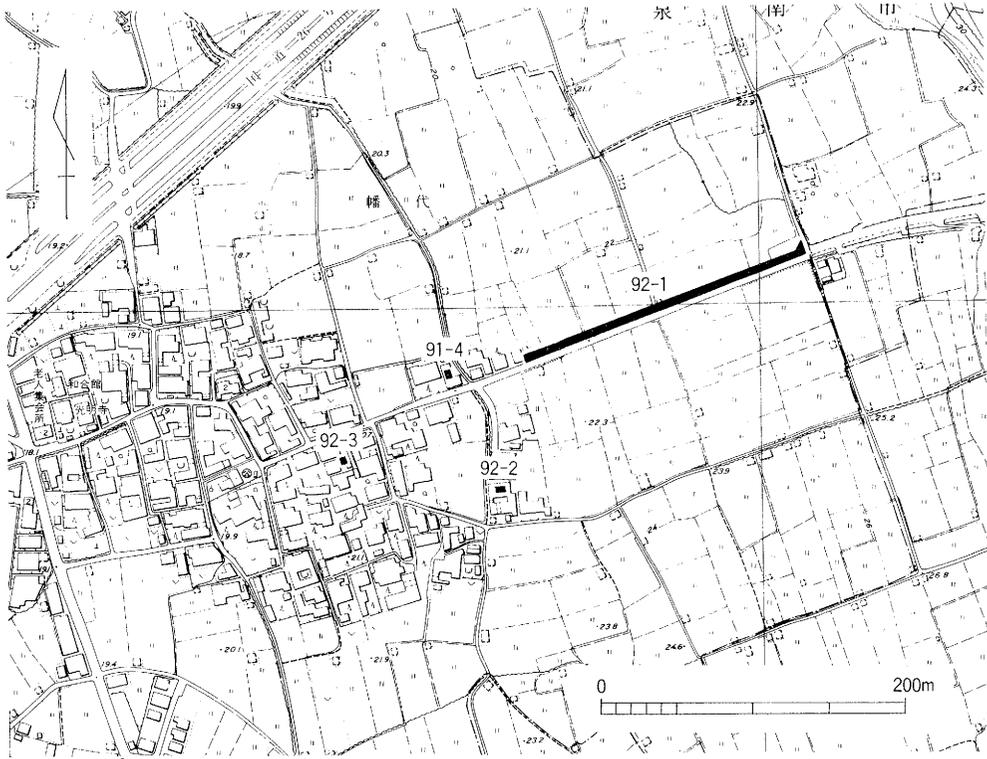
### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第15図）

幡代遺跡は泉南市の西部に位置する。範囲は現在の幡代集落を中心として、金熊寺川中流域の右岸から東は長山丘陵に展開する。国道26号線を境として北側には男里遺跡、南には幡代南遺跡が存在する。

当遺跡ではこれまで、昭和59年1～3月の大阪府教育委員会の調査以来、小規模であるが毎年調査数が増加している。現在得られている情報では、平安時代後期から室町時代、そして近世と大きく3区分の盛期が認められること、そして中世に創建されたと思われる寺院、及びそれに伴う集落の存在が推定されている。他にも弥生時代の遺構・遺物包含層が存在する可能性があることが述べられているが、新たな知見は得られてはおらず、このあいまいな状況から脱することはできていない。このことはこれまでの調査が現在の幡代集落を中心とした範囲に限定されていたことや、調査面積が小規模であったことなどに起因すると思われる。特に遺跡北東部ではまったく調査例がなく、包含層の拡がりなどに関しては、データ不足の感が否めなかった。

しかし、今年度92-1区の市道牧野幡代男里線の拡幅工事に伴う調査において中世の建物を構成すると考えられる柱掘方や土坑などが検出されており、男里遺跡で認められるものに近似する黒褐色土層の存在が確認されるなど新たなデータを獲得することができた。また、遺跡周辺においては条里地割が存在することが以前から指摘されており、今後、周辺の遺跡との関係などと共に総合的な研究が必要とされていると言えよう。

現在、幡代遺跡の周辺は市域においても数少なくなった水田地帯をよく残しており、のどかな景観が広がっている。しかし、開発の波は確実に押し寄せており、近く遺跡を縦断するような形で大規模な道路設置が予定されている。これに伴い、調査例が増加する事は疑いのない事実であり、更に多くの新たな情報を得ることができるであろう。ただこれらの情報と引き換えに貴重な文化財や歴史的景観を失うことを再確認しなければならない。



第15図 幡代遺跡調査区位置図

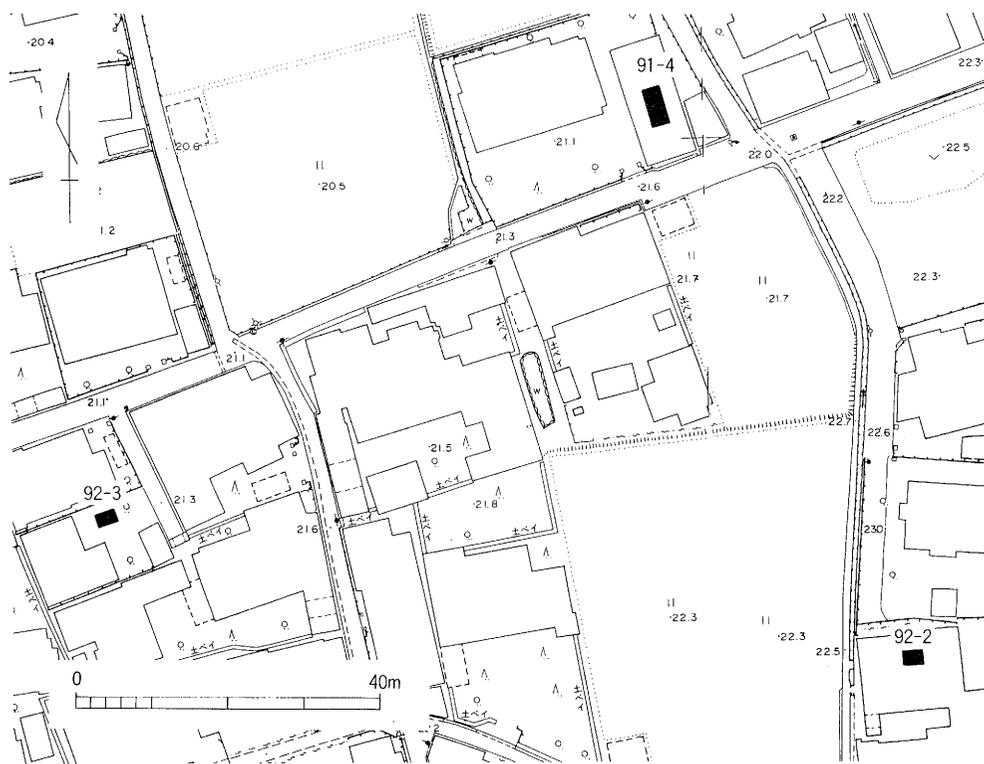
## 第2節 91-4区の調査

### 1. 位置 (第15・16図)

幡代遺跡のほぼ中央、現在の幡代集落の東端付近に今回の調査区は占地している。ちょうど幡代集落から信達市場あるいは信達岡中へと向かう旧道に面した位置に当たる。

地形分類の上でその位置を見ると、沖積段丘面上の立地であることがわかる。

当調査区付近は近年の幡代遺跡の発掘調査が集中しているところでもあり、最新の調査例では当地より西側にむかって「黒褐色土層」が広がっていることがつきとめられている。



第16図 幡代遺跡92-2・92-3・91-4区地形図

## 2. 層序 (P.L. 10・25)

調査区内には、ごく最近まで家屋が建てられていたため、その解体による盛土が若干残されていた。これを除去すると、淡灰色白色土と黄褐色土が確認できた。これらはそれぞれ、旧耕土・床土層と考えられるものである。これらの下層からは、暗灰褐色礫からなる地山が検出された。ただし図化できなかったが、ごく一部分で床土の下層にブロック状のマンガン混じり淡灰色土が地山との間に介在する部分も認められる。

なお、周辺地形を見ると当調査区部分は周囲のレベルから約1m程低くなっており、いつの時代かに大きく削平を受けている可能性が残されるものである。

当調査区では遺構・遺物はまったく確認できなかった。

## 第6章 新家遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第17図）

「新家」と書いて「しんげ」と読む。中世当時の当地域の繁栄から衰退を綴った古文書が市内に残されている。これにはビビッドな「新家谷」の様子が表現されているという。しかし、考古学の観点から現在知る事ができるのはいかなるものがあるのだろうか。若干まとめておきたい。

まず市域内での位置と、地形的環境をかいつまんで述べておきたい。

現在の行政区画上の「新家」地区は、市域の東南部の大部分を占める位置にある。主に市域の東端付近を蛇行しながら流れる榎井川を区画線とすれば、これより南西部分の大半を占めているといえようか。卑近な言葉で言えば、おおむね「山の手」のイメージが強い。

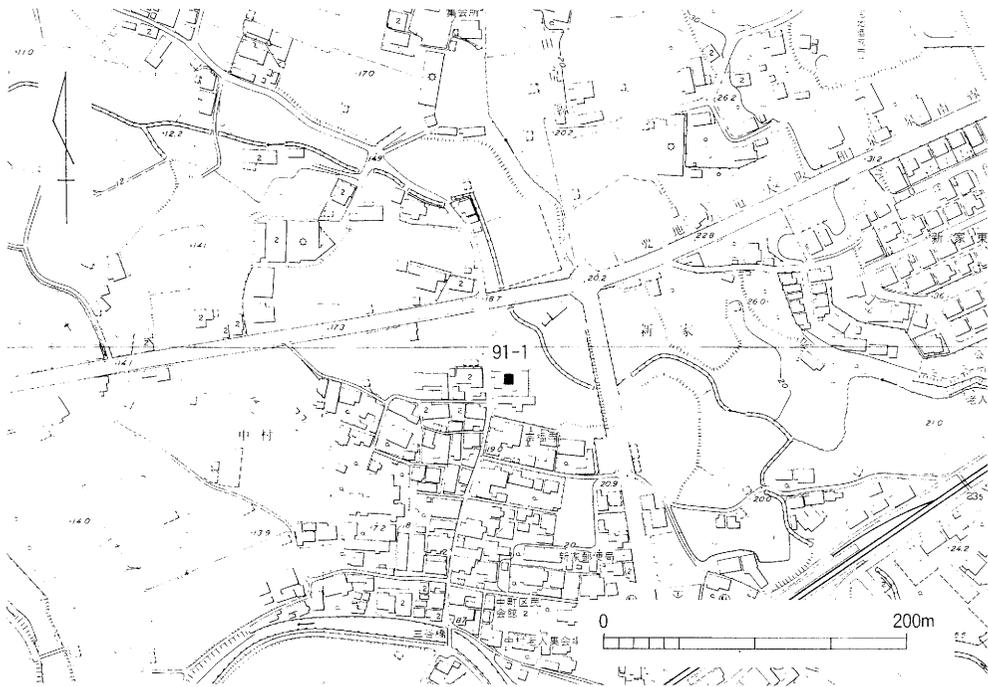
では、「新家」空間を区画する地形的要素はいかなるものなのか。順に観ていくと南が「山地」、北が「榎井川」、そして西が和泉山地から派生した山塊群、最後に東が兎田集落が占地する小平野であるといえる。さらに、この「空間」内は低丘陵群と谷によって、さらに狭隘な空間に分断されている。現在、この狭空間とでも言うべき部分には確実に集落が展開し、相互の空間を結ぶように道路網が置かれている。

同様にその空間内を満たす地形的要素は、主に山塊及び低丘陵、そしてこれらと共に存在する谷地形、とすることができる。まとまった平地と呼べるもの、想像を加えなおかつ穿って言えば「古代以前の居住に適した空間」は、ほとんどないともいえるのではないか。

現在知りうる「新家」空間の最大の特長は、この「小空間の集合体」であることにほかならないと考えている。

ここで、埋蔵文化財の分布をあわせ考えてみよう。

目前にそびえる丘陵上に目をやると、新家遺跡の東に伸びる丘陵上には弥生時代の集落遺跡である新家オドリ山遺跡を中心とする遺跡群や、多くの古墳群が存在する。同じく西側には向井山遺跡などが所在する。



第17図 新家遺跡調査区位置図

ただし、平地・谷部分となると状況は一変してしまう。これまでのところ、新家地内の平野部・谷部などで発掘調査が行われたことは皆無の為、情報は非常に限られている、いやまったくといって歴史情報は集まっていないのである。勿論中世の所産となる遺物は多く散布していても、各遺跡の具体像を推定させ得る情報はない。考古学の観点からは中世の「新家谷」の繁栄についてなど、いまだ検討の俎上にのせることすらできない状況なのだ。

以上のように、特徴的な地形特性を持つ「新家」に、今後の調査活動の進展により何らかの時間軸方向の基準を設けることができれば、またその「小空間」相互を有機的に密接に結び付けていたものは何か、と常日頃考えている次第である。

このような当地の状況の下、新家遺跡に話を戻していこう。

まず、遺跡周辺の地形に目を向け、その後調査の成果を述べていく。

「新家谷」を通して檜井川への合流地へと向かう新家川。その右岸流域に発達した沖積段丘低位面の北端付近に新家遺跡は立地している。現在の地形からみても、南はよりレベルの高い洪積段丘面が広がり、西は新家川へむかってゆ

るやかに傾斜し、東側は谷状に落ち込んでいることがうかがえる。北側へは幾度か小段を伴いながら下っていく。要するに、新家遺跡は、沖積段丘低位面のなかでも、舌状に南北に伸びたゆるやかな「高台」の北端を占地していることがわかる。

発掘調査の事例を紹介しよう。新家遺跡における過去の調査は、遺跡発見の契機となった1件のみである。

今回の調査区とは約30mと指呼の間にある場所において、弥生時代中期に属する遺物が多量に包含される溝に加え、断面でしか確認されていないものの竪穴住居の可能性のある落ち込みの存在が知られている。また、同じ場所からは中世の組み石を伴う池状遺構やピット群が確認されている。これまでのところ、新家遺跡では大観して弥生・中世の歴史情報がわずかながら知られている訳である。

さて、中世には「新家谷」と呼ばれた当地周辺には、いかなる歴史情報が内包されているのだろうか。これまでに知られているのは、上記のように弥生・中世になんらかの生活活動の動きが認められるという程度である。

当遺跡における調査は、まだ始まったばかり。いまだ良好に保存されている歴史情報への大いなる期待としづかなる興奮を胸に抱いて、これからも調査に望みたいものである。

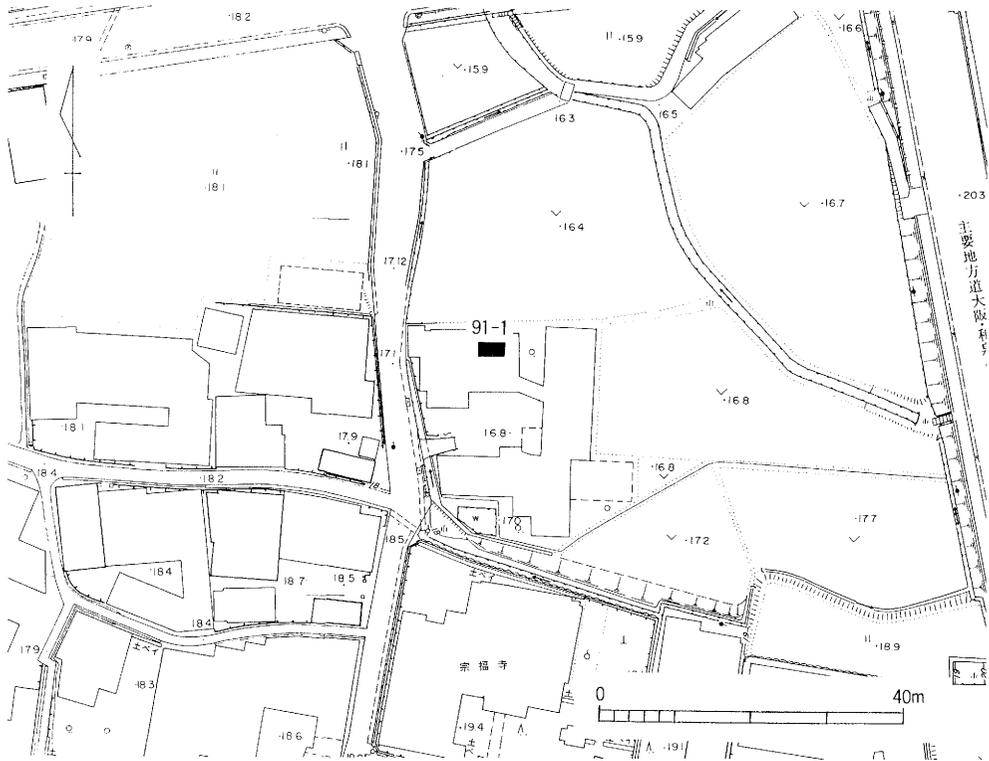
## 第2節 91-1区の調査

### 1. 位置 (第17・18図)

今回報告する調査区は、遺跡の東縁部に位置している。先に述べた「高台」の東側斜面をややくだつたあたりの、谷底低地に向かうゆるやかな斜面に立地している。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 10・25)

基本的な層位を上層から順に確認すると、第I層・淡灰色土(耕土)、第II層・黄褐色土(床土)、第III層・淡黄褐色土、第IV層・マンガン混じり淡灰色



第18図 新家遺跡91-1区地形図

土、第V層・黄灰色粘土、第VI層・黄色混じり黒褐色土、第VII層・黒灰褐色含礫土、第VIII層・淡黄灰色粘質砂、第IX層・淡黄灰色含礫砂へと至る。

各層は基本的に水平堆積の様相を呈しているが、調査区自体が斜面上にあり、またこの東は急激に落ち込んでいく谷地形であるため、周辺の普遍的な層序とは考えがたい。

このうち、第III・IV層が旧耕土、第V層が旧床土と考えられ、地山は不明であるが、現在のところ無文化層と考えられる第VIII層以下に求めておきたい。また、若干だが遺物も出土している。出土するものはすべてローリングを受けているのか、非常に摩滅が激しいものばかりで図化は不可能だった。器種判別できるものも辛うじてと言った感が強い。主に出土が見られるのは第VI・VII層からで、前者からは古代須恵器片細片が含まれるのに対し、後者には弥生土器片細片のみが包含されている。このことから、第VII層は純粹に弥生時代遺物の、第VI層は古代遺物の包含層と、それぞれ捉えることができた。

## 第7章 下村遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第19図）

下村遺跡は、新家川と樫井川に挟まれた和泉山脈から派生するいわゆる「新家丘陵」のほぼ先端に存在する下村集落の西側部分を中心とする場所に位置している。

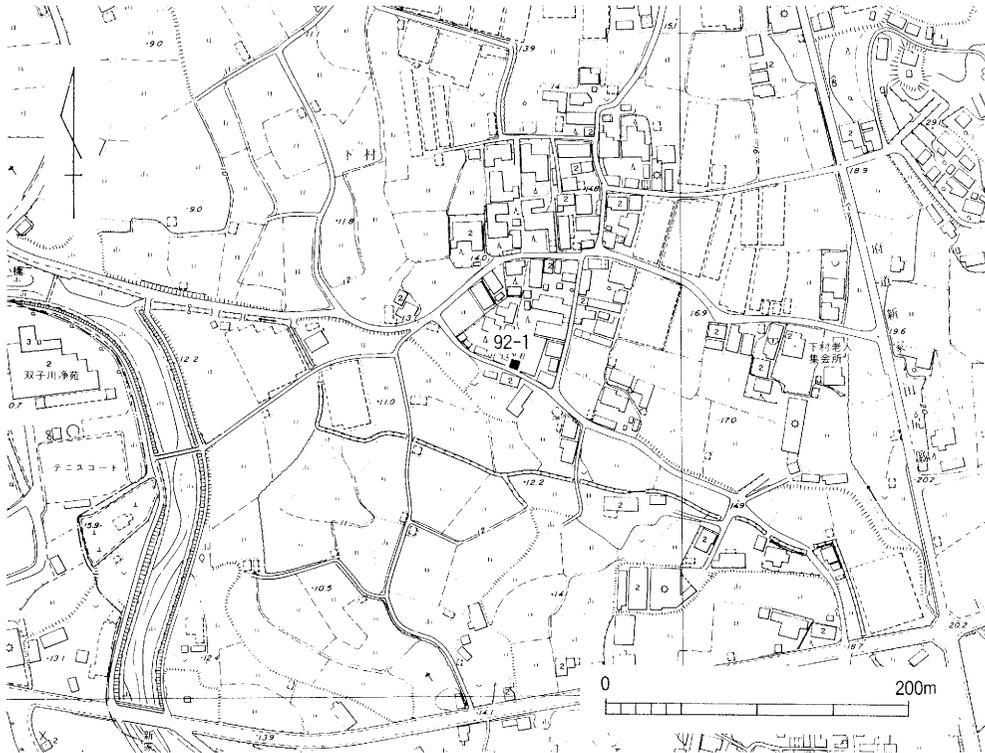
当遺跡の発見の契機は、分布調査により中世の遺物が散布することによる。周知されて数年が経過したものの、今日まで発掘調査は全く行なわれたことがなく、遺跡の性格はつかめていなかった。今年度の調査で中世のピット、近世のカマドなど初めて遺構の存在を確認した。

周辺の遺跡を概観してみたい。下村集落は新家川の氾濫原を登り切った丘陵の中腹に当たる平坦な段丘面に立地しており、集落の立地としてはよい場所に当たるものと思われる。また西側には川をはさんでほぼ標高を同じくする海会寺跡や南側には、弥生時代中期の方形周溝墓が見つかった向井山遺跡<sup>①</sup>が見渡せる。

この丘陵の先端部分から新家川の上流に向かって同じような立地で比較的小規模な旧来の集落が点在しているが遺跡の動態についてはほとんど解明されていない。

一方、丘陵の上面では近年の宅地造成などの大規模な開発による破壊の反面、遺跡の動態は明らかになりつつあるのが事実である。丘陵上面の先端では、大阪湾から六甲山地、淡路島などが見渡せ、眺望には非常に富んでいる。そのためか、弥生時代では高地性集落の範疇に含まれる新家オドリ山遺跡<sup>②</sup>など数多くの堅穴住居を持った集落が見ついている。古墳時代においても、初期須恵器の出土した新家古墳群をはじめ、フキアゲ山1号・2号墳、下村1号・2号墳など泉南市域では数少ない古墳の集中する地点としても知られている。

今後、新家川流域の更なる開発も予想されており、下村遺跡を含めたこの地域の歴史が明らかになっていくものと思われる。



第19図 下村遺跡調査区位置図

## 第2節 92-1区の調査

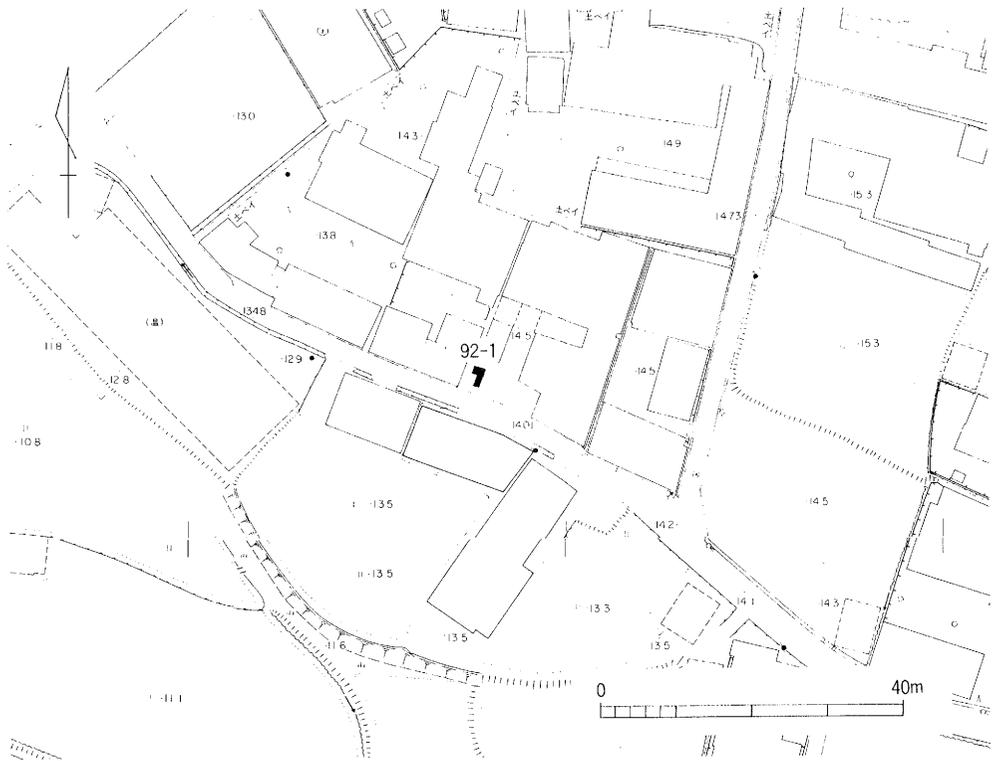
### 1. 位置 (第19図)

調査区は遺跡の南東端にあたり、現在の下村集落のほぼ中心部にあたる。地形的には低位段丘面と考えられる。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 10・26、第20図)

旧建物による新しい盛土を約30cm除去すると、灰褐色の整地層(2層)が約20cm見られる。砂質で礫を多く含みかなり濁った土色を呈している。さらにこの下層には同様の土質を呈した黄褐色の整地層(3層)が約20cm確認され、黄褐色シルトの地山にいたる。

トレンチの南東部を掘削途中、大量の焼土塊が出土したため、トレンチを拡張し断面の観察を行なったところ、2層より切り込む近世のカマド状の遺構を



第20図 下村遺跡92-1区地形図

2基確認した。

遺物は、2層の整地層より近世の挿り鉢、甕などが出土している。また、カマドのほぼ燃焼部にあたる空洞部に甕、鉢、瓦などが詰まった状態で出土している。これらはカマドが使用されなくなり、家屋が廃絶した後に入り込んだものとみられるが、ほぼこのカマドが使用されていた時期のものと考えて差し支えないであろう。

### 3. 遺構 (P L. 10・26)

カマド1と2は同一家屋に併存していたと考えられる。2基とも中央部が現代の水道管によりほぼ南北40cmの幅で攪乱されているため、完全な構造をつかむことは出来なかったが、平面形は東西約1.1m、南北約1mのほぼ円形を呈している。東側が開いており、焚き口部分と考えられる。中央は一段低くなって、床部分は黒灰色を呈して非常によく焼けているため燃焼部と考えられる。

規模は、東西方向は不明であるが南北方向は65cmを測る。非常に固く締まっており、粘土を張り付け成形したものの様である。この周りを、約15cm赤橙色の粘土帯が取り巻いている。粘土はスサを含み、カマドの外側を形造る本体と考えられる。このさらに、掘り込んだ外側にはカマド本体の粘土の裏込めと考えられる土を入れている。

築造方法を推定してみたい。まず旧地表面を約40cmほど掘り込み、燃焼部分では床に5cmほどの粘土を張っている。そしてその周りに粘土を積み上げてドーム状のカマドの本体を形造っていたのであろう。さらに掘り込んだ部分には裏込めの土を入れている。しかし地表面に露出していた部分は完全に壊され削平されているため上面はいかなる構造を呈していたかは確認できなかった。

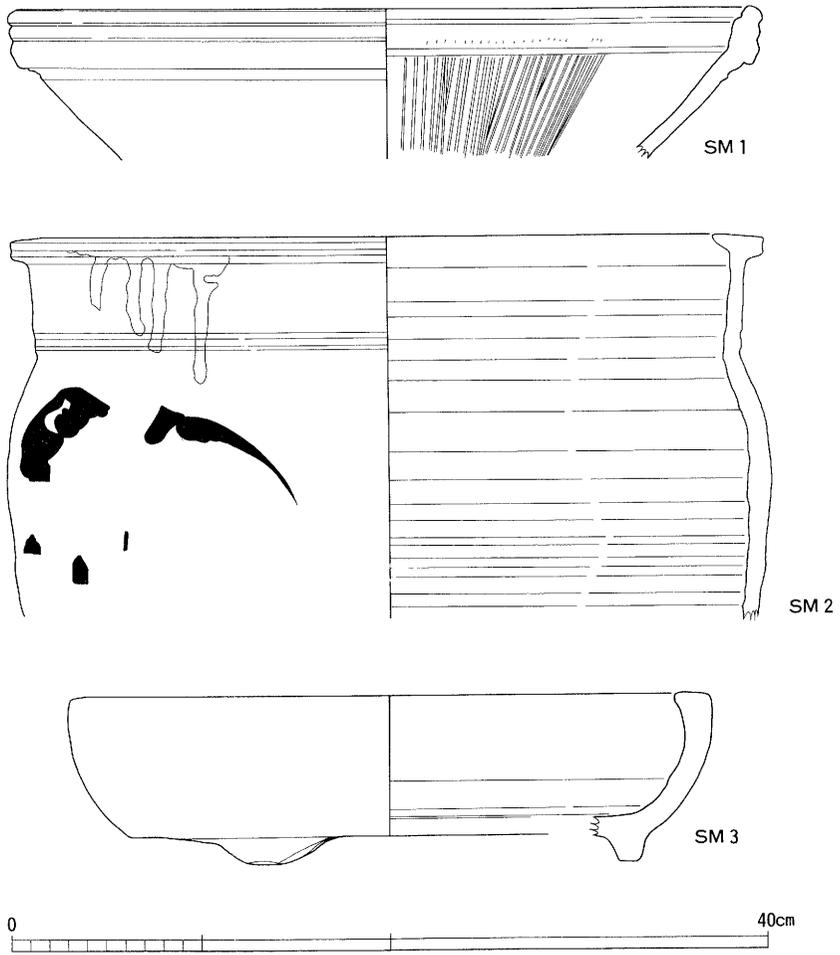
Pit 1・2は地山の黄褐色シルト面から切り込む遺構で、埋土は焼土を微量に含んだ灰褐色シルトである。特に、Pit 1は直径38cm、深さ20cmを測り、柱穴と考えられる。遺物は、中世の所産である須恵器片がわずかに出土している。一方、Pit 3は2層の整地層より切り込みカマドと同時期と考えられる。埋土は灰色砂質シルトである。

#### 4. 遺物 (第21図)

1は備前の挿鉢である。カマドが切り込んでいる整地層より出土している。7条を一単位とする挿目を持つ。口縁部外側には2条の凹線を施し、口縁端部は下方へ張り出す。また、口縁部内側には2条の凹線を持ち下側の凹線文で挿目と口縁部を区画している。色調は暗褐色を呈し、復元口径は40.0cmを測る。

2は陶器の甕である。カマド2の内部から出土している。復元口径は39.8cmを測り、全体に黒褐色の釉薬が施されている。

3は足付の火舎である。土師質で同じくカマド2の内部より出土している。全体に二次焼成を受けており、橙色を呈している。また外面には炭化物が付着している。復元口径は34.0cmを測る。



第21図 下村遺跡92-1区出土の土器

註 ① 奥野義雄『泉南市向井山遺跡調査報告書』泉南市教育委員会（1972）

② 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1986）

## 第8章 仏性寺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第22図）

仏性寺に関しては、建武3年(1336)10月13日の淡輪重氏の軍忠状に、10月2日、信達荘の仏性寺で靱井彦五郎入道の傘下に入ると記載され、仏性寺と云う名が文献に登場する<sup>①</sup>。

また、織田信長の根来攻めの際に焼失したという伝承と、赤井神社跡周辺で「薬師堂」、「大門」などの字名がわずかに残っているにすぎず、仏性寺についての詳細は依然として不明のままである。

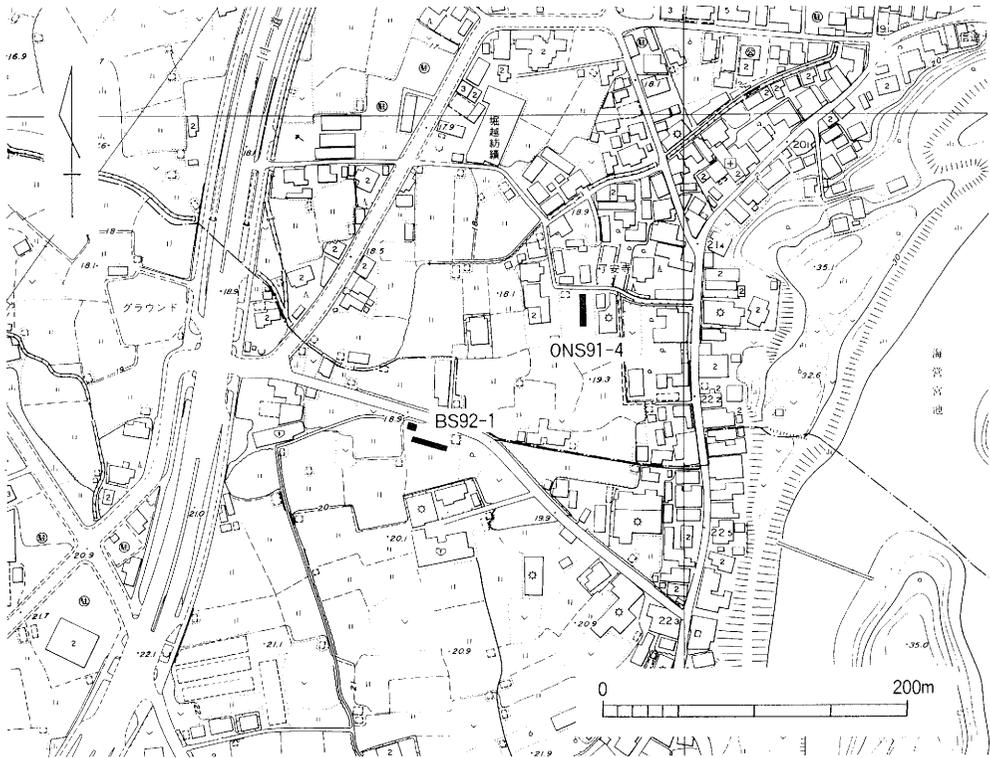
現在、仏性寺跡は西側横を国道26号線が南北に縦断し、市道赤井神社線が遺跡を南北に分断している。

樫井川左岸の平野部に所在する仏性寺跡は、周辺に史跡である厩戸王子跡、仏性寺より時期は遡るが白鳳時代に創建された寺院である海会寺跡などがあり、地形分類上は、洪積段丘低位面上に位置する。

昭和55年度に行なわれた調査では、平安～鎌倉時代と室町時代の2面の遺構面が初めて確認され<sup>②</sup>、昭和62年度に行なわれた調査では寺院に関係すると思われる整地層、池の護岸状の積石遺構、礎石状の配石遺構などが確認された<sup>③</sup>。

また、平成元年度に行なわれた調査では寺院に関係する遺構は確認されなかったものの、中世の遺物包含層が確認された<sup>④</sup>。

以上のように徐々にデータの蓄積はあるものの、仏性寺跡の全容を明らかにするには、あまりにも情報量が乏しいため、今後のより一層の調査・研究に期待したい。



第22図 仏性寺跡および大苗代遺跡調査区位置図

## 第2節 92-1区の調査

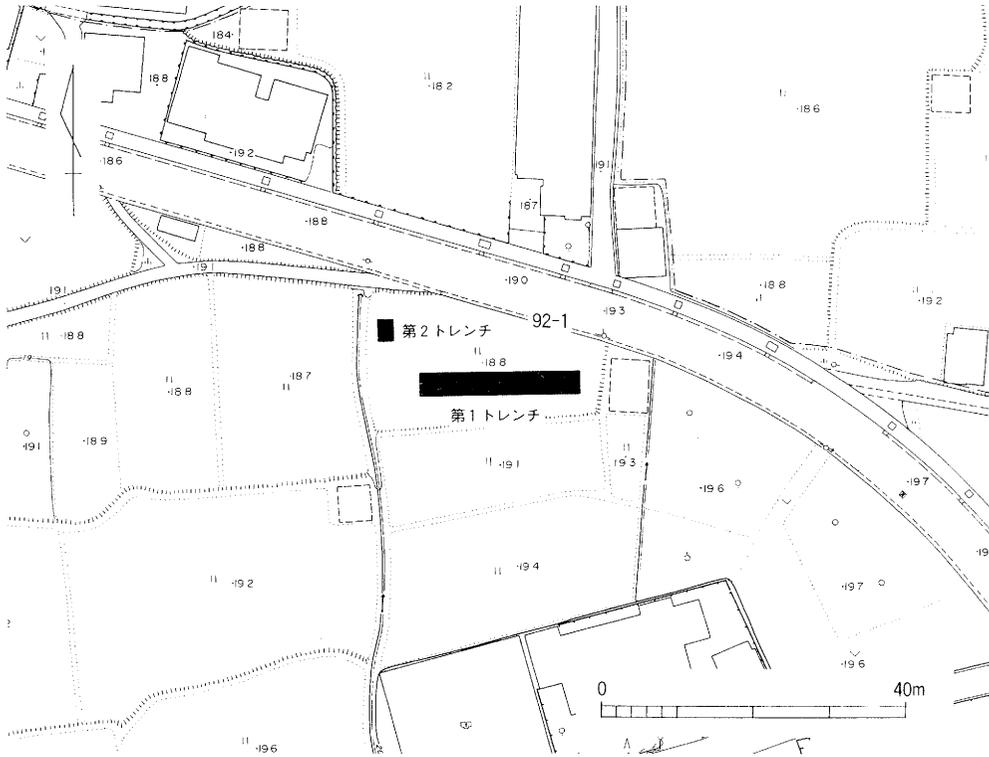
### 1. 位置 (第22・23図)

調査区は遺跡のほぼ中央に位置している。過去の発掘調査で北側隣接地では整地層や石積を伴う中世の落ち込みが検出されている。

従来より、中世瓦の散布などから寺院遺構の存在が強く想定されている地点であり、今回の調査でも、明確な寺院遺構確認の期待がもたれた。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 10・26)

基本的な層序は上から順に、第I層・暗灰色土(耕土)、この下には第II層にあたる黄色混じり淡青灰色粘土(床土)が介在し、第III層の円礫混じり暗赤褐色粘土に至るものである。



第23図 仏性寺跡92-1区地形図

これらの下層には暗黄灰色系の軟弱な礫層が存在している。

このうち、第Ⅲ層は人為的に施された盛土と考えられるもので、状況的には北側隣接地の調査で確認されたものと非常に似通っている。整地層の層厚は最大30cm以上を測るものである。

なお、当調査区からは遺物は出土しなかった。

### 3. 遺構 (P L. 10・26)

第Ⅲ層の上面でピットが検出されている。

ピットは平面形が不整円形を呈すものである。「カタ」は、ベースとなる整地層がもろいせいもあり、ややくずれぎみの状態で検出された。埋土は暗茶褐色粘土の単一層である。規模は、直径約20cm、深さ約20cmをそれぞれ測る。

遺物は出土しなかった。

- 註 ① 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1986）
- ② 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（1981）
- ③ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』（1988）
- ④ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）

## 第9章 岡田東遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第24図）

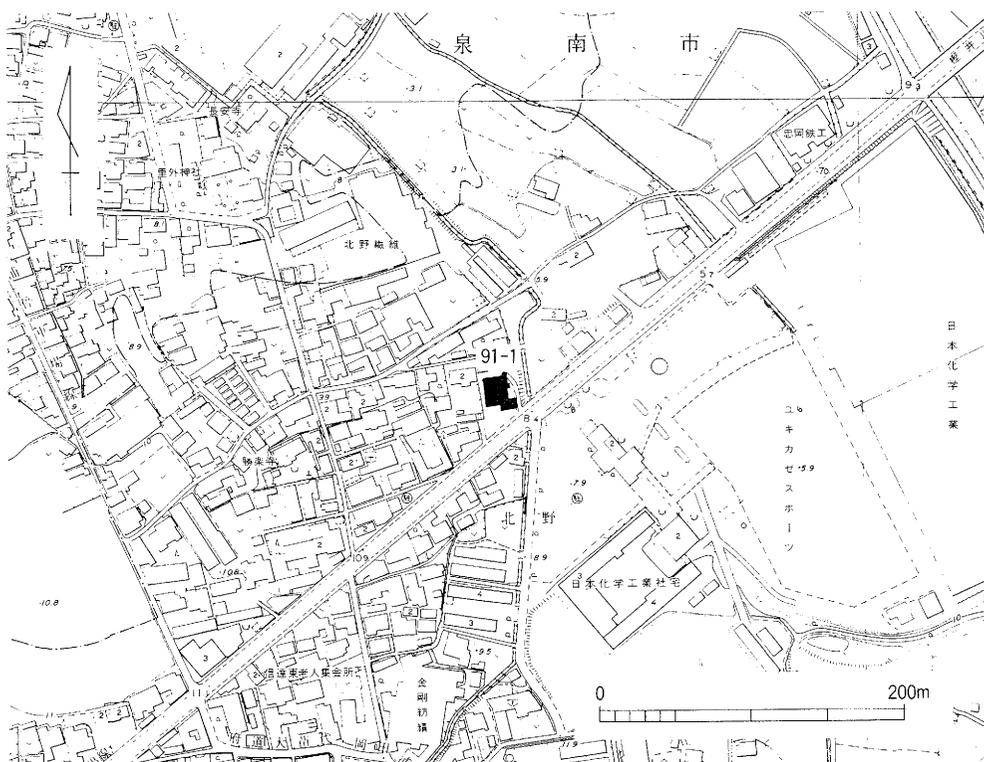
岡田東遺跡は、平成3年度に、試掘調査によって新たに発見された遺跡である。地形的には樫井川左岸の氾濫原及び旧河道へ向かって落ち込む段丘の東側先端部分に位置している。この数年、樫井川左岸の段丘面上では、新規に発見される遺跡が相次いでいる。しかし、今回の調査で確認されたものは、縄文時代の遺構・遺物や古墳時代の後期の竪穴住居、掘立柱建物など市域全体でも初めての確認となるものが多かった。

樫井川左岸の遺跡を時代順に概観してみたい。旧石器時代から縄文時代草創期、早期では市域全体においても遺物が散見されるだけで実態は全く不明であるが、東方に位置する岡田西遺跡から市域では2例目にあたる有舌尖頭器が1点出土している<sup>①</sup>。それ以降では、氏の松遺跡で晩期の土器がわずかに出土しているのみであり<sup>②</sup>、縄文時代の遺構が確認されたのは今回の岡田東遺跡が初めてである。弥生時代から古墳時代にかけても遺物が散見されるだけで実体のある遺構としては今回の岡田東遺跡の調査のみである。

飛鳥時代から奈良時代になると、海会寺跡とその建立氏族の集落が確認されており<sup>③</sup>、この地域における古代国家の支配体制が徐々にその姿を現してきている。平安時代から鎌倉時代にかけて和泉地域では九条家領として著名な日根荘など数多くの荘園が立荘されるようになる。樫井川左岸においても、大きな画期は平安時代末期から鎌倉時代にかけてである。岡田西遺跡では、本格的な水田開発のために掘削された大きな灌漑用水路やそれに伴う耕作痕が検出され、この地域の生産の「場」となっていたことが確認された<sup>④</sup>。文献的には全く不明であるが、これらを開発したものは、ある一定の労働力を組織的に駆使しうる集団であることは間違いない。また集落も増加し大苗代遺跡、北野遺跡、新伝寺遺跡など樫井川左岸の段丘面は大きく開発されてゆく。

このような中で岡田東遺跡で確認された遺構・遺物の時期は同じ地形に分布する遺跡の中でもかなり異色と言える。今後の調査の進展によっては泉州南部

地域の歴史を一変させてくれる可能性があるだろう。



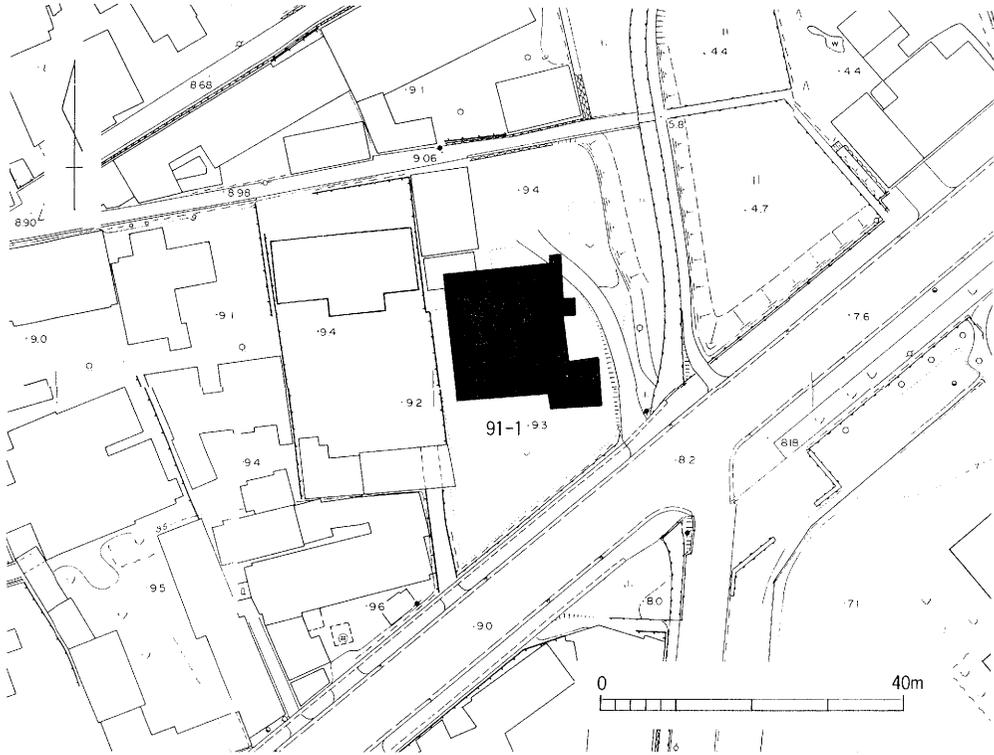
第24図 岡田東遺跡調査区位置図

## 第2節 91-1区の調査

### 1. 位置 (第24・25図)

調査区は、府道泉佐野岩出線、「北野東」交差点北側に面した部分である。

地形的には先述のとおり榎井川左岸の段丘面の先端に位置する。調査区より東約10mで、比高差約5mの緩やかな崖となって落ちている。これより東側は榎井川の旧河道が推定される。また、府道をはさんで南東側に位置する新伝寺遺跡との間には北東から南西にはしる開析谷が存在する。

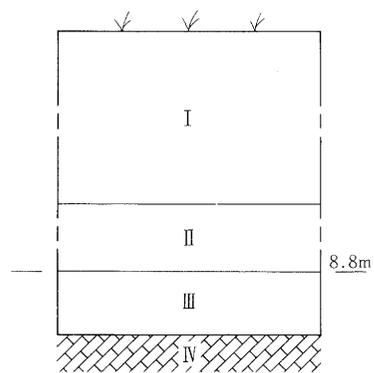


第25図 岡田東遺跡91-1区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (第26図)

当該地の大半は家庭菜園用の畑として利用されていた。基本層序の概念は次のとおりである。

第I層は、家庭菜園用の滋味土である。トレンチのほぼ全域で約20cmの厚さで堆積している。第II層は、褐灰色シルトである。砂質を呈しており、トレンチのほぼ全域で約20cmの厚さで確認されている。旧耕土のように思われるが、床土などは検出されず水田としては利用されていなかったようである。第III層は黒褐色系の粘性シルトである。厚さ約15cmを測るが、トレンチの一部では検出されなかつ



- I 現代耕土及び盛土
- II 灰褐色砂質土(旧耕土)
- III 黒褐色系シルト層
- IV 暗褐色系礫混じりシルト層

第26図 岡田東遺跡91-1区基本層序

た。包含層と考えてよいであろう。第Ⅳ層は、地山である暗褐色系シルト層である。この面で遺構を確認した。礫をかなり多く含んでおり、部分的には礫層だけのところも見られた一方、礫をまったく含まない部分もあった。

遺物は、包含層からは、古墳時代後期の遺物がほとんどで、この付近でよくみられる中世の遺物はまったく出土しなかった。遺構からは、数多くの遺物が出土している。時期的には縄文土器をはじめ、弥生土器及び石器、古墳時代前期や後期の土師器、須恵器など広い時期にわたって出土している。

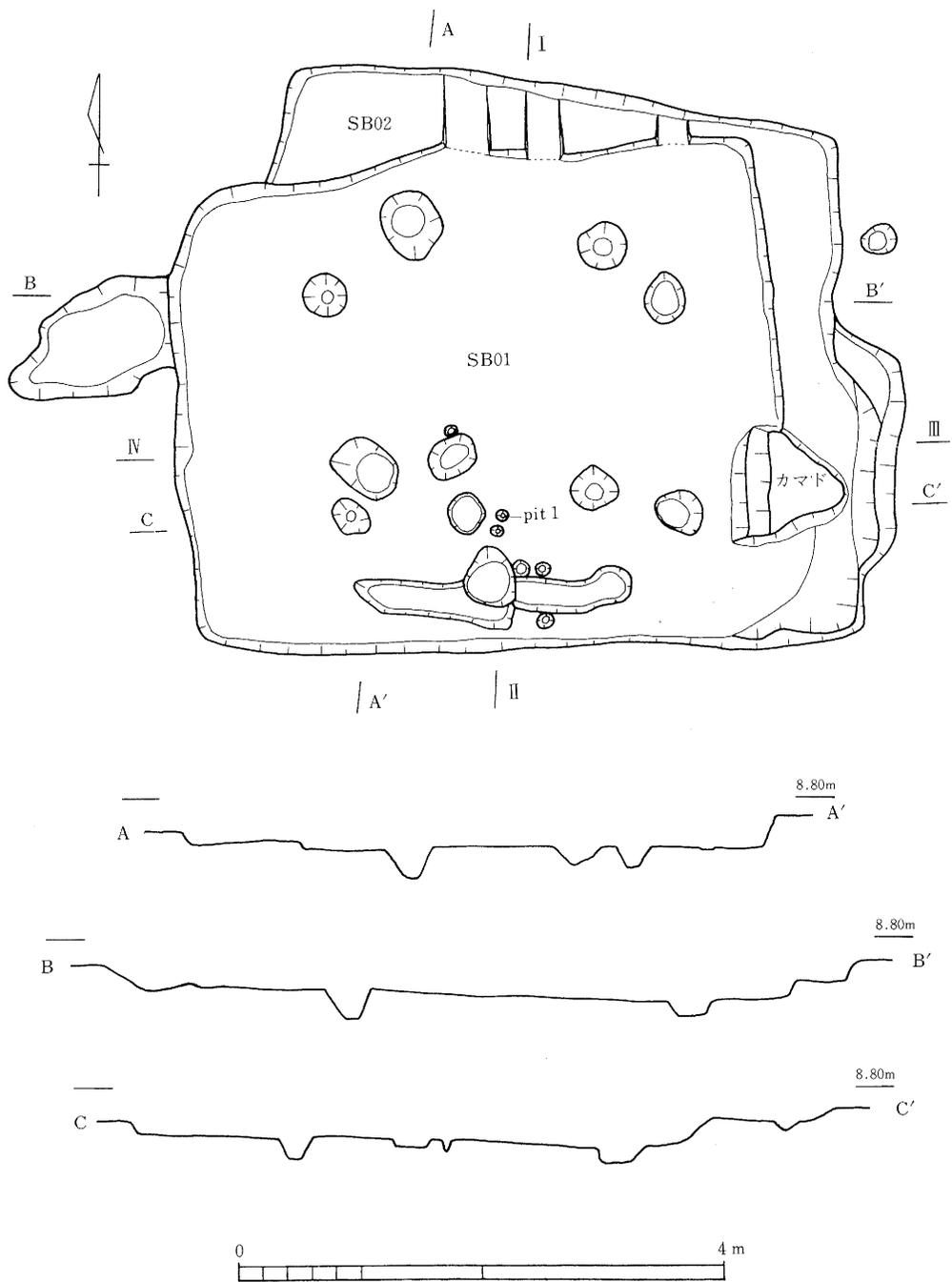
### 3. 遺構（P L. 11・27～29、第27・28図）

遺構については、今回の報告では古墳時代後期のものを中心にしてその概要報告を行い、縄文・弥生・古墳時代前期の遺構や詳細な報告については、今後の機会としたい。

現段階では竪穴住居3棟、掘立柱建物5棟の他に、数基の土坑や建物として確認されないピットが多数確認されている。このうち竪穴住居と掘立柱建物の説明を行いたい。

S B01・02は切り合う竪穴住居である。調査区の南東端で検出されたためトレンチを拡張して全体を確認した。

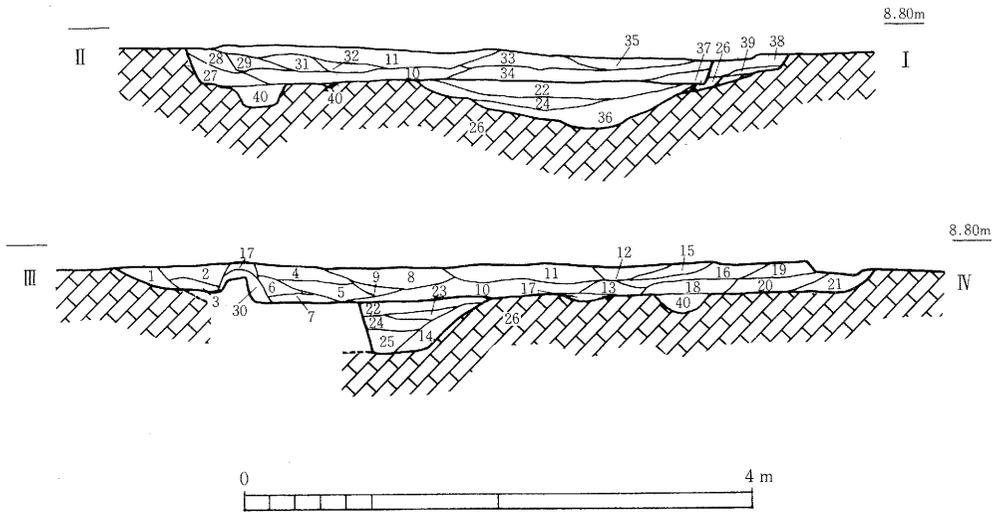
S B01は北壁4.6m、南壁4.7m、東壁4.2m、西壁3.7mで、南北最大長4.3m、東西最大長5.0mを測る。平面形はやや東に向かって開く長方形を呈し、若干の隅丸方形である。また東壁やや南側には造り付けのカマドを有している。北壁はやや乱れて検出され、カマドから南部分の西壁は失われている。壁体は比較的残りがよく約20～30cmを測る。壁の立ち上がり角度は50～70°であり、床面は西に向かって少し傾斜している。ピットは数カ所検出されているが、支柱穴は4本であったと考えられる。直径35～43cm、深さ13～24cmの規模を持ち、柱穴間の距離は北側2.7m、南側2.8m、東側1.8m、西側1.8mを測る。掘方のみで柱痕等は確認されなかった。また、周壁溝は確認できなかった。この他に、西壁外側に接して、1.5m×0.9m、深さ26cmの不整形の土坑が検出されており、なんらかの付帯施設の可能性がある。この部分からは遺物は出土しなかった。なお、東側半分の床面の下層には住居の時期より遡る、弥生時代後期末から古



第27図 岡田東遺跡91-1区S B01・02平面図  
 (図中の I ~ IVは、第28図に対応)

墳時代前期の土坑が切り合っており、竪穴住居の埋土からも当該期の遺物が多く出土している。

S B02はS B01に切られる竪穴住居である。北壁と東壁のみ遺存している。



- |                |                    |                      |               |
|----------------|--------------------|----------------------|---------------|
| 1 暗褐色シルト       | 11 暗褐色ブロック土混シルト    | 21 褐色礫混シルト           | 31 極暗褐色礫混シルト  |
| 2 黒褐色炭混シルト     | 12 暗褐色礫混シルト        | 22 暗褐色粘性シルト (下層遺構)   | 32 暗褐色礫、炭混シルト |
| 3 暗黒褐色炭混シルト    | 13 暗褐色シルト          | 23 暗褐色ブロック土混シルト( ♪ ) | 33 暗褐色シルト     |
| 4 暗褐色シルト       | 14 黒色礫、炭混シルト(下層遺構) | 24 黒色礫混シルト ( ♪ )     | 34 褐色シルト      |
| 5 黒褐色シルト       | 15 極暗褐色礫混シルト       | 25 黒色礫 ( ♪ )         | 35 暗褐色炭混シルト   |
| 6 黒褐色炭混シルト     | 16 暗褐色礫混シルト        | 26 黄褐色クサリ礫(地山)       | 36 褐色砂礫(下層遺構) |
| 7 暗褐色ブロック土混シルト | 17 褐色シルト           | 27 暗褐色礫混シルト          | 37 暗褐色礫混シルト   |
| 8 暗褐色礫混シルト     | 18 極暗褐色礫混シルト       | 28 暗褐色シルト            | 37 極暗褐色礫混シルト  |
| 9 極暗褐色礫混シルト    | 19 褐色礫混シルト         | 29 暗褐色礫混シルト          | 39 褐色シルト      |
| 10 黒褐色礫混シルト    | 20 暗褐色礫混シルト        | 30 明褐色シルト            | 40 褐色粘性シルト    |

第28図 岡田東遺跡91-1区S B01・02断面図

北壁寸法は4.5mを測るが、東壁は大きく乱れているため不明である。壁体は約10cm程しか遺存しておらず削平が著しい。壁の立ち上がり角度は約75°である。主柱穴は4本であったと考えられ、直径35~60cm、S B01床面からの深さは18~28cmの規模を持ち、柱穴間の距離は北側1.6m、南側1.8m、東側2.1m、西側2.2mを測る。これら柱穴の並びから平面形を推定すると、S B02は一辺、約4.5mの方形であったと考えてよいであろう。周壁溝は検出されず、カマド等の施設を有していたかどうか不明である。

S B03はトレンチ北西隅に位置する竪穴住居である。大半の部分は調査区外へ出ている。削平のためか壁体は存在せず、周壁溝と考えられる幅30~50cm、深さ10cmの溝のコーナー部分が検出されている。また主柱穴と考えられるピットが1つ内側に検出されている。遺物は出土しなかった。

S B04からS B08は、掘立柱建物である。

S B04・S B05はトレンチ北西部に位置し、北西部分は調査区外へのびる。重複しているが切り合い関係は認められなかった。

S B04は3間(3.5m)×3間(3.6m)であるが、北側ピット列は検出できなかった。柱間は1.0～1.5mを測り、面積約12.6㎡である。またピットの掘形はいずれも円形であった。

S B05は、桁行3間(4.2m)、梁行2間(2.8m)。柱間は、桁行1.2～1.7m、梁行1.3～1.5mを測り、面積は約11.8㎡である。ピットの掘形はいずれも円形であった。

S B06は、S B07のピットの一つに切られており、S B07に先行する建物である。桁行4間(5.2m)、梁行2間(2.8m)。柱間は、桁行1.5～2.2m、梁行1.4～1.7mを測り、面積は約14.6㎡である。ピットの掘形はいずれも円形であった。

S B07は、桁行4間(5.3m)、梁行2間(3.3m)。柱間は、桁行1.4～2.0m、梁行1.5～1.8mを測り、面積は約17.5㎡である。ピットの掘形は円形のものほとんどであった。

S B08は、桁行4間以上、梁行3間以上に南面する庇が付くと考えられる大型の建物である。北西部分は調査区外へのびているが、拡張したトレンチで北側の平柱と考えられるピットを検出しているため、庇を含めて4間と考えられる。柱間は、桁行2.3～3.0m、梁行2.2m、また庇の柱列との柱間は1.5～1.8mを測る。南側の柱列の掘形は、方形になるものもあれば不整形を呈するものもありまちまちである。直径は60～80cmであるが深さは削平されているためか20～30cmとやや浅い。庇部分の柱列の掘形も不整形のものが多く直径50cm前後である。柱列のレベルは西に向かって傾斜している。また妻柱のピットは他に比べるとやや小さく円形であることが指摘できる。

これを桁行5間、梁行4間と想定すると桁行総長約12.4m、梁行総長約8.3mで、面積約103㎡となり、海会寺跡の東地区で検出されているS B210に匹敵する規模となる<sup>⑤</sup>。

以上のことから遺構のまとめと問題点を述べたい。

建物群の年代であるが、S B01は、カマドやピットからの出土遺物から見て、ほぼ6世紀末から7世紀初頭と考えてよいであろう。S B02に相当する埋土やピットからはほとんど遺物は出土しなかったが、S B01との関係から推定するとS B01よりさほど古いものではない。掘立柱建物は掘形からはほとんど時期の決め手となる遺物は出土しなかったが、竪穴住居と大きく時期の違うものではないであろう。これら掘立柱建物や竪穴住居の後に、S B08が出現すると考えられる。出土した遺物すべての中には7世紀初頭以降の遺物は含まれないことから、S B08の時期もその前後におさまるものとみてよいであろう。

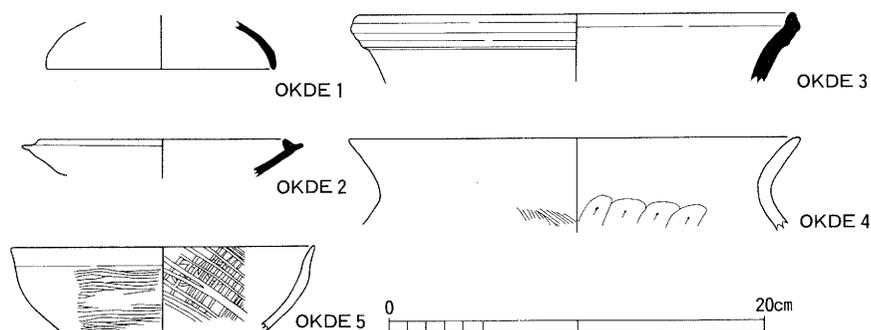
建物の方向をみてみると、主軸は2通りあることが指摘できる。S B01・02に対応する掘立柱建物はS B06、S B03に対応する掘立柱建物はS B04・05・07である。これらが時期的な違いなのか、あるいは単位の相違なのかは今後の問題となってくるであろう。

竪穴住居の構造からは、S B01・02のように周壁溝を持たないものと、S B03のように周壁溝を持つものとの違いがあるということである。

S B08とそのほかの建物との関係から考えてみると、6世紀末まで竪穴住居を使用するというかなり後進的な集団が存在していたのにもかかわらず、そのわずかに後に、底を持った大型の建物が突如として出現した要因がいかなるものかなど課題は多い。

#### 4. 遺物 (P L. 32、第29図)

先述のとおり、今回の報告は古墳時代後期の概要のみにとどめてあるため、



第29図 岡田東遺跡91-1区出土の土器

図示した遺物はS B01・02出土のものだけとしている。

1・2は杯蓋と杯である。1は、S B01部分に相当する埋土から出土している。天井部と口縁部の境目は、ほとんど稜を持たないものである。焼成は良好。胎土は白色粒を少量含み、色調は灰色を呈する。復元口径は13.2cmを測る。2は、カマドの内部から出土しておりS B01に伴うものと見てよいであろう。立ち上がりは内傾し、非常に低くなっている。焼成は良好。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰色を呈する。復元口径は13.0cmを測る。

3は甕である。Pit 1より出土している。口縁端部は内側に折り曲げて、稜が明確に残る。焼成はやや不良。胎土は白色粒を多く含み、色調は暗灰黄色を呈する。復元口径は23.2cmを測る。

4は土師器の甕である。2と同様にS B01に相当するカマド部分から出土している。大きく外彎して開く口縁部であるが、それほど長く伸びないものである。口縁部はヨコナデを施す。体部外面はハケ目、内面は下方から上方へ向かってヘラケズリを施している。胎土は、クサリレキなど砂粒を多く含み、色調は橙色を呈する。復元口径は24.2cmを測る。

5は土師器の杯である。S B01に相当する埋土から出土している。内外面ともヨコナデを施した後、外面は丁寧な横方向のヘラミガキ。内面は口縁部に連弧文のヘラミガキの後、斜格子文のヘラミガキを施している。胎土は砂粒をほとんど含まず、色調は橙色を呈する。復元口径は16.2cmを測る。

註 ① 泉南市教育委員会『岡田西遺跡現地説明会資料』（1992）

② 註①と同じ

③ 泉南市教育委員会『海会寺』（1986）

④ 註①と同じ

⑤ 註③と同じ

## 第10章 まとめ

今年度の、文化財保護法に基づく埋蔵文化財包蔵地内における発掘届出および通知は、平成5年2月26日現在で、第1表に示したとおり56件を数える。

昨年以來、経済成長率鈍化など景気に大きな変動がおり、一時は発掘届出の増加も落ち着く様子を見せたものの、空港関連事業を含め多様化・大規模化した開発行為が頻繁に行われている当市域においては、今年度の届出数の変化傾向をみると、これから急増していく気配を感じずにはいられない。

こうした周囲の状況のもと、今年度も市内各遺跡群において合計23件の発掘調査を行いその内容究明に努めた。その内訳は、第2表に示したとおり男里遺跡10件、幡代遺跡2件、下村遺跡1件、である。いずれの調査も個人住宅建設等に伴うものであり、調査面積をみても、いわゆる大規模開発に伴うものなど比べればさほど大きなものではない。しかし、ここから得られた情報は決して少ないものではないことは、あらためていうまでもない。

なお、本書では前年度調査未報告分の男里遺跡4件(91-14~17区)、幡代遺跡1件(91-4区)、新家遺跡1件(91-1区)についても報告することができた。この成果も含め、以下に調査の成果を簡単にまとめておきたい。

男里遺跡では、今年度10件の調査がおこなわれた。各調査区ではそれぞれ貴重な情報を得ることができた。

92-1~3区は各々が非常に近接した位置で行われた調査である。この中でも92-1区では、古墳時代の溝とそこから土器群が一括出土するなど、男里遺跡における古墳時代のイメージをより豊穣にさせる情報が得られた。

92-4区では、直接的な歴史情報は得られなかったが、男里川の旧河道を推定する上で重要な地下水脈の位置推定を助ける情報が得られたといえよう。

92-5~9区では、各調査地区周辺の遺構・遺物包含層分布などについて、これまでの情報に更なるデータを新たに加えることができた。このうち特に92-6区では、これまで顕著な遺構が確認されていなかった遺跡北東縁付近において、明確な遺構を確認することができた。ここでは遺跡の範囲を明確にする上で非常に有意義な結果が得られた。

91-14・17区では、遺跡内での微地形復原に必要なデータが得られ、また同様に91-15区でも弥生時代の所産となる遺構が確認されたほかに、先年の調査成果とつぎ合わせを行うことから徐々にではあるが往時の旧地形復原が進められている。

また、91-16区は男里遺跡内の遺構密集地付近での調査となったが、やはり遺構の分布範囲を知る上で、重要なデータが得られている。

幡代遺跡では近年調査が増加している遺跡東半部分で包含層は確認できなかったものの、遺跡の範囲を知る上で新たな知見を得ることができた。

また、これまで早くから周知され内容究明が進められてきた遺跡のほかにも、新規に発見されたもの、あるいは内容が不分明だったものについても新たな知見が明らかにされつつある。

男里東遺跡は新規に発見された遺跡であるが、これまで知られていなかった地域、市域中央北部に広がる洪積段丘面の西縁にも遺構が分布し、遺跡が展開していることが明らかにされた。

また、高田遺跡ではこれまでの調査成果を裏づけるばかりか、新たに鋤溝群や柱穴群が検出されている。今後新たな生産基盤や集落そのものの発見、あるいは河川性の堆積層自体が遺物包含層であることから、旧河道の存続時期などの確認を期待されることとなった。

同様に新家遺跡では、過去唯一の調査区近くの谷にまで弥生時代遺物包含層が広がっていることがはっきりした。今後は、特殊なその地形的環境から独特の発達を遂げたと思われる「新家谷」の内容究明にも力を注ぎたい。

また下村遺跡では、初めての発掘調査が行われ、ここでは市域の発掘例では初めてのカマドが2基及びピット群が検出された。前者は近世の所産となるものであり、後者からは中世遺物が出土している。今後、中世・近世の遺構・遺物包含層の広がりを求めることから、現在の集落形成に至る過程を明らかにできるのではないだろうか。

さて、市域でもここ数年発掘調査が集中している地域がある。市域の中央北部に広がる洪積段丘低位面の東半部分である。近年大苗代・北野・岡田周辺の遺跡群などで逐次発掘調査が進められ、多くの知見を得ている。

仏性寺跡はこの地域の中では最も南側の高所に位置し、比較的早くから調査が進められている遺跡である。その名のとおり、中世の寺院跡であることが想定されているのであるが、今年度の調査成果からは、過去に確認されている整地層がより広範囲に広がっている可能性を指摘し得ることとなった。

さて、ここ数年の調査の増加によってもっとも多くの知見を得ているのは、先にも少しあげた岡田遺跡周辺ではなかろうか。特に岡田西・岡田東・新伝寺遺跡といった、洪積段丘低位面上に立地する遺跡発見があいつぎ、段丘面の開発開始時期が数年前に考えられていたよりも、大幅にさかのぼることが判明している。

今回ここに紹介した岡田東遺跡は市域の北東端、榎井川に面した洪積段丘低位面のまさに縁辺に立地している。ここで我々はこれまでに無い、非常に大きな知見を得ることができた。本書で紹介した時代—縄文・古墳時代そして古代—の生活痕跡はこれまで、視点を市域全体に広げてもさほど認められていなかった。これから、当地周辺の段丘面開発の時期を考慮していく上で画期的な情報が得られたばかりか、市域ひいては泉州一帯の歴史観を変貌させ得るデータが得られたといえるのではないか。

ここ数年の調査で情報量は圧倒的に増加してはいるが、いまだ十分ではない。だが、特定の区域に限られるが「歴史空間」の復原は着実に進んでいる。小規模調査の集積から、「面」へ「空間」へと歴史再構成は一步一步前進している事をここにあらためて報告しておきたい。

また、市域東部において顕著なように、新たな課題となるべき遺跡群の発見・調査が続き、情報は続々と蓄積されつつある。これらの遺跡が内包する情報から我々が受けた衝撃は、これまでさほど判明していなかった部分であっただけに、非常に大きなものであった。このような状況下に、いまさらながら自己研鑽の必要を痛感している次第である。

以上、ここまで今年度の報文を述べてきた。あらためて言うまでもないが、激変していく遺跡周辺の環境、またともすれば「器」からあふれんばかりの情報の増加など、我々を取りまく諸状況に逐次対応していくために新たな決意をここに確認すると共に、我々の重い責務をここに再確認して筆をおきたい。

第5表 文化財一覧表

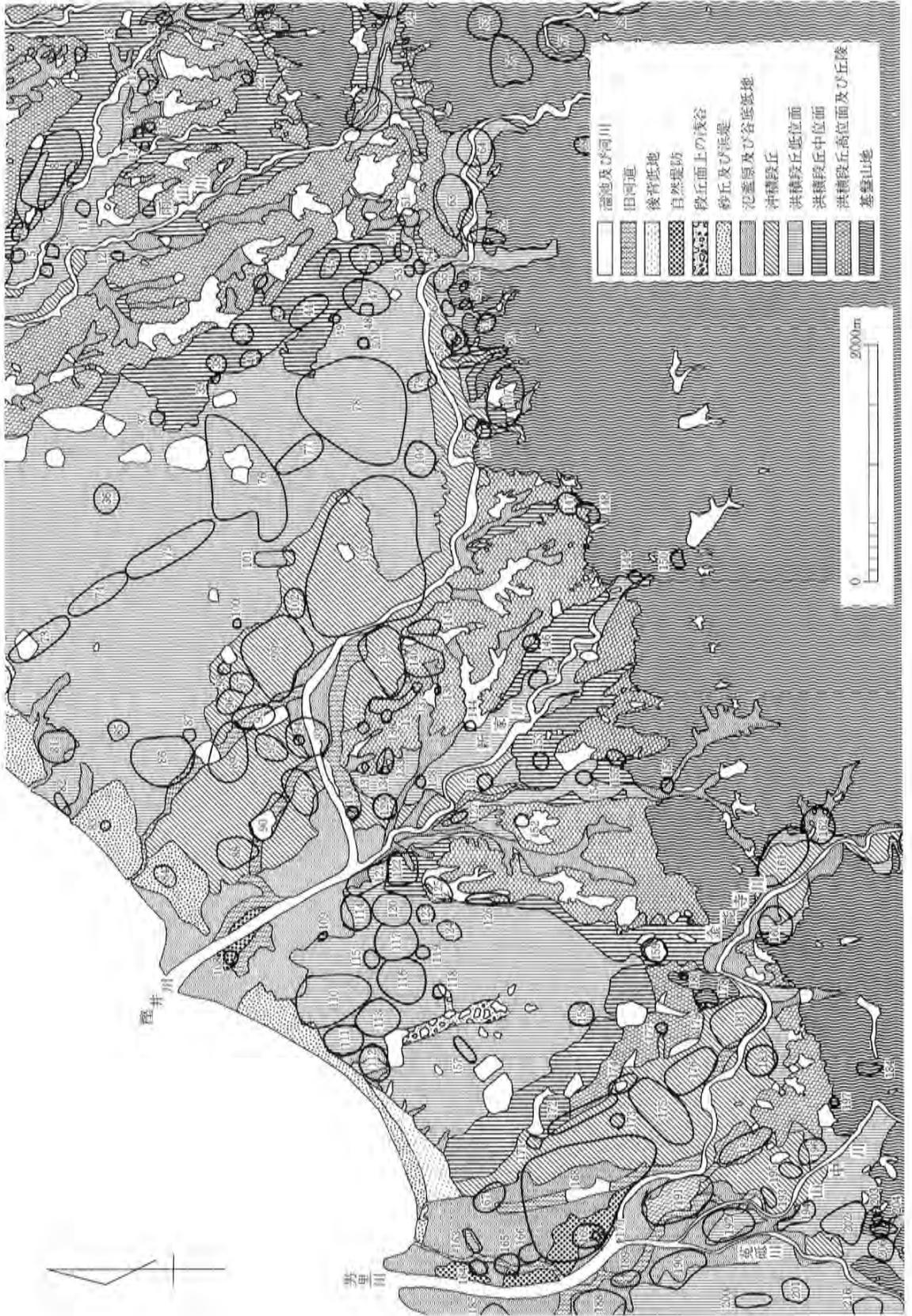
1	正法寺跡	46	北ノ前遺跡	91	櫻井西遺跡	136	新家オドリ山南遺跡	181	岡中遺跡
2	小垣内遺跡	47	野々宮遺跡	92	藤波遺跡	137	フキアゲ山西遺跡	182	高田山古墳群
3	大谷池遺跡	48	総福寺天満宮本殿	93	櫻井城跡	138	引谷池竈跡	183	岡中西遺跡
4	大久保B遺跡	49	宮ノ前遺跡	94	奥家住宅	139	禿田遺跡	184	雨山南遺跡
5	下高田遺跡	50	垣外遺跡	95	道ノ池遺跡	140	フキアゲ山東遺跡	185	福島遺跡
6	紺屋遺跡	51	屯田遺跡	96	岡ノ崎遺跡	141	フキアゲ山1号墳	186	尾崎海岸遺跡
7	口無池遺跡	52	八王子遺跡	97	中菖蒲遺跡	142	フキアゲ山2号墳	187	馬川北遺跡
8	東門寺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	98	岸ノ下遺跡	143	禿田古墳群	188	馬川遺跡
9	降井家屋敷跡	54	日根神社遺跡	99	諸目遺跡	144	池尻遺跡	189	下出北遺跡
10	大久保C遺跡	55	西ノ上遺跡	100	城ノ塚古墳	145	中の川遺跡	190	室堂遺跡
11	中家住宅	56	川原遺跡	101	禅興寺跡	146	岩の前遺跡	191	平野寺(長楽寺)跡
12	大久保A遺跡	57	母山遺跡	102	ダイジョウ寺跡	147	別所北遺跡	192	向出遺跡
13	五門北古墳	58	母山近世墓地	103	三軒屋遺跡	148	別所遺跡	193	高田西遺跡
14	五門遺跡	59	向井山遺跡	104	上之郷遺跡	149	高野遺跡	194	向山遺跡
15	五門古墳	60	鏡塚古墳	105	向井代遺跡	150	昭和池遺跡	195	高田南遺跡
16	大浦中世墓地	61	梨谷遺跡	106	意賀美神社本殿	151	上村遺跡	196	和泉鳥取遺跡
17	大浦遺跡	62	笹ノ山遺跡	107	向井池遺跡	152	狐池遺跡	197	雨山遺跡
18	甲田家住宅	63	土丸遺跡	108	川原遺跡	153	上野中道遺跡	198	内畑遺跡
19	久保B遺跡	64	土丸南遺跡	109	岡田東遺跡	154	芋掘遺跡	199	皿田池古墳
20	鳥羽殿城跡	65	雨山城跡	110	岡田遺跡	155	石ヶ原遺跡	200	正方寺遺跡
21	墓の谷遺跡	66	土丸城跡	111	氏の松遺跡	156	高倉山南遺跡	201	西畑遺跡
22	来迎寺本堂	67	下大木遺跡	112	座頭池遺跡	157	本田池遺跡	202	自然山遺跡
23	池ノ谷遺跡	68	大木遺跡	113	岡田西遺跡	158	上代石塚遺跡	203	玉田山遺跡
24	成合寺遺跡	69	稲倉池北方遺跡	114	新伝寺遺跡	159	信之池遺跡	204	玉田山古墳群
25	山ノ下城跡	70	大西遺跡	115	中小路北遺跡	160	滑瀬遺跡	205	玉田山須恵器竈跡
26	山出遺跡	71	松原遺跡	116	中小路西遺跡	161	六尾遺跡	206	寺田山遺跡
27	上瓦屋遺跡	72	中開遺跡	117	中小路遺跡	162	六尾南遺跡	207	黒田西遺跡
28	湊遺跡	73	末廣遺跡	118	坊主池遺跡	163	天神ノ森遺跡	208	鳥取北遺跡
29	瓊波羅密寺跡	74	安松遺跡	119	中小路南遺跡	164	キレト遺跡	209	鳥取遺跡
30	瓊波羅遺跡	75	長滝遺跡	120	北野遺跡	165	高田遺跡	210	鳥取南遺跡
31	佐野王子跡	76	植田池遺跡	121	一岡神社遺跡	166	男里北遺跡	211	黒田南遺跡
32	上町東遺跡	77	郷ノ芝遺跡	122	海会寺跡	167	戎畑遺跡	212	神光寺(蓮池)遺跡
33	市場東遺跡	78	日根野遺跡	123	大苗代遺跡	168	男里遺跡	213	三味谷遺跡
34	若宮遺跡	79	机場遺跡	124	仏性寺跡	169	光平寺跡	214	三升五合山遺跡
35	上町遺跡	80	棚原遺跡	125	海宮宮池遺跡	170	光平寺石造五輪塔	215	小口谷遺跡
36	依屋遺跡	81	羽倉崎東遺跡	126	市場遺跡	171	男里東遺跡	216	井関遺跡
37	北尻遺跡	82	羽倉崎遺跡	127	向井山遺跡	172	長山遺跡	217	石田山遺跡
38	岡口遺跡	83	嘉祥神社本殿	128	新家遺跡	173	山ノ宮遺跡	218	石鳥取遺跡
39	中嶋遺跡	84	道ノ池遺跡	129	下村遺跡	174	前田池遺跡	219	戎遺跡
40	小塚遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	130	下村北遺跡	175	幡代遺跡	220	貝掛遺跡
41	十二谷遺跡	86	船岡山遺跡	131	下村1号墳	176	幡代南遺跡	221	金剛寺遺跡
42	丁田遺跡	87	岡本庵寺	132	新家オドリ山東遺跡	177	奥ノ池遺跡	222	塚谷古墳群
43	新池尻遺跡	88	田尻遺跡	133	新家オドリ山遺跡	178	林昌寺跡		
44	大坪遺跡	89	船岡山南遺跡	134	下村2号墳	179	林昌寺瓦竈跡		
45	市堂遺跡	90	夫婦池遺跡	135	新家古墳群	180	林昌寺銅鐸出土地		

# 版 图

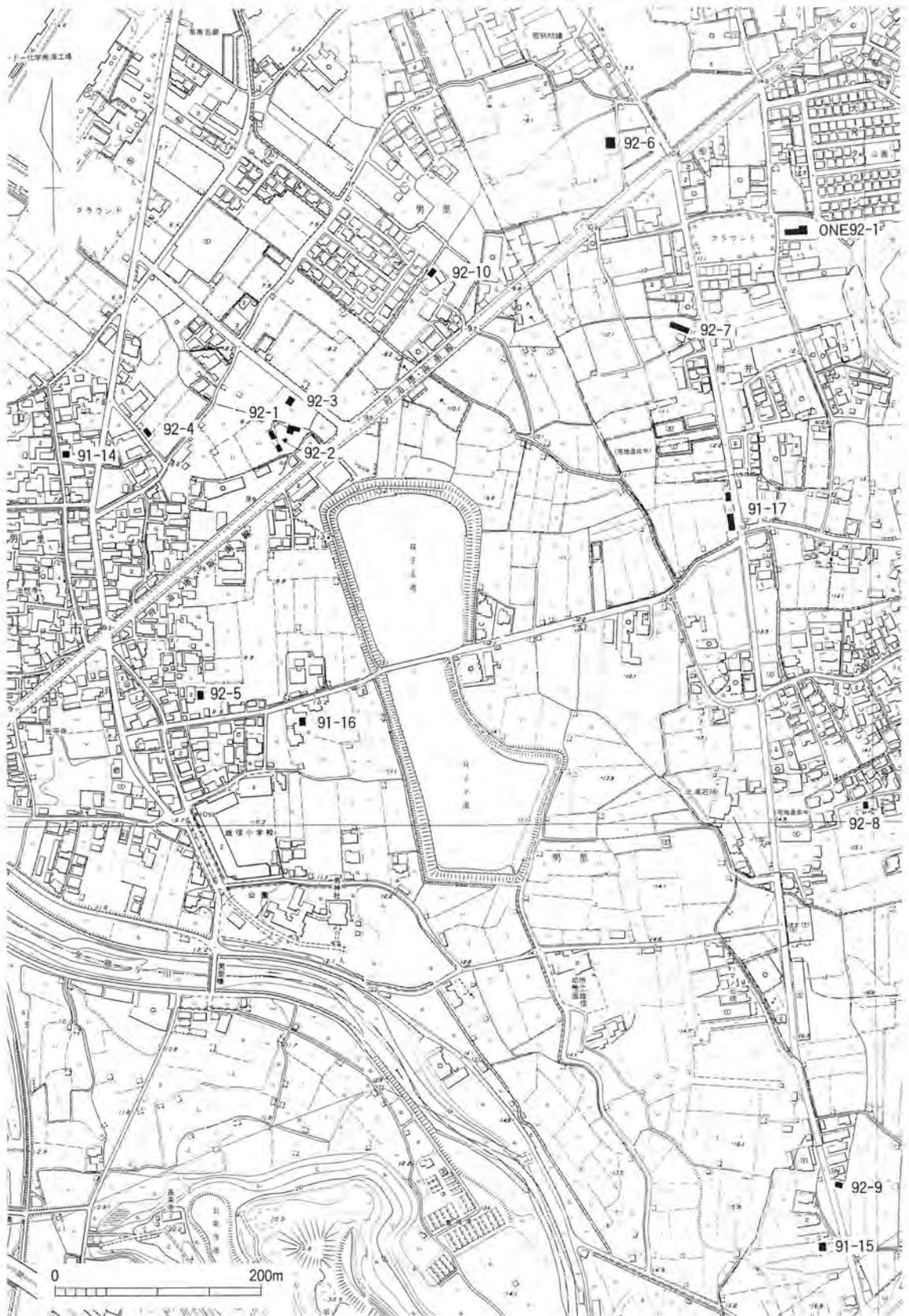
PL.1 泉南地域の文化財



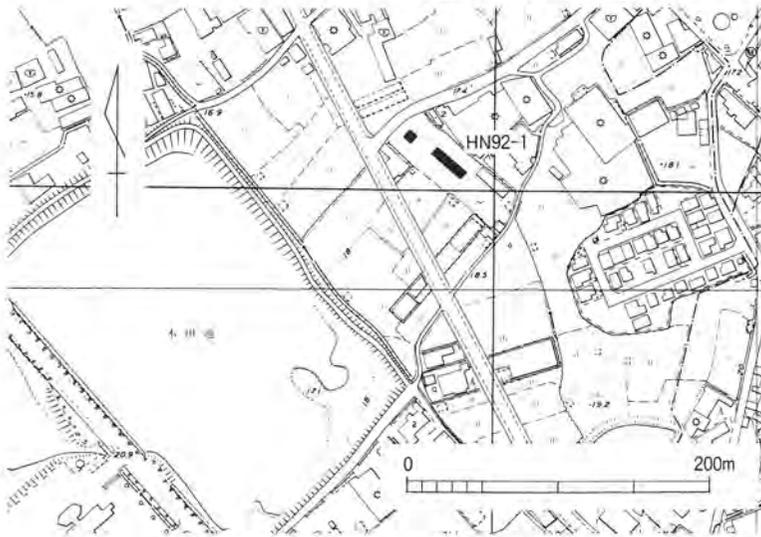
PL.2 泉南地域の地形分類



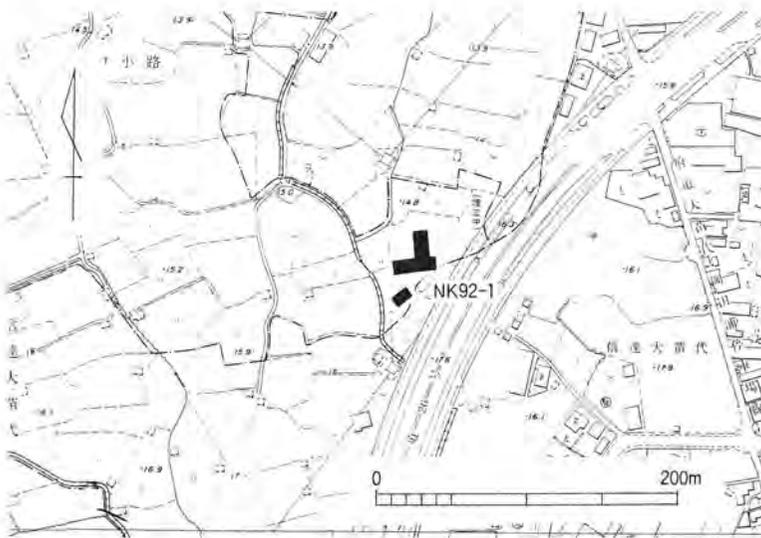
PL.3 男里遺跡および男里東遺跡調査区位置図



PL.4 本田池遺跡・中小路遺跡・狐池遺跡調査区位置図



HN92-1区

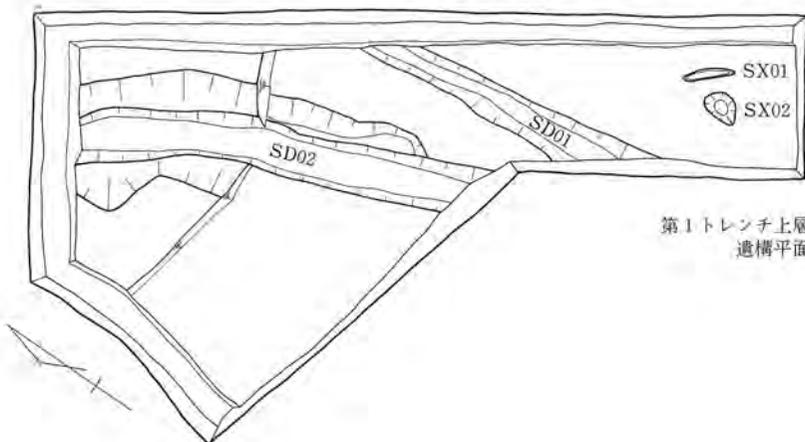


NK92-1区

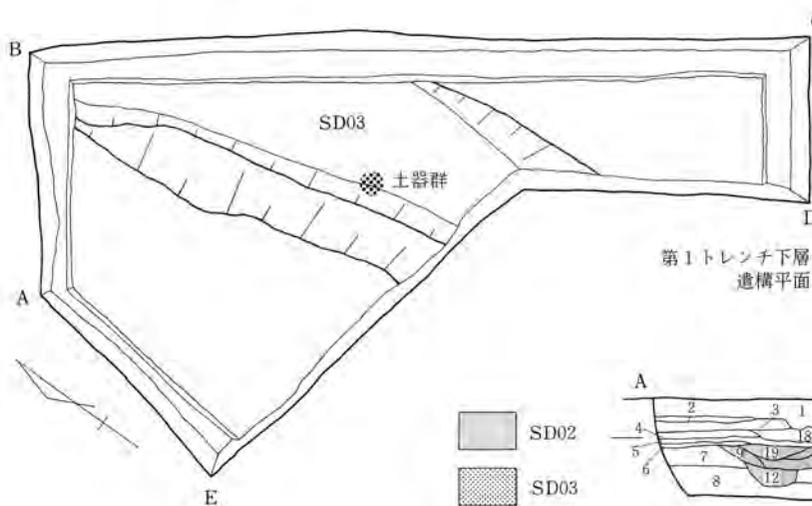


KI92-1区

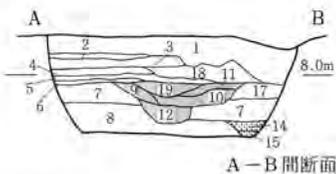
PL.5 男里遺跡92-1区平面図および断面図



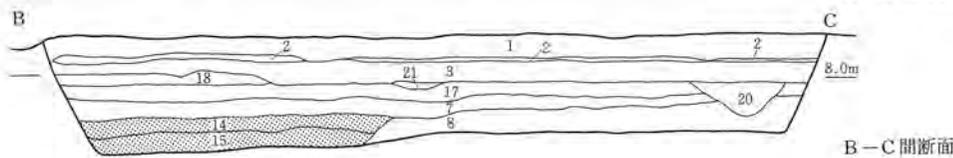
第1トレンチ上層遺構平面



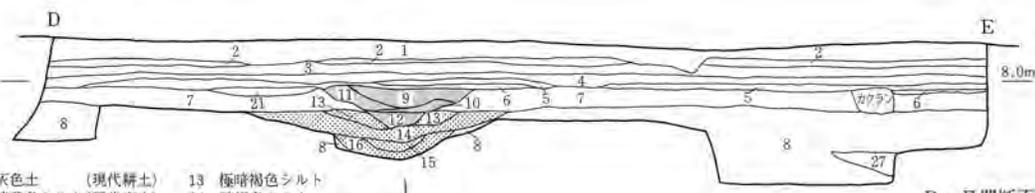
第1トレンチ下層遺構平面



A-B間断面

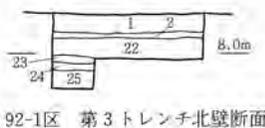


B-C間断面

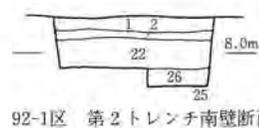


D-E間断面

- |                |                   |      |
|----------------|-------------------|------|
| 1 灰色土 (現代耕土)   | 13 極暗褐色シルト        | SD03 |
| 2 淡黄色シルト(現代床土) | 14 暗褐色シルト         |      |
| 3 灰黄色シルト(旧耕土層) | 15 クサリ礫混じり暗褐色粘土   | SD02 |
| 4 黄灰色シルト(※)    | 16 暗黄灰色粗砂         |      |
| 5 黄褐色シルト(+)    | 17 黒褐色シルト         | SD01 |
| 6 黄褐色シルト(旧床土層) | 18 灰黄色シルト         |      |
| 7 黒褐色シルト       | 19 極暗黄褐色シルト       | SD01 |
| 8 暗黄褐色シルト      | 20 黒褐色シルト         |      |
| 9 灰黄色シルト       | 21 暗灰色砂質シルト(SD01) | SD01 |
| 10 灰黄色粗砂       | 22 黄灰色シルト         |      |
| 11 黄褐色シルト      | 23 黄褐色シルト         | SD01 |
| 12 灰色粘性土       | 24 灰黄色シルト         |      |
|                | 25 灰色砂礫           | SD01 |
|                | 26 暗褐色シルト         |      |
|                | 27 灰色砂礫           |      |



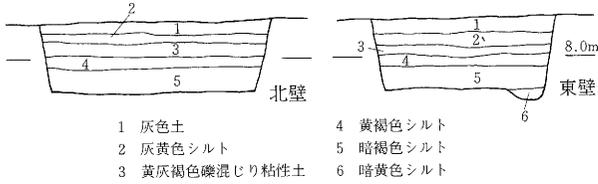
92-1区 第3トレンチ北壁断面



92-1区 第2トレンチ南壁断面

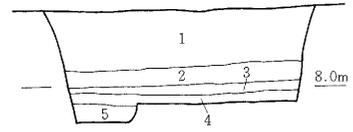


PL.6 男里遺跡調査区①



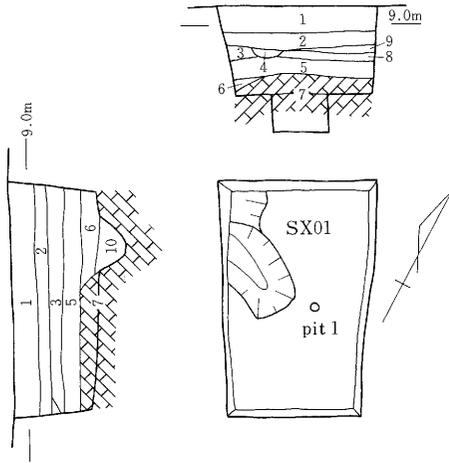
- |               |          |
|---------------|----------|
| 1 灰色土         | 4 黄褐色シルト |
| 2 灰黄色シルト      | 5 暗褐色シルト |
| 3 黄灰褐色礫混じり粘性土 | 6 暗黄色シルト |

ON92-3区 断面図



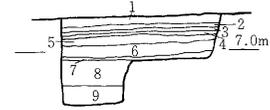
- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1 盛土      | 4 黒褐色シルト  |
| 2 灰黄褐色シルト | 5 暗黄褐色シルト |
| 3 黄橙色シルト  |           |

ON92-2区 東壁断面図



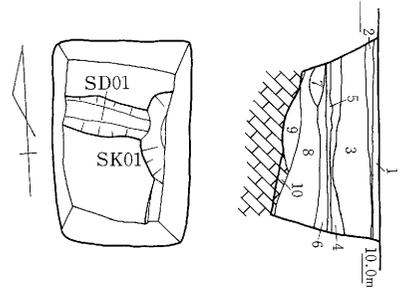
- |           |                  |
|-----------|------------------|
| 1 盛土      | 6 黒褐色粘性シルト(SX01) |
| 2 褐灰色シルト  | 7 暗黄色シルト         |
| 3 淡灰褐色シルト | 8 極暗褐色シルト        |
| 4 褐色シルト   | 9 灰褐色シルト         |
| 5 黒褐色シルト  | 10 暗黄褐色シルト(SX01) |

ON92-6区 平面図及び断面図



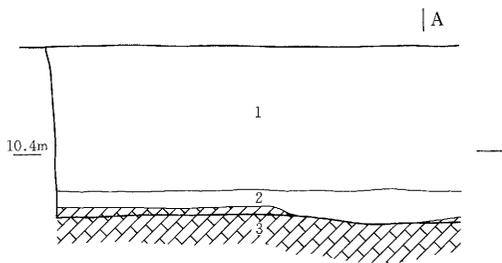
- |        |            |
|--------|------------|
| 1 灰色土  | 6 灰色土      |
| 2 褐色土  | 7 黄褐色土     |
| 3 黄褐色土 | 8 灰色粘土混じり礫 |
| 4 黄褐色土 | 9 灰色砂      |
| 5 褐色土  |            |

ON92-4区 北壁断面図

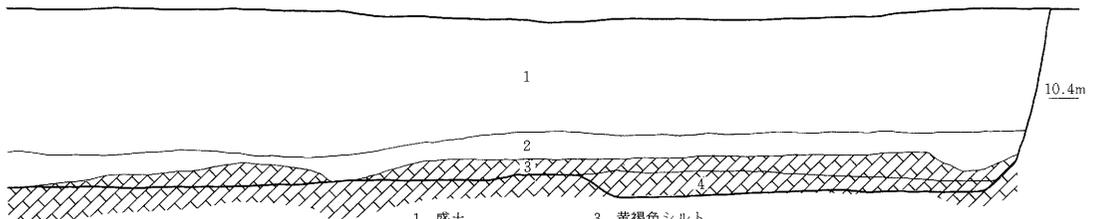


- |                   |               |
|-------------------|---------------|
| 1 盛土              | 6 淡灰褐色砂質土     |
| 2 円礫混じり黄灰色土       | 7 暗灰色含礫土      |
| 3 近世整地層           | 8 暗茶褐色土       |
| 4 淡灰色土(旧耕土)       | 9 淡茶色混じり暗茶褐色土 |
| 5 明褐色混じり淡灰色土(旧床土) | 10 暗黄灰色土      |

ON92-5区 平面図及び東壁断面図



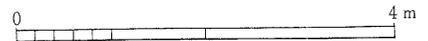
| A



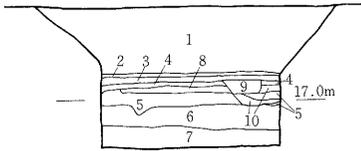
| A'

- |            |          |
|------------|----------|
| 1 盛土       | 3 黄褐色シルト |
| 2 黒褐色礫混シルト | 4 赤褐色シルト |

ON92-7区 北壁断面図

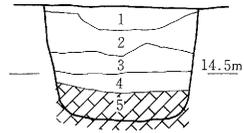


PL.7 男里遺跡調査区②



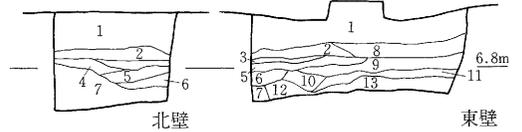
- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1 盛土         | 6 灰黄褐色土       |
| 2 褐色土        | 7 黄褐色粘質土      |
| 3 灰褐色混じり明褐色土 | 8 灰黄褐色混じり黄褐色土 |
| 4 灰褐色混じり褐色土  | 9 暗褐色混じり褐色土   |
| 5 灰黄褐色混じり褐色土 | 10 褐色土        |

ON92-9区 北壁断面図



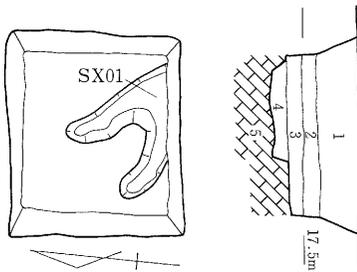
- |               |          |
|---------------|----------|
| 1 盛土          | 4 暗黄灰色砂礫 |
| 2 黄色混じり暗灰色土   | 5 暗灰色礫   |
| 3 暗灰色混じり黄色砂質土 |          |

ON92-8区 東壁断面図



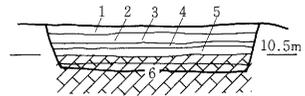
- |           |              |
|-----------|--------------|
| 1 盛土      | 8 灰褐色粘性土     |
| 2 褐色粘性土   | 9 暗灰褐色粘性土    |
| 3 褐灰色粘性土  | 10 暗灰色粘性土    |
| 4 褐色粘性土   | 11 褐色礫混じり粘性土 |
| 5 灰色粘性土   | 12 黄褐色シルト    |
| 6 黄灰褐色砂質土 | 13 灰色礫       |
| 7 緑灰色粘性土  |              |

ON91-14区 断面図



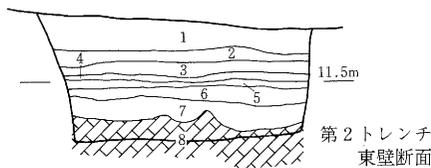
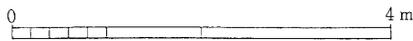
- |            |                |
|------------|----------------|
| 1 盛土       | 4 マンガン混じり淡灰褐色土 |
| 2 暗灰色土(耕土) | 5 暗黄褐色土        |
| 3 淡灰褐色土    |                |

ON91-15区 平面図及び南壁断面図



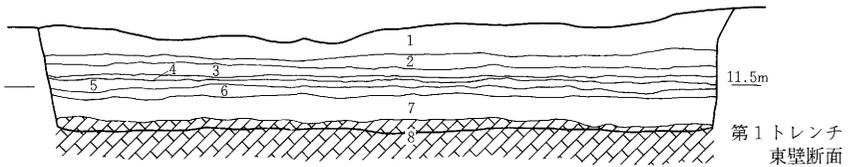
- |             |               |
|-------------|---------------|
| 1 盛土        | 4 淡茶灰色土       |
| 2 暗灰色土(耕土)  | 5 マンガン混じり黄色粘土 |
| 3 淡橙灰色土(床土) | 6 黄灰色粘土       |

ON91-16区 平面図及び東壁断面図

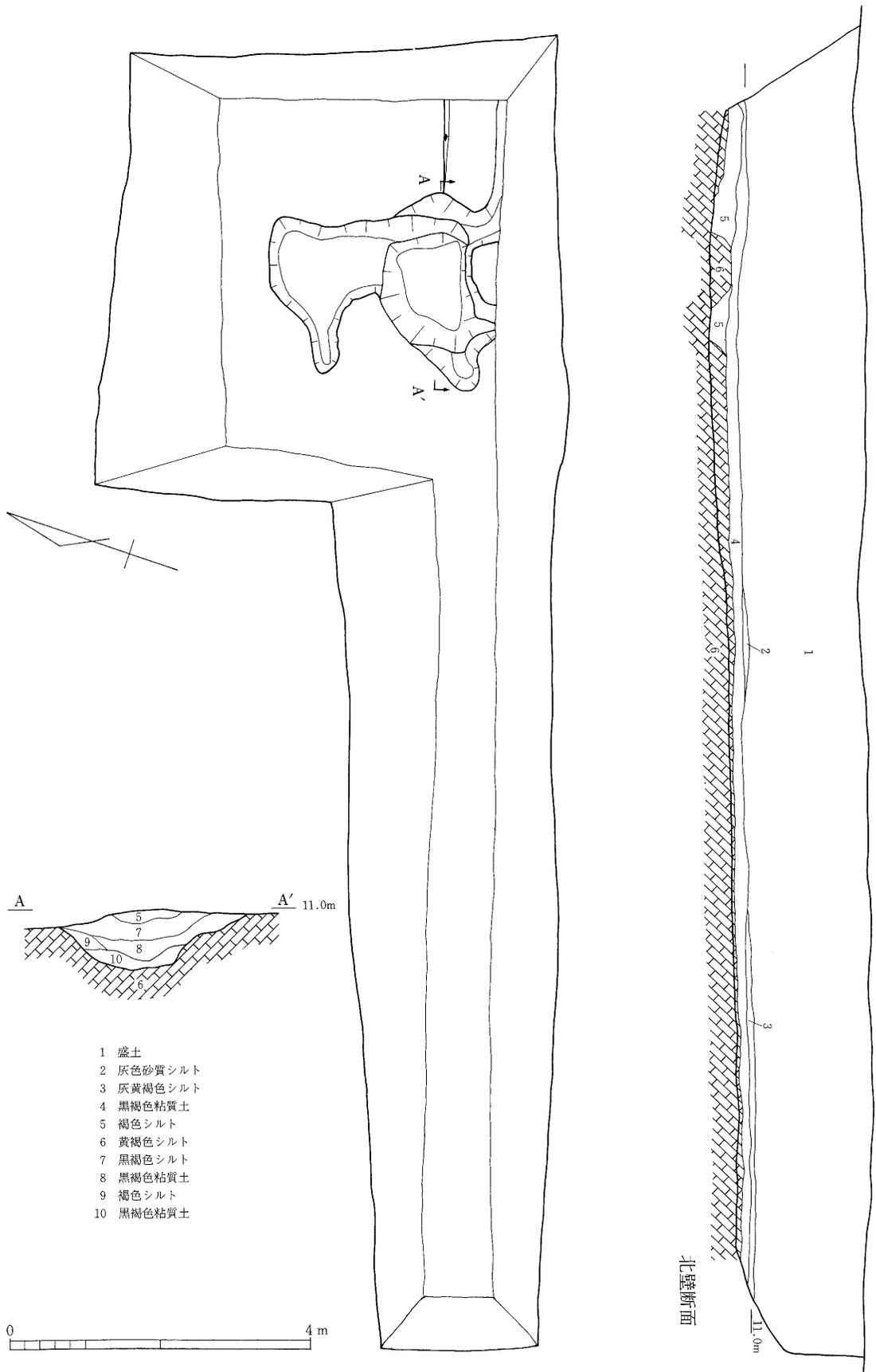


- |            |                |
|------------|----------------|
| 1 盛土       | 5 マンガン混じり灰色砂質土 |
| 2 暗灰色土(耕土) | 6 暗茶灰色土        |
| 3 淡橙灰色土    | 7 黒褐色土         |
| 4 淡黄灰色土    | 8 暗黄灰色土        |

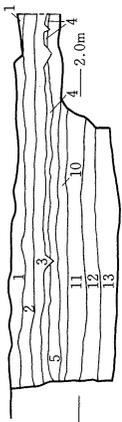
ON91-17区 断面図



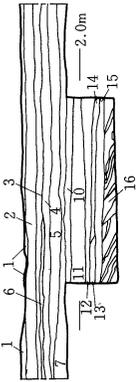
PL.8 男里東遺跡92-1区平面図および断面図



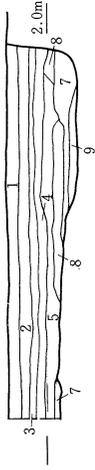
① 断面図



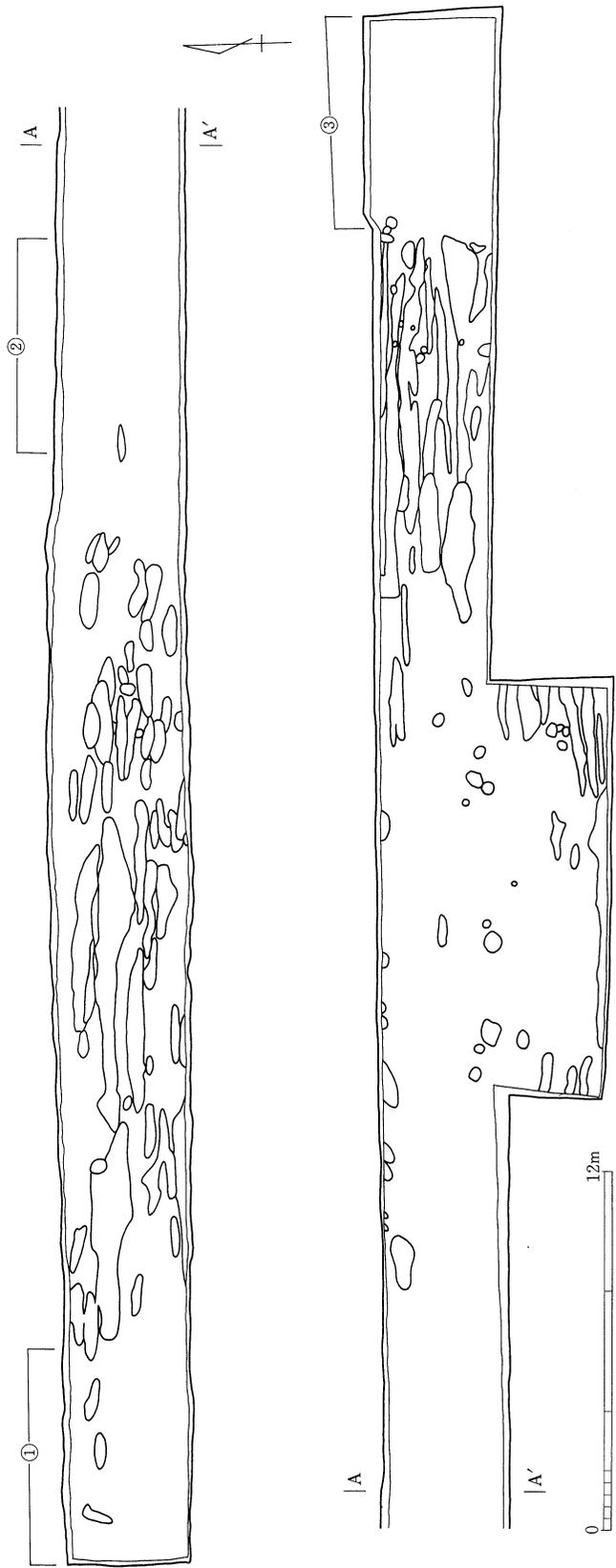
② 断面図

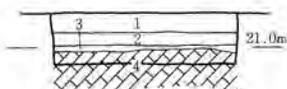
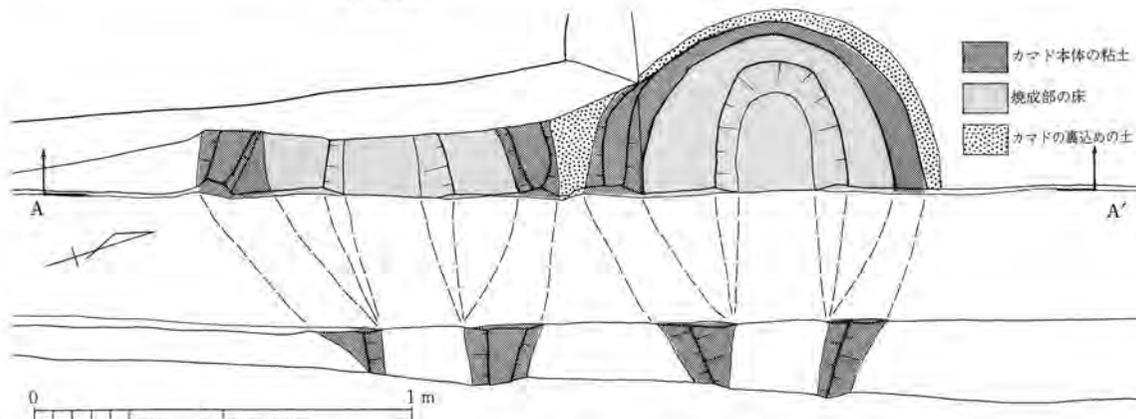
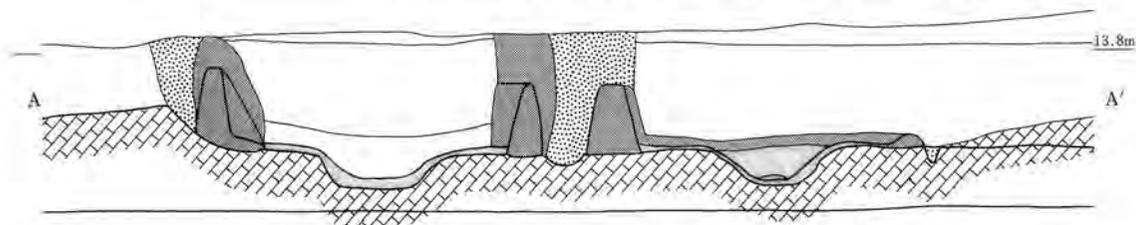


③ 断面図

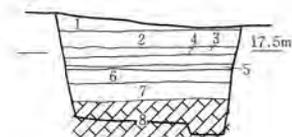


- |                  |                 |               |
|------------------|-----------------|---------------|
| 1 暗褐色土(耕土)       | 7 マンガン混じり黄褐色粘質土 | 13 褐色砂        |
| 2 褐色土(床土)        | 8 褐灰色土          | 14 にぶい黄褐色砂礫   |
| 3 にぶい褐色土         | 9 褐灰色砂質土        | 15 暗灰黄色砂礫     |
| 4 マンガン混じり褐色土     | 10 灰褐色粘質土       | 16 黒色礫・褐色砂礫互層 |
| 5 マンガン混じり灰黄褐色粘質土 | 11 にぶい褐色砂礫      |               |
| 6 明褐色土           | 12 褐色砂礫         |               |



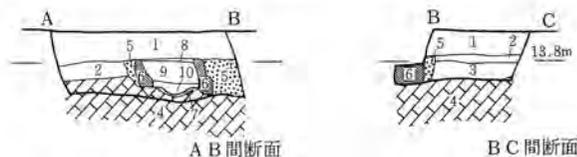


1 盛土 2 淡灰白色土 3 黄褐色土 4 暗灰褐色礫  
HT91-4区 東壁断面図

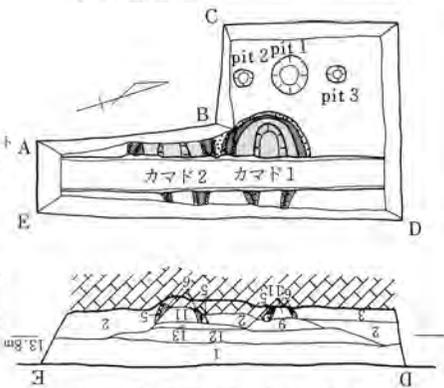


1 淡灰色土 2 黄褐色土 3 淡黄灰色土 4 マンガン混じり淡灰色土 5 黄灰色粘土 6 黄色混じり黒褐色土 7 黒灰褐色含礫土 8 淡黄灰色粘質砂

SN92-1区 北壁断面図



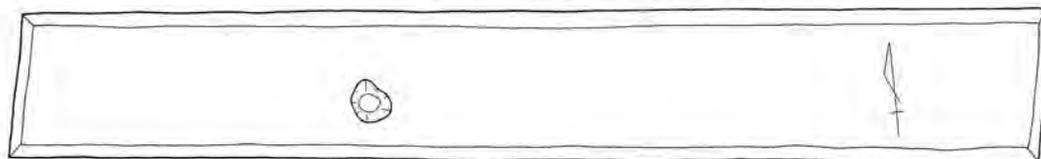
1 盛土 2 灰褐色砂質土 3 黄褐色礫混シルト 4 黄褐色シルト 5 黒褐色炭、焼土混シルト 6 赤褐色粘土(スサ入り) 7 黒灰色粘土 8 赤褐色シルト 9 褐色礫混シルト 10 褐色炭混シルト 11 黄灰色礫混砂質シルト 12 にぶい黄褐色シルト 13 浅黄色礫混砂質シルト



SM92-1区 平面図及び断面図



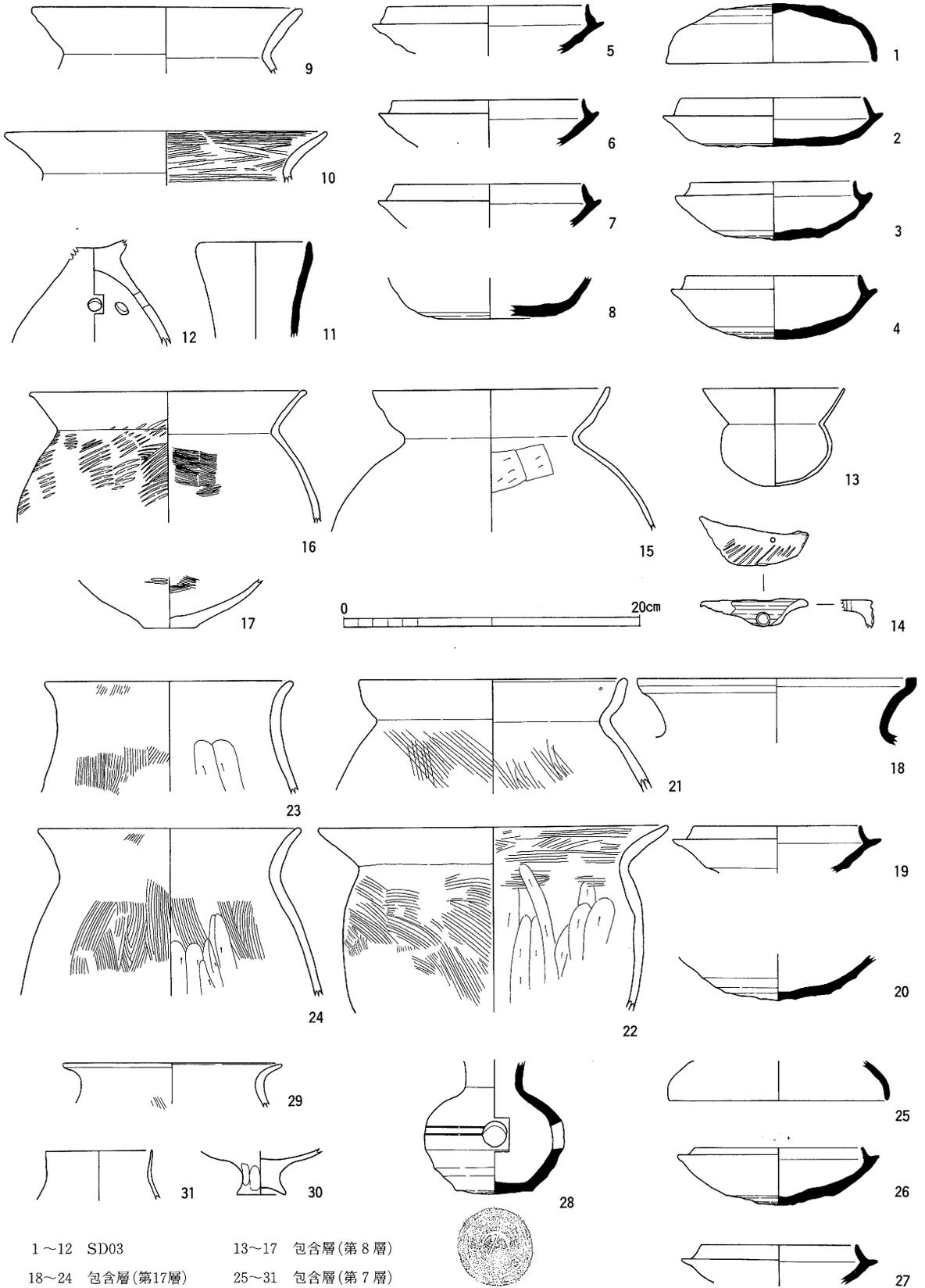
1 暗灰色土 2 黄色混じり淡青灰色土 3 礫混じり暗赤褐色粘土



BS92-1区 平面図及び北壁断面図



PL.12 男里遺跡92-1区出土の土器



1~12 SD03

13~17 包含層(第8層)

18~24 包含層(第17層)

25~31 包含層(第7層)



第1トレンチ上層 (西から)



同 下層 (西から)



第1トレンチSD03断面（西から）



同上 遺物出土状況（北から）



第2トレンチ (北から)



第3トレンチ (南から)



92-2区 (西から)



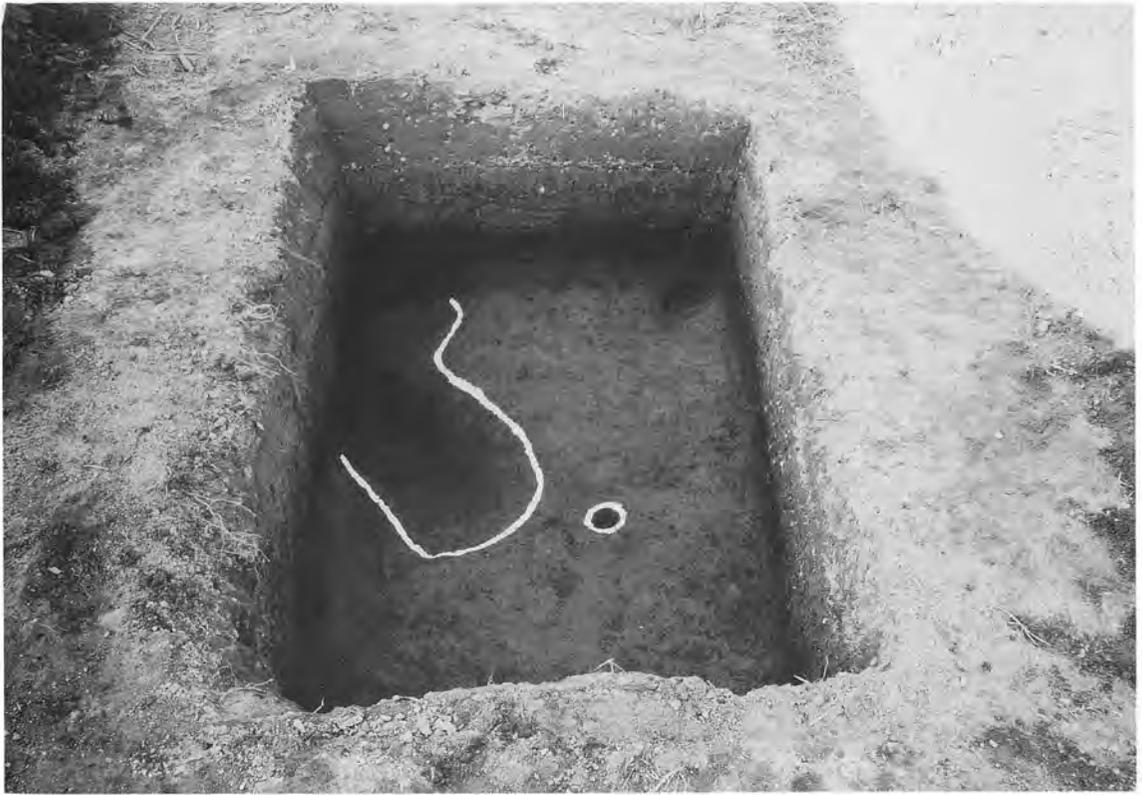
92-3区 (南から)



92-4区 (南から)



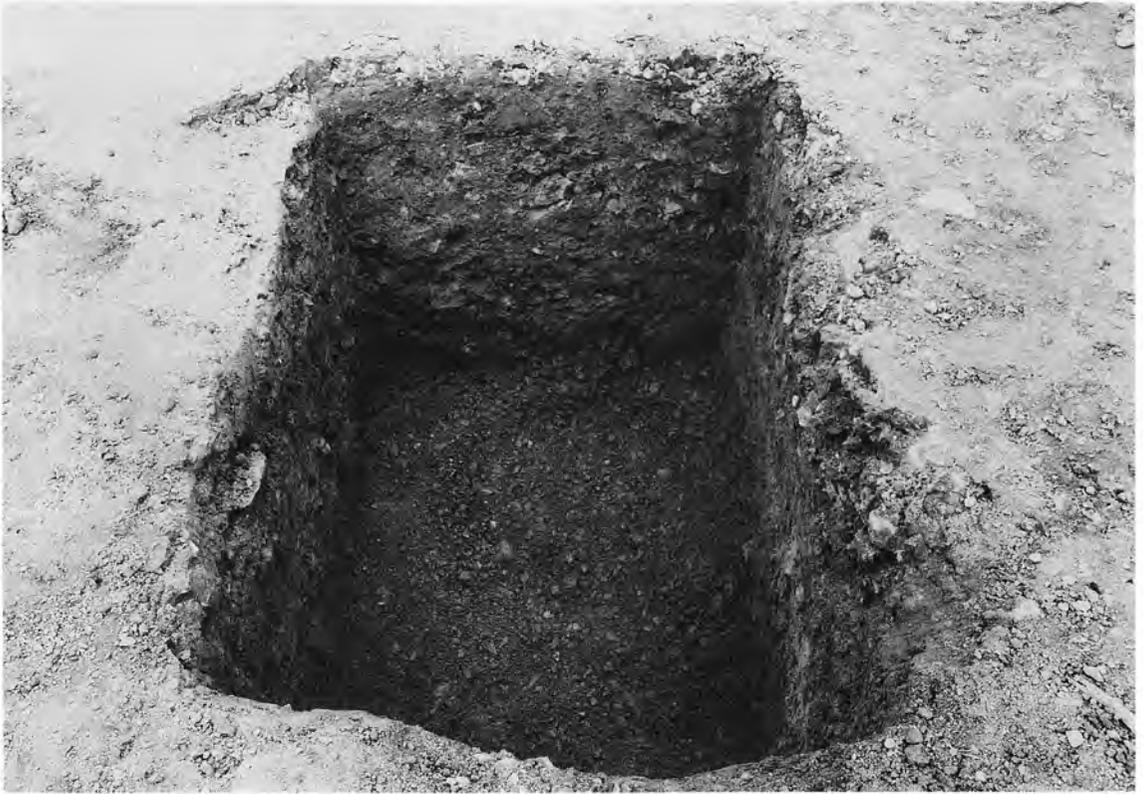
92-5区 (北から)



92-6区 (南から)



92-7区 (東から)



92-8区 (北から)



92-9区 (西から)



91-14区 (西から)



91-15区 (北から)



91-16区 (南から)



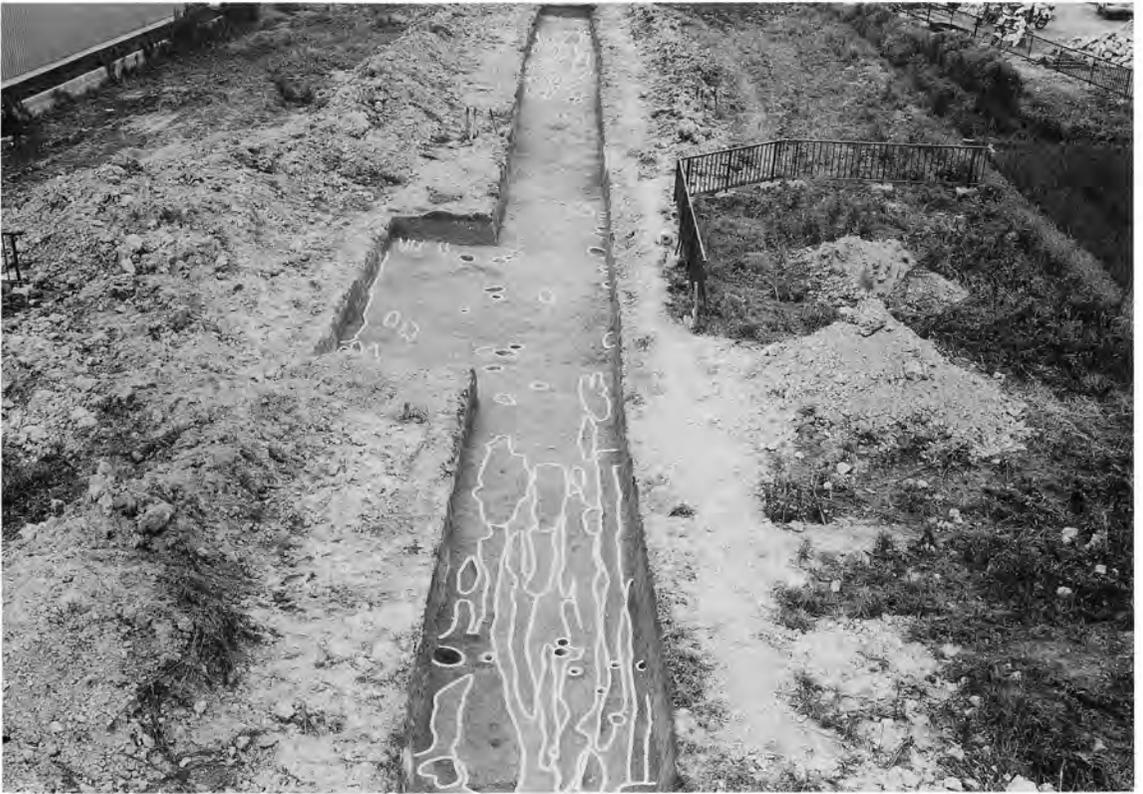
91-17区 (南から)



92-1区 (東から)



同上 SK01 (東から)



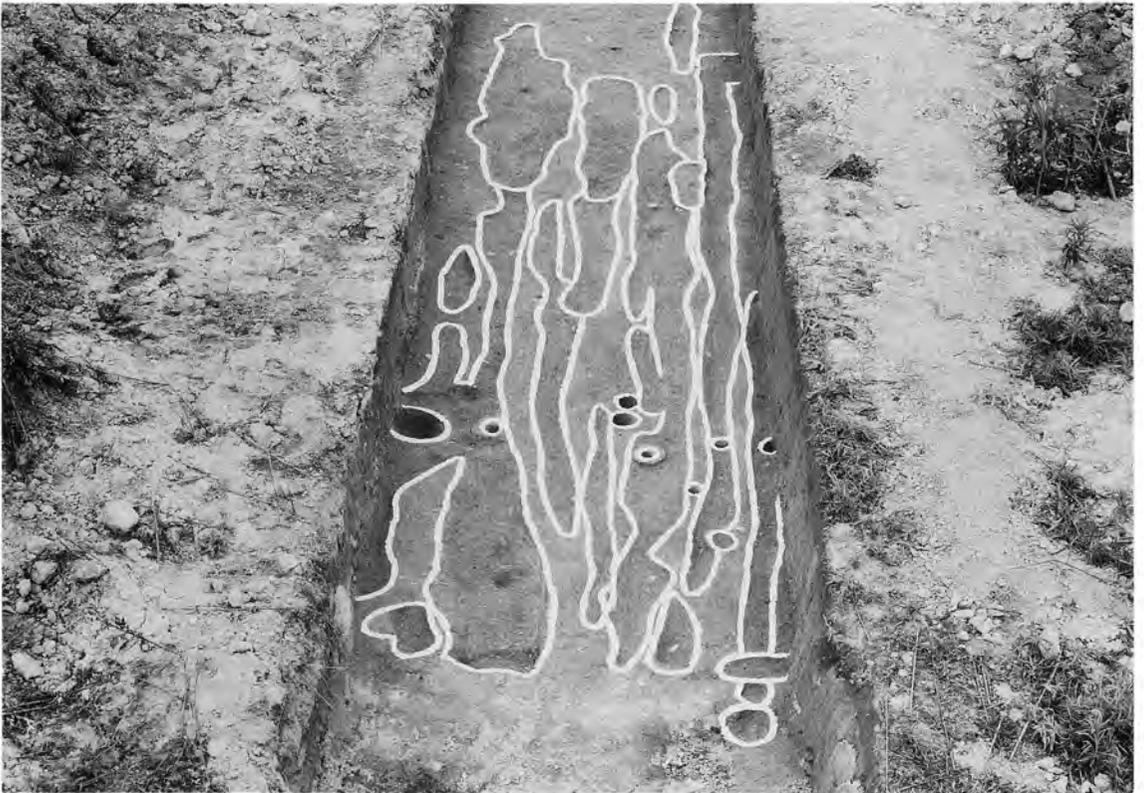
92-1区 (東から)



同上 (西から)



92-1区北半 (東から)



同上 南半 (東から)



HT91-4区 (南から)



SN91-1区 (西から)



SM92-1区 (北から)



BS92-1区 (西から)



全景 (北から)



同上 (南から)



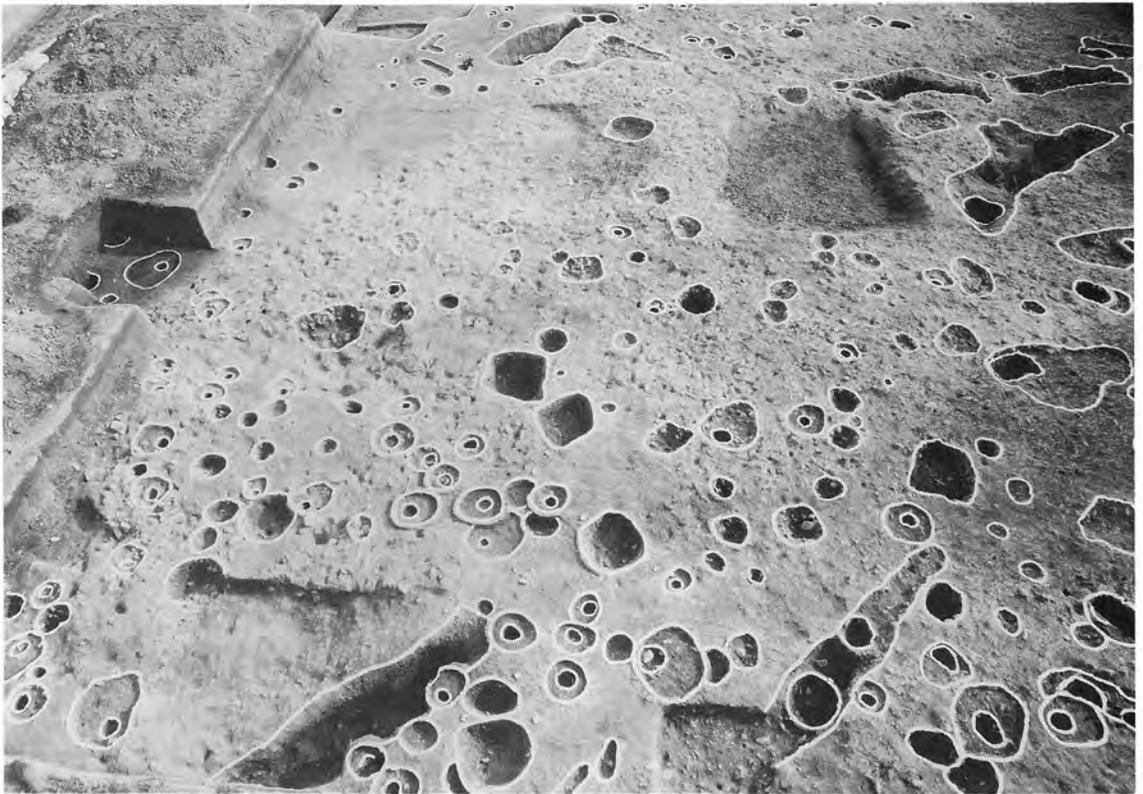
SB01・02 (北から)



同上 (南から)



SB03 (北東から)



SB08 (北から)

